# 水辰會雜誌

第四高等學校校友會

第參拾參號

明治三十五年十二月九日發行

（非賣品）

# 北辰會雜誌第參拾參號目次

## 論說


學生の志氣抱負　吉村但豊
歌人としての和泉式部《續》　八波則吉
北辰會雜誌の衰滅を憂ひて望を新來英俊の諸兄に囑す　冠木劍狂
輿論について　水光生
雄辯と吶辯　蘆江漁夫
學生と戲劇　堀田相爾
方丈記に顯はれたる鴨長明の世界觀及ひ人生觀　木曾淨專


## 雜錄


歷史的起源の諺　浦井恒堂
兼六公園案內記　案內者


## 文苑


落日　木曾紫光
河北潟の畔　山崎麓
暴風雨の箱根　武藤七郎
初旅　中野並助
至誠堂記　村上函峰
有若論　微子學人
月下低調　靜池庵
櫨紅葉　栗木風草
夕ぐれ岸に立ちて
和歌
俳句


## 雜報

新任教官。卒業式。第十四回卒業生氏名。卒業の諸氏を送る。新入の諸氏を迎ふ。蕪木漫言。東京帝國大學通信。文科大學通信。國語會記事。テニス部報告。禍なる哉。癖癖、盲、啞。

## 寮報

時習寮送別大茶話會記。新入寮生宣誓式。時習寮本學年第一回小茶話會

## 附錄

一泊行軍演習記事。明治三十四年度第四高等學校北辰會收入支出決算報

# 北辰會雜誌第參拾參號

## 論說

### 學生の志氣抱負

吉村但豊

學生たる者は須く遠大なる志氣抱負を蓄へさるべからす、苟も其の志氣抱負にして遠大ならざらんか、恰も浮萍の如く、常に世間の風潮に漂はされて其の身の歸着する所を知らす、品性日に墮落、素行月に壞敗、遂には終生社會に立つこと能はざるのみならす、國家の厄介物と爲り了らんのみ。

老生は常に人に告ぐるに、品性を修養し、人格を高尙にすべしとの言を以てす、此の言たる、近來、學者、教育家の頻りに口にする所の語にして、敢て耳新らしき言にあらす、又、其の理由とする所も誠に平易、明白なるか故に、之を聞く人も亦例の繰言を聞くものかなとて、深く心を留むる者少なきが如し、蓋し彼の眞理なる者は、啻に艱言、難語の中にのみ包含せらるるものにあらずして、反て平易、簡明の言の上に顯はるるものなれは、其の言の平易、簡明なればとて決して輕々看過すべきにあらず、人々各自に深く此の言の由て來る所を察知し、審思、明辨の工夫を凝さざるへからず。

明治維新以來、上下一般に西洋文明の大風に吹捲くられ、單に其の外形に顯はれたる物質上の美

觀に目を眩まし、只管之に倣はんことのみを是れ事とし、深く其の文明の由て來る所を講究する者極めて少なく、輕佻、浮薄俗を爲すに至れり、而して身を學問に委ぬる者も、亦知らす識らす、此の惡俗に風靡せられ、古來、士君子たる者の潔しとせさる所の言動をも、自ら之を口にし、之を身に行うて、恬として耻つる所なきものの如し、豈に寒心すへきの至りならすや。

近時學生を評論する者、或は元氣消沈、風紀廢頽と云ひ、或は奢侈淫靡、品行墮落と云ひ、或は自暴自棄、惡戲暴行と云ひ、或は薄志弱行、懶惰放逸と云ひ、或は傲慢不遜、秩序紊亂と云ひ、あらゆる不祥の文字を並へて之を攻擊し一も餘す所なきものの如し、我輩、身學校に在りて朝夕親しく學生の言動を目擊する者、時として不良、非行の學生を見ることなきに非さるも、決して多數の學生か不良、非行なるに非す、質樸、謹愼なるあり、正直、廉節なるあり、篤志、勉學なるあり、博學、多識なるあり、才智英俊なるあり、膽力剛毅なるあり、各〻其の性質に因て其の趣を異にすと雖も、要するに、大に愛すへく、大に敬すへくして、將來國家、社會の負擔に堪ふへき者亦尠なきに非されは、現今の學生を見て、世人の攻擊せるか如き不良の徒のみ多しと思ふは大なる誤りと謂ふへし。

然れとも、今、廣く目を放て一般學生の狀態を視るに、論者の評するか如き不良の學生も亦甚た多からさるに非さるか如し、蓋し、現今學校に入る者の多くは、單に衣食を得るの近道を求めんか爲めにして、自己の身心を鍛錬せんとの爲めにあらす、故に、學校に於ては唯卒業證書だに得れは、一も他に望む所なしとて、學問の廣狹、知識の淺深、品行の善惡の如きは敢て之を問はす、單に試驗に及第することのみを目的とする者少なしと謂ふへからす、是れ畢竟するに、一は、心志未た定まらすして早く故鄕の地を離れたる者多きと、又、一は、物質的文明の外觀、殊に、謂はゆる貴顯、紳士なる者の驕奢に誘惑せられ、他日世に出つるの時、己も亦彼れか如く、贅澤なる生活を營まんことを希ひ、之れか爲めには何は兎もあれ、學校の卒業證書こそ必要なれとの考を有する者の多きとに原由するものの如し、然り而して、此等の弊害たる、實に社會、國家の爲めに憂ふへき所のものなれば、之れか救濟の道を講するは刻下の急務に屬するか故に、講談、演說に於て、又は新聞、雜誌に於て、之を攻擊するは敢て惡しき事と云ふにはあらされとも、抑も亦、此の弊害の由て起る所の本源を尋究せす、一に之を學生の罪に歸するは、決して其の當を得たるものと謂ふへからす、蓋し此の罪たるや、家庭も、社會も、制度も、新聞雜誌も、亦各々其の責任を分擔せさるへからす、彼の、今日最も憂とする所の、風俗墮落は、家庭と、謂はゆる貴顯紳士なる者主として其の責を擔ふへきにあらさる乎、薄志弱行は、社會の組織重もに其の責に任すへきにあらさる乎、自棄自暴は　學校制度幾分か其の責を分つへきにあらさる乎、奢侈淫靡は、新聞、雜誌亦大に其の責を負ふへきにあらさる乎。

以上の所說を聞く者、或は曰はん、現今の腐敗は、社會一般の腐敗にして我等の知る所に非す、今日の墮落は、父兄、先輩の墮落にして我輩の關かる所に非す、國政に任する者にして斯く〳〵の行爲あり、我等か此の事を爲す當然なり、父兄、先輩にして然か〳〵の所行あり、我輩か彼の罪を犯す何の不可あらんと、何そ其の意氣の賤劣にして、其見地の卑下なるや、何そ其の志の野鄙

にして、其の膽の狹少なるや　苟も高等の教育を受くる者にして、斯かる賤劣、卑下、野鄙、狹少の思想を有する者多しとせんか、將來、我が國の運命果して如何、社會も忽ちにして壞亂し了り、國家も立ろに衰殘し了らんのみ。

惟ふに、意氣と見地の高き者、志と膽の大なる者は、其の心必ず翼々として小なり、大事を爲す者は必す細事を愼むなり、多數の學生中には、或は、懇話會なと衆人の目前に於て、野卑極まれる嬉戲を演して得々然たる者、徒らに長上を凌辱するの言を發して傲々然たる者、亦之れなきに非さるか如し、前者は、己か心の野卑賤劣なることを明かにし、人を喜はしめんと欲して反て之を怒らしめ、後者は己の膽の偏僻、狹小なることを示し、人を辱しめんと欲して反て己自身を辱しむ、彼の、居常、卑劣の奇行を演して自ら快とする者、亦、大言壯語を放て自ら豪とする者は、斷して、世に事を爲す能はさるの徒なり。

老生か親愛する所の四高學生諸子は、其の志は高くして且篤き筈なり、其の膽は大にして且剛き筈なり、學問は勉强する筈なり、言行は謹愼する筈なり、諸子は、將來に於て、我が國家を負擔すへきの人なり、我か社會を組織すへきの人なり、其の任や重く、其の責や大なり、彼の書生なるか故に細行を顧みすと云ひ、書生なるか故に小事に頓着せすと云ふか如き、卑屈、賤劣の思想は一切之を棄却し去り、須く、書生生活の時に於て、既に、自ら進んて潮流の混濁を清淨にし、風俗の頽敗を挽回する底の志氣と抱負とを有せさるへからさるなり。

---

# 歌人としての和泉式部

第四章　本論　下

第五節　短歌の裝飾

八波則吉

以上題目を分つて式部が和歌の大概を示しぬ。今や最後に修辭上より觀察したる彼女が技料を簡單に述べんとす。抑も韻文といはず散文といはず、苟も文學的著作として人の美的感想に訴へんとするものは、繪畫彫刻と同じく、必ず多少の裝飾なかるべからず。況んや短歌の如く字數に制限あるものに於ては特に其の用意あるべきは勿論なり。されば見よ、古來我國は歌論としては殊更に之が科學的研究をなさゞりしにもせよ、名ある歌人は夙に之を心に期して絶えず之が實行に勉めたりしにあらずや。夫れ和歌に餘韻あり風味ありなどいふもの　畢竟は詞想の調和に外ならず、而して詞想の調和は則ち脩辭の根本原理たるなり。さて短歌の裝飾に（一般文學の修辭と同じく）二樣の別あり。曰く外形の裝飾、曰く內容の裝飾これなり。左に順を逐うて之を說かん。

## 一、外形の裝飾

其一　句格

短歌の句格に五種の別あり。初句絶、二句絶、三句絶、四句絶、及び五句絶これなり

五句絶　橘守部の調査に由るに、記紀万葉等より近代の歌集に至るまで我國の短歌を通じて最も多く用ゐられたるは五句絶にして、氏は之を句格の基礎となせり。思ふに五句絶とは、一首の意を滯りなく引きつゞけて最後の句にて止まりたるものなれは思想を述ぶる自然の法なり。譬へば

鳥の飛んで木に止まり、水の流れて海に注ぐが如きか　殊に此句法の上古の和歌に甚だ多きは、人の心素朴にして思ふ所を只そのまゝに詠み出でたるもの多ければ也。和泉式部が歌集にも此種の句格頗る多し。例へば

夏の夜は槇の戸叩き門叩き人たのめなる水雞鳴くなり。

悲しきは同じ身ながら遙かにも佛によるの聲を鳴くかな。

等枚擧に遑あらず

（因に記す、此章に掲ぐる例歌は、式部が歌集中名吟として特に予が拔萃したるもの〻中なり。されば其歌自身にても十分前章に紹介する丈けの價値ありと信じたるものを、便宜に從ひ玆に出す事とはなせるなり、讀者幸に其心してよ）

さて此句法によるものは、句調大むね流麗圓滑、思想極めて單簡純潔、一讀判然として其意を知らしめ、一詠直ちに其歌を暗誦せしむるの功あり。然れども一利の存する所は一害の伏する所、春海洋々波瀾なく起伏なく、平道坦々屈曲なく變化なければ、動もすれば五句絶の短歌は平々凡々たる散文句調となりて、乾燥無味恰も蠟を嚙むか如き心地せしむるものなきを保せず　いはゆる「たゞごと歌」なるもの多くは此種の和歌なり。左に擧ぐる二首の如きは尙ほ式部が佳作の中には入るべしといへども　やゝ如上の弊害をも併せ存するを見るにあらずや

餘所にても同じ心に有明の月を見るかと誰に問はまし。

夕暮に物思ふ事はまさるかと我ならざらん人に問はゞや。

二首共に疑問法を用ゐたる故幾分か單調を破りたりといへども、尙ほ散文的てふ讖は免れざるべし。況んや世の凡俗輩が、內外共に修辭上何等の用意なくして、しかも此句格に由れるもの豈に單調ならざらんと欲するも得べけんや

この弊を避くるに法あり、曰く一首の中途にて切る事すなはち是なり。先づ四句絶及び二句絶より說かんか。守部いはく、「夫れ和歌は心に思ふ事を云ひ出づるものなれば物につき事によりて切るゝ事も無くてはえあらず。切るれば四句の下にて切れ。それを置きては二句の下にて切れ。これ古のめでたき歌の大方の定まりの如し」と。而して例の統計によれば、「句絶の歌記紀に十六首ある中十三首は四句絶なり。萬葉に句絶の歌八百首ある中五百首あまりは四句絶なり」と。然るに和泉式部は甚だ稀に四句絶を用ゐぬ。集中はつかに

慰むと聞けば語らまほしけれど身の憂き事よ。いふ甲斐ぞなき

つれ〴〵と秋の日頃をふるまゝに思ひ知られぬ。あやしかりしも

の一二首あれども、これすら完全なる四句絶にあらずして、萬葉の

物をぞ思ふ。妹に逢はずて　人皆知りぬ。わが戀妻は

常磐にいませ。貴きわきみ　思ほゆるかも。戀のしげきに

などゝ比すべくもあらず。予は再び彼の女が集を遍ねく求めて、羈旅の歌として前號に掲げし

「物憂くなりぬ。淀の渡は」の外

白浪のよるには靡くなびき藻のなびかじと思ふ。我ならなくに

郭公世にかくれたる忍び音をいつかは聞かむ。今日し過ぎなば

の稍〻万葉に似たるを發見したるのみ。彼女が歌集の小序に由るに、和泉式部は万葉集を藏したりしが如し。何となれば或人の少時借せといひやりたるに「何か此世にしふもとゞめん」とて万葉集を貸し與へたる由見ゆ。かゝれば式部は日比其の集をも讀みたりしならむか。而して彼女が歌集には万葉集最多の句格ともいふべき四句絶の極めて乏しきを以て想像するに、此句格は古今以後大に衰へたるものなるべし。三代集概して此句格尠く、赤染衛門、伊勢大輔等の家集に至ては完全なる四句絶の和歌は殆んど一首だも見出す事能はざるなり

之に反して記紀万葉に尠くして却て三代集並に後拾遺集等に多く見ゆるは二句絶なり。式部が集にも

長閑なる折こそなけれ。花を思ふ心の中に風は吹かねど

岩躑躅折りもてぞ見る。せこが着し紅染の色に似たれば

などを始めとし　其例甚だ多く　凡そ倒裝の和歌の半數は此種に屬す。思ふに上古は人の心淳朴にして智識の程度も低かりしかば、短歌の如き單簡なる詩形に於ても轉意の甚だしきものは之を厭ひ、勉めて之を避けしを以て多くは五句まで率直に詠み續け、偶〻倒裝をなすも單に最後の二句を上下するに止まりしものか。もしくは眞淵のいはゆる「古の歌は歌ふものなれば」其調も大凡はなだらかに直き心もて詠めりし故か。要するに外形の上に於て古今以後の歌は此句格の上に痛く万葉(並に其以前のもの)と異なるを見る也

光彩は一に學友諸氏の熱誠にありて存ずるを以て、余輩の職たる單に犬馬の勞に過ぎずとなし、刻苦精勵只た先輩諸賢の示導に倚賴し、直摯なる學友諸兄の鞭撻の下に、聊か其の責任を完うせんことを期せしに、圖らざりき學友諸兄の冷淡よく斯の如くならんとは、

本誌寄稿を募るの際に當りて余輩は思ひき、北辰校下六百の健兒、異日皆邦家の重器に任ぜんことを期す、思ふに其の脩養の時果して幾干ぞや、人生世に處る五十年、而かも之を以て長からずとせば、夏期八旬の休暇豈に徒らに消費するを得んや、何ぞ況んや此の脩養時代に於けるの八旬をや、然れども夏期休暇は炎暑薫赫なるがために天下の青衿概ね閣然徒消するもの多し、獨り我が校友に至つては斷じて然らず、縱令高山白雲に高嘯し、靈澤深淵に放浪せしと雖も右手杖を曳き左手須臾も書籍と相離れず　此を以て今や八旬の休暇全く終りて歸來せるに際し其間、其膽を鍊り、其神を養ひ、而して齎し來りたる所の詩趣卓見果して幾干ぞや、儻し夫れ異日に望なき斗屑の輩に至つては則ち止む、然らずんば此時に乘して得來りたる襟懷の幽趣を吐露して我が誌上を以て之を校友に語るや必せりと、思はざりき期に及んで稿を寄するもの僅に二三ならんとは、是に於てか余輩は言ふを憚らざるなり、在來の學友諸氏は終に熱誠なき遠望なきの無腸漢のみと、」抑も本誌の發行せらるゝは、編輯員の爲にするにあらざるや論なし、又諸氏の爲にするの雜誌たるにあらざるや明かなり、卽ち北辰會の雜誌にして換言せば我が辰章校の校風を外部に發揚するの機關たるなり、此を以て本誌の盛衰は惹いて以て我校の興廢を卜するに足るものなり、余輩が常に幾多高校の機關雜誌を見ては密かに其校風の奈何を察し他山の石亦以て大に資すべきものあ

りとなし、禿筆を驅て諸兄の名論卓說に由り本誌に光彩を加へ吾人辰章校の本領を愈益光明ならしめんと欲し椰諭警告幾度か其術を盡して遂に效なく止むことを得ずして望を在來の諸氏に絕ち更に新來夥多の俊秀に囑する所以なり、

新凉既に郊墟に入り、燈火愈親むべくこれれよりして東籬の晩色漸く露を含み霜を帶び、芳菊叢生して濃淡艶を競ひ、遂には紅葉錦を綴るの佳景を染出して以て天地蕭殺の氣を償ふに至る、此時に當りて新に東西二百の俊髦來り投ずるに會ふ　余輩の歡喜何物か能く之れに若かんや、抑も今日あるの諸氏は皆朱華綠地を冐すの時に當りても猶且研鑽厭ふなく遂によく學海濤裡に名譽の花冠を戴きしものにして又以て他日國家の重鎭たらんを期するものたらずんばあらざるなり、今や此の俊髦一堂の下に立ちて學脩す、己れその識見他に劣らざるを思ふや必然にして少くとも自ら出身中學の校風を代表し乃至故山の特殊を揚られんと欲せらるゝもの、豈に敲金憂玉の文字により本誌をして楓葉綴錦の光景を描出せずして可ならんや、固より余輩は其の文と武たるとを論せず誠意兄等を待つべしと雖も、特に北辰誌上今日の衰運を憂ひて將來を卜し以て俊秀諸兄の熱誠に倚囑せんと欲すること極めて切なる所以なり、

余輩今玆に本誌の概況を述べて聊か參考に資せんと欲す、抑も本誌は發刊以來年を重ぬること今に至りて八星霜號を積むこと三十又三、以て甚た短しとなさず、施設計策その宜しきを得ば業に己に完美の域に達し得べきの今日たり、而して試にその体裁を見んか、曰はく論說曰く文苑曰はく雜報雜錄一見にして整然成熟の域に達せるの風あるが如しと雖も、而も其の內容に至つては逐號進善の跡あるを見ず、徒らに片歌短詩の末技に奇巧を弄して、猥りに綺を衒ふものあるも、眞摯筆を論說に執つて諤々正大の主張を吐き雄揮卓越の健筆を振ふものに至つては寥々として曉辰も啻ならざるの觀あり、余輩をして忌憚なく之を言はしめば執筆者の多くは徒らに平安朝時に於ける巾幗者流の口吻を眞似て、而も猶且到らざるの流惰文字を弄するに過ぎざるのみと、由來北辰誌上は徒らに筆を弄し文を飾るの具にあらざるなり、此を以て文に纖巧綺麗誦すべきの趣ありと雖も　其の旨苟も世敎に益するなくんば固より言ふに價せざるなり　若し文にして衷心より喚發したるものたらんか縱ひ運筆難澁の跡ありとも必ずや遂に人の衷心に透徹すべきものあるべく、此に至りて始めて文章は經國の大事、不朽の盛華と稱し得べきなり、凡そ文の主とする所は達意にありて存ず、故に文を草するに當つては須らく理致を以て心胸となし、氣格を以て骨子となせば足れり、語句調音の苛麗の如きに至つては終に絢飾の末技に外ならざるなり、

往年の北辰會雜誌は今の北辰會雜誌に比して、紙質体裁遙かに其の下にありて而も所謂美文と稱するものゝ如きは妖艶紈袴者流の手に成りしが如き嬌体なかりしと雖も、直截の筆よく一氣に呵し去り生氣中に磅礴して一片閃々の耿光天に冲するものあるを見る、之れ則ち先達諸兄の熱誠眞摯よく斯の如くならしめたるに外ならざるなり、希くは新來英俊の士、三更の燈下書見稍倦むの時、筆を執て睡魔を驅り靈犀雄健の論を發して氣焰萬丈、蘇歐をして寒膽失色又辞なからしめよ、嗚呼天高く海深うして能く鳥魚の飛躍に任す、我が北辰誌上亦敢て之の種の概なしとせんや、余輩は爰に在校期間の最も長遠にして、而も未た在來紈袴者流の顰に傚はざる新來二百の俊髦に深

く望を囑せんと欲す、敢て請ふ諸氏執筆の勞を惜むなく陸續稿を寄せて北辰誌上に光彩を加へ以て我が辰章校々風の發揚に努められんことを至願、至囑

## 輿論について

水光生

戸を排して路傍兒童の戯むるゝを見よ、中に主動者ありてある動議を發すれば、他兒皆之に應じ、以て擬戰爭となり、競走となり、又は旗奪ひとなり、種々の遊戯を試むるに至る、今少しく眼界を轉じて靑年の集合する學校を見よ、一種の動議普く生徒間に起れば忽ち相應じて校規振興の美擧となり、或は教員排斥の怪現象となる、更に一歩を進めて廣く社界の狀況を看よ、一人持論を發表し、衆人の意氣相投ずれば忽ち社界の一問題となり、其結果は社界改良となり、公德涵養となる、斯くの如く其結果は一ならずと雖も、其間一種の流布性を有する氣の存するありて、其成立する方法は皆一なり、之を吾人は名けて輿論と云ふ、爰に一言以て之れが解釋を下せば、輿論とは人間感情の共鳴なりと云ふに過きず、人々感情の共通なる點あるによりて互に相感應して始めて爰に輿論生ずるなり、而して社界それ自身は決して輿論を創設するものにあらざるなり、勿論傳播によりて其勢力を助長することあるべしと雖も、發明と等しく其起原は個人にあり、個人の口に由りて以て創唱せられざる可からず　此創唱者こそ社界人事上の大半を左右し得る大偉人なりと云ふも敢て過言に非らざるを信ず、彼の古今に通じ、東西に亘りて大勢力を有する釋迦、基督の敎もある意味に於ては實に大々的輿論の而かも純潔なるものならむ乎、

前述せる如く、社界の如何なる階級を問はず、人間の如何なる種類を論せず、少くなくとも、數人相會すれば必ず輿論存す、實に輿論の領域や廣大無邊にして、社界の事皆之に依つて決行せらる、彼の政治家は國民の輿論を後楯として成効し、之に反すれば失敗す、豈獨り政治家のみに限らむや、新聞に、誌雜に、說く所は皆輿論を喚起せんと勉むるものなり、然らずんば輿論に媚びんとするものなり、經濟上の法則に至りても亦輿論を重要視す、故に一たび輿論發動するや、其勢力實に驚嘆すべきものあり、恰も水面の波動環の如く、一波は一波より大に漸々擴大して奔る、凡庸の輩と雖ども能く之れが波頂に乘ずれば名聲忽ち高く、賞讃の聲天地を震動することあり、譬ひ偉人豪傑と雖ども若し誤つて其波谷に陷りては容易く水面上に脫出すること難く、世の馬骨輩と座を同うして空しく埋木となりて朽ち果つることあり、嗚呼輿論の勢力亦恐るべき哉、然り而して輿論の發動に二方面あり積極、消極乃ち之れなり、蓋し創設的或は賞讃的輿論は前者に屬し破壞的或は非難的輿論は後者に屬するならむ乎

熟ら考ふるに現今社界に稱せらるゝ輿論は果して如何、正しき輿論によりて社界の事皆決行されつゝあるか、否怪しき輿論のみ多く疑はしき輿論のみ存す、先つ彼の首唱者を見よ積極的輿論卽ち創設的、或は賞讃的の首唱者は如何に世人の耳目を自己の一身に聚集して以て名聲を博せんとするものなるか、若しくは層一層卑野なる利益の爲めにするものならんか、何れにせよ野心に基因せざる動機は稀なり、又消極的輿論卽ち破壞的或は非難的の首唱者は多く他人の成効を妬み名譽を羨むものなり、然らざれば好奇心に驅らるゝ狂氣の野次馬連に外ならざるなり、斯くの如き

首唱者によりて創設せらるゝ輿論果して正しき乎、之れ余の不正視する所以なり、而して應ずるものは唱ふるものゝ半面なり、飜つて之に應ずるものは如何、巧みに人間の弱点のみ利用せられて而も其說の是非曲直を糺問して相應ずるものは少なく、自己の頑固執拗なりと世人に解せられんことを恐るゝ薄志弱行の輩のみ、然らずんば利己の爲め、或は交際上止むなく盲從的に相應ずるの人のみなり、嗚呼吾人は何が故に其說の是非善惡を糺さずして亂に雷同せさる可からさる乎、世人に非難せられ排斥せらるゝもの必しも惡ならず、クリストの磔刑、ソクラテスの毒殺は愈々我所信を强くせり、既に輿論の善惡が未定のものなれば吾人は必しも輿論の渦中に捲かれて雷同するを要せさるなり、余は世人が何故に卑劣なる野心家の爲す所に盲從的に應するかを知るに苦しむものなり、現社界は薄志弱行輩の合宿所なり斯くの如き社界に發動する輿論夫れ賴むに足らざるべし

現社界に發動する輿論果して賴む可からずとすれば如何せば可ならむ、今見易き例を擧けんか、吾人道路を過ぐるに際し汚物の遺棄しありたらむには、之を見ざるに如かす、鼻之を嗅がざるに如かざるなり、然れとも之れ消極的にして未開の民はいざ知らず、苟も開明の民の爲さゞる所、必ず公德とか公衆衛生とかに思ひ當るべし、之れと同じく吾人が處世の道を行くに當り、野心の動機に基づける輿論又は嫉妬の念より起れる輿論あらば、眼を閉ち耳を塞ぐる愚を學ばず、積極的に之を排斥して宜しく其害を除き專ら正しき輿論によりて社界萬般の事を決行せんことを勉むべし、輿論は大に盛ならしむべし、又有力ならしむへし、世の文化進むに從ひ、業の專門的に分るゝに從ひ、輿論の必要は愈々大なるなり、要は正しき輿論によりて社界の健全なる發達を起企せんのみ、然らは正しき輿論を創設する如何すべきや、社界衆人の性格を高尙善美ならしむるに在り、然れども社界衆人の性格を急變せしむるは頗る難事なり、否到底不可能のことなり、寧ろ第二の繼續者たる吾々青年の性格を高尙善美ならしめ以て第二の社界に於て正しき輿論の創設を望むに如かざらむ乎、

## 雄辯と吶辯

盧江漁夫

凡そ吾人が意志を發表するには言語と文章此二つの方法によらなければならぬ、言語は時に文章よりも便利で手數を省いて効力の點に於ても遙かに勝ることがある、言語を正しく上手に話すこと卽ち雄辨は吾人に取つては實に大切な寶で、一たび口を開けば天地を動かし鬼神を感せしめ武夫を泣かしめ懦夫を起たしむる力がある、隨分數千言を費やしても更に要領を得ず穩かに濟むことも却て荒立つて一大爭鬪を惹き起す樣なことが屢々ある、俗に「物も云ひ樣で角が立つ」といふが言葉の云ひ廻はしの下手な程損なことはない、敷居に油を注いだごと甘く流暢に雄辨を振つて有情動物は愚か無情の木石までも感動せしむるに至つては之れ位吾人に取つて大切な寶はあるまい、デモスゼネスや蘇秦張儀などが史上に其名赫々たるも全く此寶を持して働いたからである、何うしても人は雄辨でなければ損だ、よしデモスゼネスや蘇秦張儀の如く雄辨家にならぬまでも自己の意志を誤りなく明了に發表し得る迄には辯舌も練習せねばならぬ、北辰會に演說部とか講

話部とかいふ設置があるのも畢竟此所に基因するのであらう、で辯論養成の必要が爭はれない事實である以上は誰れ彼れの區別はない、誰れでも此養成に意を注いで貫ひたい、然るに我講話部や演說部は何うであらう、出演者は極少くなく、而かも其出演者の姓名は活版で押した樣で少しも變化がない、斯かる現象は畢竟北辰會々員の引込主義の性質を表はすもので餘まり褒めたものであるまい、ついでに云ふが本會雜誌部の不振も亦此性質から起つたものであらう、一年間に三回位の雜誌を發行して會員が皆甘んじて居るのは確かに自己の意志を巧みに表示するといふことに重きを置かぬからである、成程斯かる引込主義は比較的過失は少くないかも知れぬ、が然し斯くの如き主義は確かに青年の取る可からざる主義で、或る意味でいへば青年の無能を示すものである、果して青年の無能を示すものとすれば第四高の爲め大に憂ふべきことゝ云はねばならぬ、是れは話が少し脇道に入つたが兎も角も雄辯は吾人に取つては確かに大切な寶であるから辯舌は何處までも練習せねばならぬ

が然し世俗の所謂雄辨家となられては困まる、彼等は詭辨を弄するものである、瓢單鯰的の言辭を弄ぶものである、恐らくは世の所謂雄辨家即ち僞雄辨家程相手にし惡く且つ信用の出來ぬものはあるまい、成程一時一寸と胡麻化しはきくが決して治者の位置に立つべきものではない、清國古來の外交政略は皆一際瓢單鯰的で巧みに他國の鋭利なる鋒先を避けつゝ延引して彼れの勞かるゝを待つて自己の利を謀らんとするのである、實例を求むれば近時英清通商條約談判に於て英國の委員マッケー氏が盛宣懷や張之洞の輩に巧みに瓢單鯰的の言辭を以て弄ばれ遂にマッケー氏の失敗に歸したことがある、されば、此瓢單鯰的も一の政略としては或は善いかも知れぬ然しながら今將に大望を抱いて社界に打ち出でんとする吾々青年の決して學ぶべきことでないと思ふ

故に余輩は云ふ眞の雄辨家となるにあらざれば寧ろ吶辨家となれと、維新の元勳として有名なる西鄕從道侯を見よ、彼れは山縣侯より「言語を組立つる能力を缺ける人」とまで酷評を下されし人ではないか、何人でも侯に面會してはナー程（成程）の薩音以外の答辨を得るまでには此方より殆んど百千言を費やすの必要に遭遇することあるが其れさへも時に或は無効に終はることがある、侯は決して無言を欲するの人にあらで勉めて對談者に滿足を與へんとするなれども生來の吶辨にて之を奈何ともすることが出來ぬのである、然し斯くの如き吶辨家が世俗の所謂雄辯家よりも却て成功することがある、明治三十二年の第十三議會に山縣內閣が例の地租增徵案を提出して大苦戰をした此時に新に支那より歸朝した伊藤侯の援助を乞ひ帝國ホテルに議院內外の紳士連を集めて支那の土產話に託して地租增徵の必要を說かしめたことがあつた、其時に從道侯は內閣員の一人で其場所に晩れて來り聽衆の間を分けつゝ漸く壇下に出で而かも演說最中正面聽衆の方に向ひ非常に丁寧に滿身の愛嬌を以て叩頭一禮をした、其時の侯の態度は壇上に立つて雄辯を算しつゝあつた伊藤侯の話よりも寧ろ聽衆を動かして增租に贊成せしむる力があつたといふ、嗚呼默德も此に至つて積極的作用をなすといふべきである、されば吾人が演說部や講話部で辯舌の養成をするにも世の所謂雄辯家となるを欲せずして眞の雄辯家となる覺悟を持つて練習せねばならぬ、若し然らざれば損は損だけれど吶辯で終る方が寧ろ僞雄辯に勝つて安全なる策ではあるまいか

# 學生と戯劇

堀田相爾

余は學生が屢々茶話會等の席に於て、茶番をなし、以て、其興を添ふるを見る。誠に賛成の至りなり。夫れ茶番は戯劇の内なり。戯劇とは何ぞや。即ち劇の仕組、動作及ひ言語を摸擬し、始終之を滑稽の方面に導き、最後に一大滑稽を以て其局を結ぶに至る。觀者或は抱腹し、或は絶倒す。蓋し愉快の云ふに勝ふ可らざるものあるありて存するなり。戯劇を大別して三とす。普通戯劇、狂言及び茶番これなり。普通戯劇は俳優の司る所、器具服飾整然として備り、其技たる專問に之を研究し、以て公衆の觀覽に供するなり。又狂言とは能樂の間に於て之を行ふ。狂言師の司る所にして、亦專問の技術なり。茶番は即ち茶話の興を添ふるもの、演者は該席の出席者を以てし、器具服飾皆有合せの物を用ひ、題を考へ、役割を定め、趣向を研究し、然る後之を演ず。其器具の粗なる、服飾の拙なる、却りて妙なりとす。現今屢〻茶番として行はるゝもの即是れなり。昔し酒番と云ふものありき。即ち酒席に於て滑稽を演じ、皆有合の器具を用ひて、以て、其興を添へたり。然れども人或は酒を好まざるあり。是に於てか酒を加へず、茶話の席に於て之を演す。酒もなきに酒番と云ふは、おかしと云ふ事にて、こゝに茶番なる名稱を與へき。是れ即ち茶番なるもゝの出で來りし所以なり。然るに現今にては酒席に於て屢々茶番を行ふ。其誤れる事何ぞ甚しき。故に余は先づ宣告す。茶番なるものは決して酒席に於てなす可らず。必ず茶話の席に於てすべき清遊なるを以て、禁酒者にして始めて之を樂しむべく、決して飲酒者の關知することを許さゝるなり。却説、普通戯劇なるものは、現今我國に於てはあまり行はれず。故に吾人之を觀るの機會少なし。又狂言は屢〻能樂に伴ふ。然れども振はざること甚しきなり。而して茶番は一種の戯劇として常に學生の間に行はれ、茶話會の快味を發揮せしむる唯一の興奮劑として、甚た貴重せらる。而して其利益を說くもの曰く、茶番は平常眞面目に勉强する者をして滑稽の爲めに腦の鬱積を一掃しせむ。而して又學生に屢々起る悲觀的の感情を一擊の下に打破し、樂天的の方向に進むる等、其利益實に多しと。然れども又これに反對するものあり。其說を聽くに是れ亦一理なきにあらず。彼は曰く、「抑も茶番程學生の体面を汚ものなし。假令ば堂々たる學生が職人百姓等に紛してベランメー言葉を使ひ其他思慮なき小人に扮して最もくだらなき失敗を演じ、以て人を笑はしむ。其くだらなさ加減はとても觀られたものにあらず。又此際觀技者の方は强き樂天的思想を與へられて放心し、再び嚴格ならんとするも得べからざることあり。如何に平常謹嚴なる人と雖も、茶番をなせし後は何となく其人格を疑はしむるに至る。是れ少しく墮落に向へるの證なりと。かくの如く賛成者と反對者と互に相戰ひ、論議紛々として盡くるなきなり。嗚呼光陰惜むべし。徒らに論議を以て過ぐ可からず。一日も早く正當なる意見を定めこれに因りて行ふべし。余今これより少しく思ふ所を述べて其局を結ばん。抑も吾人學生なるものは何ぞや。即ち、大に學を勉め、身を養ひ、行ひを正しくし、品性を美にし、以て國家有用の人材たらんとするものこれなり。故に平常品行に注意し、學問を勵むべきは勿論なり。而して茶番に反對するものゝ說を見るに實に尤も至極にして、茶番の害たる歴然として明かなり。されども亦賛成者の說を聽くに、これまた尤もにして、吾人の大に首肯する所なり。由是觀之、賛成者は其利を見て其害を見ず。

反對者は其害を見て、其利を見ず。これ大に憂ふべきの事にして、一日も早く共同一致、以てこの有益なる技術の發達を勵むべきなり。余をして之を云はしめば、茶番には先づ次の事を廢すべし。卽ち(イ)演者が小人及下等人物に扮する事。(ロ)準備に多くの費用を掛くる事。(ハ)言語及動作の野卑なること而して人或は云はん此等を廢せば茶番なるものは成りたゝずと。然れども余をして之を云はしめよ。これ大に成りたつなり。若し以上の事を全廢するに至らば、茶番の隆盛なること其比なきに至らん。今余の茶番に關する考案を記せば(一)茶番には高尚なる人物を出し決して、野卑なる人物を出す可らず。(二)其材料は歷史、地理、科學、等學術的方向より之を拉取し來りて決して落語的なる可らず。(三)言語は叮嚀なるものを用ひ少くとも決して吾人が常に用ふる言葉より惡かる可らず。以上を要するに、全然現今の茶番を顚覆し、再び新たに高潔なる系統を組織すべしと云ふにあり。余は全く現今の茶番に反對す。而して若し以上の如く改正さるゝを得ば、余の欣喜のみならず。誠に國家の爲めに賀すべきなり。偖これにて筆をとめんとす。讀者果してよく分かりしや、否や。余今は少しく忙しきを以て細說するの暇なし若し脚本にても表示して說明したらんには蓋し甚しく明瞭なりしならんに。只乞ふくれぐれも茶番の言語の叮嚀なること、及び高尚なる人物を出すこと、幷に材料を學術的方面に取ること、は諸君各自にそれぞれ研究せられん事を望む。嗚呼若しかくの如くば茶番は實に高尚、愉快、純潔、の遊戲なり。吾人學生たるもの、豈奮勵して、これが進步發達をはからざる可けんや

---

# 方丈記に顯はれたる鴨長明の世界觀及び人生觀、

木曾淨專

## 第一章、方丈記に顯はれる長明

### 第一節、長明は如何なる主義の人なりしか、

長明著はす所、方丈記の外に瑩玉集、無名抄、發心集、文字鏁、四季物語等あり、單に其一方丈記を取りて彼が主義を定めんは頗る早計の嘲を免れずと雖も、方丈記は實に彼が一生行路の旅日記にして、世上轉變の悲相を畫き、人生浮塵の慘劇を寫して、自らかこち且つ世に訴へたるもの、而して彼は自ら其悲相の一半を分ち慘劇の一部を演じたるなり、こゝを以て方丈記に顯はれたる長明の言行は以て彼が主義を窺ふに足るべし、

凡そ名を後世に垂れ、後人の行路を照す偉人の一言一行は、必らず其由來する所なくんばあらず、特に哲學的見地に立てる人士の一顰一笑は、沈思熟慮の結果にして、最も我等後輩の思索に資すべく、其人生終局の問題に對して悲觀し樂觀するは各人の心的現象に屬すべしと雖も、其解義の如何はこれを我が心頭に置きて正邪曲直の規矩に備ふべきなり、鴨長明の如き一種奇拔なる言行は、動もすれば人を眩惑し、人を魔するものなきにあらざると共に、これを玩味せば又醍醐味の津々たるものあらん。

聞說、彼は佛敎に多少の識を有し、殊に唯識止觀に通ぜりきと、唯識止觀はこれ佛敎に於て現象開展の原理を說きたるもの、其所論の幽玄深邃なるは元より言をまたず、彼れ能くこれに成功

したりしか否かは容易に論決すべきに非ずと雖も、少くとも彼れの眼光と識量とを以て無常厭世の云爲をなさしめたるもの佛敎思想に負ふ所少からざるべし、且つ彼は又老莊の學にも通じたりきと云へば、超然として、世外に立ち、恬淡獨り善くするに至りたるも偶然に非ず、

今方丈記に顯はれたる著しき彼が世界觀想の言に聞くに曰く

それ三界は心一つなり、心もし安からずば牛馬七珍もよしなく、宮殿樓閣も望なし、今さびしき住居、一間の庵みつからこれを愛す、たのづから都に出でゝは乞食となれることをはづといへども、かへりてこゝに居る時は他の俗塵に着することをあはれぶ。

佛說に曰く、三界唯一心、心外無二別法一と、これ實に唯識の名ある所以なり、心こゝに在らざれは見れども見ねず、聞けども聞こねず、食へども其味を知らざるは萬人の自覺する所、長明が三界唯一心の語に基ける叫聲は良に由ありといふべし、然れどもこの語を以て其人生に關する根底の問題を解き得たりしか、そも心外無別法てふ妙音はつひに何處より聞くを得べかりしぞ、

こゝに六十の露消ねがたに及びて、更に末葉のやどりを結べることあり、いはゞ狩人の一夜の宿をつくり、老いたる蠶のまゆを營むがごとし、

この言に聞かば以て彼が主義を見るべきにあらずや、彼は人生を浮雲と觀じ、人生の須臾を悲しみ、蜉蝣の果敢なきをかこち、幽遠縹渺の語をなして曰く

行く川の流は絶ねずして、しかも本の水にあらず、よどみに浮ぶうたかたは、かつ消ねかつ結びて、久しくとゞまることなし、世の中にある人と住家とまたかくの如し、

斯く觀じ來りて彼は正しく長途の旅に一夜の宿をなせるものとして身を處し、一夜一鉢、行雲流水に生を委ねて山間の草庵に住ひ、茫たる天涯冥然として獨り果てぬ、

顧て思ふに彼が人生を輕ずるに至れる主因として他に高遠偉大たる感想はあらざりしか、哀れむべし彼は俗世の不平を有しぬ、この不平は彼が生涯の運命を司り、たゞ感情に左右せられたる厭世の念に鞭ち、終に晏然として精神の歸着を得るに暇あらざりき、

長明は實に「厭世の隱士」にして、「暗黑面の世界を見て光明ある世界を望む能はざりし人」なり。

## 第二節、長明厭世の原因

長明、山城國賀茂社氏人の家に生れ、父祖の業を繼ぎて社司たらんことを請ひて許されず、憤然として髮を削り蓮胤と號せり、これ彼が俗世超脫の門出にして、正に春光和照の世界を辭して金風颯々たる秋色に向へる起点なりき、

一社司の拒請は彼をして愴々として人世に斷念せしめぬ、何ぞ其膽の小にして意志の薄弱なるや、彼れ世を厭ふと稱すれども、本來自己の識深く見高くして眞に人爵の輕ずべきを主張したるに非ず、小我に失敗して大我に斃れたるなり、大我に斃れて家を辭し、山に入りて松籟澗聲を友とす、若し彼にして社司たる事を得て門第高きを得ば如何、若し彼をして愛妻愛子ありて家庭の春風を解せしめば如何、惟ふに木片石塊となりて山野に麋鹿を友とするの愚はなさざりしならん、方丈記書して曰く

我身父方の祖母の家を傳へて久しく彼所に住む、その後緣欠け、身たとろへて、しのぶ

かだ〳〵しげかりしかば、遂に跡をむることを得ずして三十余にして更に我心と一の庵を結ぶ。

すべて世の人の住家を作るならひかならずしも身のためにはせず、或は妻子眷屬のために作り、或は親悵朋友のために作る、或は主君師匠たよび財寶馬牛のためにさへこれを作る、我今、身のためにむすべり、人のために作らず、ゆゑいかんとなれば、今の世のならひこの身のありさま、ともなふべき人もなく、たのむべきやつこもなし、たとひ廣くつくれりともたれをかするゑん。

乃ち知る、前者は以て願成らず、緣欠け、自分衰へ、從來の面目を保つ能はずして、左思右考、愁然世を去て山に入り、後者は妻子なく眷屬なく、孤立の身を以て衰運に處し、家庭の和樂に遭遇せずして方丈の室以て孤身を容るゝに資せしを、依て以て彼が厭世の原因を見ば、蓋し想半に過ぎん、

實に長明が厭世は、「不平、無妻、温乎たる光を欠きたる事」これ其主因にして、偶々來りて横さまに彼の心を逸せしめたるは、曾て學び得たる浮屠南華の數篇なりき。

## 第三節、長明の眼に映せし人生及び世界

既に長明をして山に入らしめたるは世界の不幸なる暗黑面なりき、彼は戰場に敗を取りし老兵の、矢竭き、太刀折れて回復の力なきが如く、泛然として一瞥したる人生は如何に苦海の渦流なりしぞ、其涙眼に映じたる世態は如何に薄幸なりしぞ、試に前代より計へ來れば、元安三年四月二十八日の大火は、風に乘じて洛を烏有に歸せしめて焦土屍山を築きぬ、治承四年の旋風は如何に天地の不仁を示したるぞ、遷都の騒擾は榮枯の激變を見るべく、養和の飢饉は天の無情を知るべし、もしそれ元暦の地震は地に造化の惡戯怨むべきにあらずや、頻々として現はるゝ天變地異は益々彼れが悲哀の涙泉を衝きて、世界は苦なりてふ叫喚を發せしめぬ、苦境てふこの世界觀に伴うて來る人生の運命は如何に映せし、恣に天地の變異に戯弄せられて、河流の斷續止まざる無常、朝顔の夕をまたぬ無常と歩を爭ひつゝ、蜉蝣の生涯を齷齪たる苦悶に終る、世人果して幾何の天壽と幾何の希望とを持して果敢なき天地に諂び日夜小事に執着するや、利に奔り、名に走すると雖も、名利畢竟濁世の塵と知らずや、滄浪の水は以て足を洗ふべく、以て纓を濯くべからず、一粟蒼海に浮びて哀れむべし濁波に漂ひぬ、里人に介在して心を勞し、思を焦して浮世の一時を送らんより、若かず山に入りて落花流水に臥せんにはと、徹頭徹尾草葉の一露を觀じたる人世無常主義より慄然として彼は山に入れり、乃ち知んぬ、彼の意に曰く、「天地は變異多く人生は價少し、物の執着を離れて心を澄まし、齷齪の苦を去りて疾く電光石火の浮世を過ごさばや」と、初め彼れ所以らく、

知らず、生れ死ぬる人何方より來りて何かたへか去る、又知らず假の宿たが爲に心を惱ましめ何によりてか目を悅ばしむる。

彼は此意義を以て山に入れり、而して其結果は頗る樂しかりき、水火風震の憂なく、喧騒拂撥の苦なく、山高く月小に、松籟の琴、流水の曲、一として彼を慰めざるはなし、曾て塵世の苦痛を

嘆じて

いづれの所をしめ、いかなるわざをしてか、暫時もこの身をやどし、玉ゆらも心をなぐさむべき。

と叫びたる世界は、山中の方丈には如何に眺められし

大かた世を遁れ身を捨てしより恨もなく恐もなし、命は天運にまかせてをしまずいとはず、身をば浮雲になずらへてたのまず、まだしとせず、一期のたのしみはうたゝねの枕の上にきはまり、生涯の望はをり〳〵の美景にのこれり。

『緑陰静處、水を枕の一睡』は彼をして自ら滿足せしめぬ、枯木瓦片と觀じたる彼の人生觀は實に身を知り世を知れば願はずまじらはず、たゞ静なるを望とし愁なきを樂とす。

此に於て彼の人生觀を見れば、世の暗黑面は人の涙泉を穿ち、人の涙泉は執着より流る、執着を離れんとせば塵世を去るべし、塵世に介在せんか權者に諂び、身の賤を耻ぢ、時に炎上風震の災あり、有は恐あり、無は嘆あり、若し夫れ超然として世外に立たば、意に從て起臥し、心に任せて歩行す、軒頭の月に心を澄まし、檐端の寛に思を遣る、春の藤波に紫雲を憶ひ、夏の時鳥に死出の山路を辿り、蜩の聲に空蟬の世を悲しみ、三冬の雪には罪障を思ふ、心志動作、自然に任せ敢て心なき裝をなさず、楓林の秋風に潯陽江頭琵琶の音を慕ひ、逝水の音に流泉の曲を操りてたゞ天然を樂むのみ、斯の如くにして心安し、これ人生至上の生活なり、濁世に幸薄き者と雖も、心に從うては溪水木實以て樂むべしと、これ實に彼が人生觀及び世界觀なりき。

## 第四節、裏面に伏在せし長明一生の不平

彼が山中の光景に恍惚とし嗒然己れを忘れて自然を樂しみたる言辭に徴すれば、彼は其生涯に二の時期を以て劃せらるゝが如し、即ち一は彼が五十歳以前、入山前の世俗的境遇にして單に苦を以て蔽はれたり、一は入山以後の生涯にして樂を以て終れり、換言せば、彼が前半生は涙の人にして後半生は靨の人なりき、これ文面に顯はれたる彼が自敍傳の語る所なり、

然り、彼が自敍傳の自白はしかく一瞥すべしと雖も、彼が前半生は涙に對して後半生は果して靨の人なりしか、若し果して後半生が笑を以て終りしを得ばこれ彼をして千金の價を增さしむるものなり、然れ共吾人は、彼が徹頭徹尾涙を以て終り、小事の憤懣彼れの終生を惱ましたるの不幸を憐み、又幾何同情の涙を禁ずる能はざるの止むを得ざるを悲しむ、蓋し文に曰く、

すべてあらぬ世を念じすごしつゝ心をなやませる事三十余年なり、その間をり〳〵のたがひ目にたのづから短かき運をさとりぬ、すなはち五十の春をむかへて家をいで家をそむけり、もとより妻子なければ捨てがたきよすがもなし、身に官祿あらず、何につけてか執をとゞめん、空しく大原山の雲にいくそばくその春秋をかへぬる。

しづかなる曉、この道理を思ひつゞけてみづから心に問ひていはく、世を遁れて山林にまじはるは、心をたさめて道を行はんが爲なり、然るを汝が姿は聖に似て心は濁にしめり、住家は則淨名居士の跡をけがせりと雖も、たもつ所は僅に周梨槃特が行にだも及ばず、もしこれ貧賤の報みづからなやますか、はた又妄心のいたりてくるはせるか。

此に於て之を見れば、彼が其一生の行路を敍するに當り、其千金の文中これを再三讀過せば、內心未だ消ねやらざる不平の明滅たるを認むべし、殊更らに無妻不遇を明言するが如き、貧賤云々の文字を連らねて不知不識其入山前の薄倖を示すが如き、云はずして彼が生涯不平の人たりしを知るべし、桂風に源都督の流を汲み、流水の曲を奏でたりしはこれ其境遇が彼をして入山前を忘れしむる唯一方法なりき、殊更らに興を遣りて欣然たるも、興盡くるならば時として入山前の不遇に憤然たる事もありしならん、此に於てか吾人は長明を目して不平の人、涙の人たるをいふに憚らず、卽ち其外相に於て彼を見る時は涙時代と靨時代とを分つべしと雖も、其笑や苦笑にして皮肉の言を以てせば「苦し紛れの笑」たるに過きず、彼れの精神生涯は全く涙を以て終れるなりき、故を以て心の安靜を得る能はず、蒼皇として日を消し虛無恬淡の宏量は終に見る能はざりき。（未完）

# 雜　錄

## 歷史的起源の諺

浦井恒堂

（一）　アブデラ人（Abderitan）蠢愚の意なれとも此の語の起源は全然の反對の意を有せりアブデラはスレース海岸なる希臘殖民地にして其市民は古來甚た實直の譽ありしかは始の內は實直を示す語なりしに漸次意味變して木訥の義となり最後に魯鈍の意となり you have no more mind than Abderitan などいふに至れり獨語にては Abderitanstreich machen なといふ如此此語は魯鈍甚た苦む雅典皇子 Theseus は希臘古代勇士（ヒーロー）の鏘々たる者慨然萬難を冒し雅典の爲め此憂を除かむことを決し自ら犧牲の內に加はりてクレタに赴くミノス王に女ありアリアドネといふセセウスを見て愛憐の情に堪へすセセウスの迷宮に入らむとするや竊に寶劍と絲毬とを授くセセウス乃ち絲端を迷宮の入口に繫き之を牽きて深宮の裡に入り劍を以て妖怪を殺し其絲に賴りて再ひ免れ出ることを得たり是れ此諺の起源にして獨語にて入門或は初步の書をライトフハーデンといふはセセウスを導きたる如く此書は學に入るの嚮導（フハーデン）なりとの意に他ならす

（六）　アウギアスの厩（Augean stable 獨 Augiasstall）多年放拋しありたる爲め殆んと整理の困難となれる事物を云ふアウギアスは希臘エリス州の王なり人民より强奪を行ひ又隣邦を掠略して巨多の富を蓄へしが殊に馬牛を集むること三千頭に達し之を大なる厩舍に養ひ嘗て掃除を爲ささりしを以て不潔物滯積して如何とも爲す能はず彼のヘルキユールスの十二事業の一として一日間を期とし此厩舍の掃除を命せらるヘルキユールス命を聞くや厩舍の壁を破壞しアルフハイウス及ひペネウスの兩河を注ぎ忽ち其業を了れり因て to cleans the Augen stbls; ein Augiasstll reinigen とは道德宗敎法律社會等の積弊を一掃するをいふ例へは土耳古なるアウギアスの厩はセセウスを待たさるべからすといふの類なり

（七）　バーベル（Babel）聖經に依れは大洪水の後僅かに百年にして人類播殖し壯大なる巴比倫城を築き其內に在る層塔の高さ殆んと天に達する計なり上帝大に憤り其言語を混亂せしむ因て民四方に分散せりと此傳說に因りバーベルは一般に混亂の意に用うるに至れり

又 Perfect Babel 獨 Ein wahres Babel は道德の頽廢せる都會をいふ是は猶太人が巴比倫尼亞の首都巴比倫（古名バーベル）を呼びしに始まり後世に至りては羅馬を指せり

（八）帝王截開（Caesarian Operation 獨 Kaiserschnitt）是は純粹の術語にして難產の時腹部を截開して胎兒を出すを云ふ傳へ曰く羅馬のジユリウス、シーザルの生れし時此法を用ゐたるに因りて名くとされど此說他の史乘に記せず單に彼のベスビウス火山の爆裂の際變死せるプリニイの記に見ゆしのみ

（九）カリブヂスを避けてスキラに陷る（Seeking to avoid Charybdis, falls into Scylla. 獨 Der Charybdis entfliehen, und in die Skylla geraten）希臘神話に依れはカリブヂスは海中の妖怪にして水夫の最も怖る者スキラは海中の極めて危險なる海渦を擬（パーソニフハイ）人せる者にしてホーマアに依れはクラーテスの子にして十二の手足と六個の長き頸とを有し海邊の巖窟に潛み好むて人を襲へりといふ此諺の起源はホーマアの史詩オヂセーより出てオヂセウスがトロイ役より凱旋の途次十年間海上に漂泊せし際カリブヂスの難を免れむとしてあまり岸に接近して船を進めしかはスキラの襲ふ所となり彼の隨行者六人を失へりホーマアに於ては其場所明ならす後人之に附會してシ、リイ島の出來事とし今日に於ては此二者共に南以太利なるブルチウム海岸に突出せる巨巖の名となり中世より近世の終まて未た蒸汽船の發明無き間は地中海の一難所として船客の恐怖する所なりき因りて此諺の意は一つ免れて又一つといふ類なり（seeking to avoid one fault, falls into another）セークスピアのベニス商人の內に Launcelot か Lessicu に謂て曰く

Thus when I shun Scylla, your father, I fall into Charybdis, your mother.

（一〇）キメリア的暗黑（Cimmerian darkness 獨 Kimmerische Finsternis）古代希臘人の宇宙觀は至りて簡單なる者にて曰く地は扇くして圓きことアキリスの盾の如く他の周囲に Oceanus といふ河あり河外の地は永久の暗黑にしてキメリア人之に住めりと因りてキメリアは最暗黑といふ意となれり

（一一）カッセルへ行く（Ab nach Kassel）是は專ら獨逸に行はるゝ諺にして命懸にて出かけるといふ如き意にて今日にては寧ろ戲言となり親交の間柄などにて他へ赴かむとする時戲れて一寸カッセルへ行て來るなといふなり此諺の起源を尋ぬるに合衆國獨立戰爭に當り英國は之を壓服するに困難を感せしかは獨逸の小諸侯に謀り其兵を借らむとす小諸侯等喜ひて之に應し其臣民を英國に賣り其酬として巨額の金を得之を美術品の購求燕樂の費とし毫も恥つるの色無し史家の計算に因れは此際獨人にして英國の用となりし者約三萬にして其五分の二は米國に於て死せり而してヘッセカッセル州此種の傭兵を供給すること最も多く約一萬七千に及ひ其都カッセルは彼等の集合地なりきされは當時カッセルへ行くの一語は之れを聞く者に深き感觸を與へしかは此諺出るに至れり然れと當時の獨逸人は此至大の國辱もさのみ念頭に懸けさりしが如くフレデリック大王の如きは小諸侯の罪を鳴らさむともせす却りて此等の傭兵か普國領內を通過するに當りては之を家畜と見做し一頭に付若干の關稅を取りきそ

（一二）猫王を瞰る（A cat may look on a king 獨 Sieht doch die Katz den Kaiser an）是は我俚

諺に盲者蛇を怖れずといへるに同し此諺は獨帝マキシミリアン一世より始まれりといふ帝のニユルンベルヒ府ニ在るや屢々木版彫刻を業とせるヒロニムス、レシユの家を訪ひしか主人の愛せる小猫は常に座を主人の細工机の隅に占め皇帝來り給ふも座を去らず如何にも怪しき男か來たといふ如き顏して皇帝を注視せしかは帝の近侍等大に笑ひて此語を用ゐしに直に傳播して一の諺とはなりけり

（一三）ダモークルスの劍（Sword of Damocles 獨 Damoklesschwert）外見上極めて幸福に見ゆるも不測の危險に臨めるをいふシ、リイなるシラキユース王ヂオニシウス、ゼ、エルダーの寵臣にダモークルスといへるあり一日王の身分を羨み王を呼ひて世界第一の幸運者といふ王笑ふて曰く然らは余と汝と試に位置を交換せば如何と乃ちダモークルスを延きて王座を與へ群臣に命しダモークルスの命に遵はしむダモークルス歡極まり直に盛宴を張り燕樂之を久うし既にして不圖頭上を仰くに利劍あり一糸の馬毛を以て釣られ其鋒先恰もダモークルスの頭に向ひ危きといふへからすダモークルス大に怖れ叩頭罪を謝し再ひ王と位置の交換を請へりといふ傳說より出づ

（一四）ダナイの贈與（Gift of Danai 獨 Danaergeschenk）前者と同意の諺にして大幸を得たる如くにして其實大不幸の結果となるをいふダナイは希臘ペロポネサス半島のアルゴス人の古名なりアルゴス英雄ダナウスを以て創建者となすに因りてなりトロイ戰爭に於てアルゴス人は總督アガメグノンを出し奮鬪拔群なりければホーマアはダナイを以て希臘人と同義に用ゐダナイの贈與とは希臘人の贈與の意なり而して此諺の起源はオヂセウスの木馬の謀計に出たり傳へ曰く希臘兵トロイを圍むこと既に十年功無く志氣倦怠し如何ともすへからす是に於てオヂセウスは一奇策を設け先つ巨大なる木馬數多を作り其腹部を空洞にし勇士を其中に入らしめて其口を閉ち外より見ること能はさらしめ次に希臘の陣營に火を放ち船に乘じて將に本國に歸らむとするの狀を示すトロイ兵之を見て直に其後を躡みて希臘の本營を占領し異常の大木馬を見て其用を解せず深く之を異めり會ま城兵一人の希臘兵を捕虜として連れ來たる其名をシーノンといふトロイ人大に喜ひシーノンに問ふに大木馬の用を以てす何ぞ知らむ此捕虜こそはオヂセウスの意を承けて詐りて俘となりし者ならむとはトロイ人シーノンに向ひ木馬の事を詰問するやシーノンは敢て一言をも發せす其狀を見るに木馬の事希臘の甚た秘する所にして之を告れは希臘人の爲に利あらさるか如し曰く速かに我を殺せ木馬の事は我言ふと能はすとトロイ人益す之を聞かむことを欲し百方之を詰るシーノンは如此深くトロイ人の好奇心を惹起したる後始めて口を開きて曰く然らは其實を告けん希臘人久しく城を拔くと能はす糧盡き兵氣沮喪す因て今や船に乘して國に還らむとす是れ公等の見る所なり今預言者の言に賴り此木馬を作りて神に祈り以て歸路をして安全ならしめんとを欲す而して預言者は特に戒めて曰く此木馬若し損傷無くしてトロイ城内に入らば希臘の爲に大なる禍害あらむと希臘人深く之を憂へ是に於て乎此の如く巨大の木馬を作り之を損壞せされはトロイ城門に入ること能はさらしめし者なりとトロイ人之を聞て大に喜び木馬に滑車を付し之を牽て城内に入れんとす已に城門に至りしに木馬大にして入らず乃ち城壁の一部を破壞して木馬を入る城中の人皆來り見其故を聞て大に喜ぶ已に夜に入り希

臘兵再ひ寄せ來たりて城壁の破壞せる部より城に入り木馬中に潜める勇士等其蓋を開きて躍り出て火を所々に開きて吶喊すトロイ人事不意に起り狼狽禦く能はすトロイ城終に陷る

## 兼六公園案内記

案内者

百万の財を積むとも之を用ふる道を誤れば見る間に家も藏も倒れて身の置き所にさへ苦むに至るべし、學の道にたづさはる人も之に等し、諸君の頭腦が如何に鋭敏なるにもせよ無理に使うて休まする事なければ何時か鈍りて役立たぬものとなるべきは明なり、幸ひ今日は空も晴れたり、いで名高き兼六の園の案内申さむ、

先づ廣坂を上り給へ、此處も一二年前迄は車輪も碎かるべき程荒れたる坂なりしが、今は斯樣に緩に切り開かれて人も車も安く越え得るに至れり、御代の有難さは此處にても知らるべし、坂を上れば左手に朱の華表あり、こゝを通り拔けて右の方を見れば金城靈澤あり、方一丈、水寒冽にして未だ嘗て涸れたる事なし、此池に付き忘るべからざるは芋堀藤五郎の事にして、彼は誰の子にして何時の頃住みたるかは詳ならねど、石川郡山科村に住み薯蕷を堀るを以て生業としければ時人呼んで芋堀藤五郎といへり、彼清廉寡欲好んで貧者を憐む、一日彼の妻其父より砂金を得て之を藤五郎に與ふ、藤五郎山に往き之を雁に擲ちて歸る、妻怪しみて故を問ふ、答へて曰く、此物我が薯蕷を堀る地に多ければ我敢て之を貴しとせずと、翌日山崎山に登り多くの砂金を得て歸り之を此泉に洗ひ家に一握を留め他は悉く窮民に施せり、斯くする事屢々近隣の人景慕せざるなし、

この故に泉を名つけて金洗澤又は單に金澤といふ、金澤の市名亦こゝに起る、此泉長く荊棘の閉ざす所となりしが文久二年藩主金龍公(第十二世前田齊廣)これを掃除し水底に石を敷き屋を造りて雨露を防ぎ給へり池背にある古色蒼然として其形鳳鳥に似たる丘を鳳凰山といふ古の小丸山なりといふ、鳳凰山下に嵓窟あり、綠苔四壁を閉ざして露滴り人をして清涼の氣を覺えしむ、中に一碑あり金城靈澤碑といふ、縱五尺六寸橫三尺五寸厚一尺に及び根生川と稱する伊豆石もて造る、色深黑、掌を以て撫すれば平滑なるが故に掌は直下するかと怪まる、天保十五年藩主溫敬公(第十三世前田齊泰)泉を名つけて金城靈澤といひ臣に命じて此碑を建てしめらる、金城靈澤碑の五隸字は公親ら題せる所なり、暫く待つべければ靜に此碑文を讀み給へ、

### 金城靈澤碑銘並叙

臣　津田鳳鄉　奉命撰
臣　渡邊栗敬　銘
臣　市川三亥　謹書

北陸之鎭、曰白山、雪封其巔而四時不盡、其峻逼霄、稱爲本邦三嶽之一、自古屬我藩管內、其麓跨五州、山脈蜿蜒向北而來、至山崎莊而止、環匝三面、蒼海臂其前、中有龍蟠虎踞之都、元精鬱浮、鐘秀標瑞、具百二之形勢、實爲蜻洲之雄鎭、先公比之金陵建業城、乃其名所由也、城南地數百步、有巖突泉、清而且澈、昔有迂人稱曰藤五採鑛于山、淘汰斯水焉、故稱金澤、藤五爲人寡欲、好施不嗇、蓋藤氏第五郎、避京洛之紛華、來棲遲於此、衣褐懷玉、遁名晦迹、不求人知、故前史無足徵者、天正中我藩祖公自南越就封登州、三遷移鎭尾山、市維新之令、革舊染之俗、招賢任能、自西自來、士感而應之、民悅而歸之、自成都邑、逮文祿元年、恢拓都城、民人益輻湊、皆樂其生、於是近取此水以名都城、於是乎金城之名昉聞于天下、追前期時、因營蒐裘、池在其苑囿

中、咫尺新殿、爰建都之古蹤、仰祖公之創業、託物存思、乃錫嘉號曰金城靈澤、寄比隆於有周之治、今公承統理化休明、能讃先旨、命臣三亥大書其榜、又命臣鳳鄉叙述其事、臣栗繫之銘詞、乃勒石建之于池上、加以公親筆題額、於是勝蹟不朽于古矣、抑斯水也、其肇知於一介逸民、遂被明主之顧、發名於文祿、錫號於文政、樹碑於天保者、以其密邇雄都而遷石文之時也、雖然涓涓一檻之水、而被皇皇親奎之榮、寵異至此、固不期而遇、不求而致者、豈非有數而存焉者乎、且數百年之前、誰知有今日之事、至數百年之後、永依托雄都、以興國並傳、又徵以斯文、則誰不知人以池傳迹、池亦因城託名、壹是皆賴明主之一擧而三善皆顯哉、果然則勝蹟眞是不朽無疑矣、臣材駑且老、固不足以應盛旨、敢陳愚衷、以寓景仰之意、臣栗繫以銘曰、

府城之南、檻泉洋溢、玆匯爲澤、克育万物、滋潤膏沃、涵養無謁、盈科而進、成章以達、豈同溝澮、雨集皆盈、厥實深厚、粤得若名、君子所法、君道以享、遺澤流渥、黎庶遂生、休哉君德、日昭月明

天保十五年歲次甲辰正陽月

碑文を讀み終りたらば此方金澤神社に詣で給へ、文化二年金竜公が遠祖菅原道眞公を祀らむとて建て給ひしものにして初め竹澤天滿宮と稱せしを明治に至りて竹澤天神社と改め後再び改めて今の號となし鄕社に列せられたるものなり、まに本社に祀る白蛇神と申す鎭火の神は眞竜夫人（金竜公の室鷹司關白政凞の女）が出雲大社より請じ給へるを此處に遷されたるなり、石の華表の側に奇石あり之を磨すればよく疣を治すといふを以て疣石と稱す、こゝに疣を治せむとせる迷信の徒多きにや見給へ石の光れる事を、さて再拜して此方へ來給へ、此道は出羽町練兵場に行くなり先づ一度園外に出で兵士の勇ましき操練を一瞥し石引町より園内に入る道よりして再び清境に入らむ、

園の東隅に方り樹木森々たる此山は山崎山、見給へ滿山これ楓樹秋至れば樹々の紅葉は錦繡を織出して佳觀いはむ方なしさればまたの名を紅葉山といふ、半腹に五重塔あり粟ヶ崎の商人島崎某が京都御室御所にあるを摸して献ぜしものにて名を御室塔といひ高一丈五尺白川御影石にて造れり、山麓にある穴を氷室の跡にして藩主こゝに住み給へる頃は寒中氷を蓄へ六月朔日これを開き氷を侍臣に賜へりと聞く、暫し頂の亭に憩ひ給へ面白き物語せむ、

そも此園を兼六園といふは如何にといふに、諸君も知り給ふ如く洛陽名園記には、洛人云、園圃之勝、不能相兼者六、務宏大者少幽邃、人力勝者少蒼古、多水泉者艱眺望、兼此六者、惟湖園而已といへり、然るに我公園亦皆これを備へたれば文政の元年金竜公の時白河樂翁公かくは命じ給へるなり、遠き慶長の頃瑞竜公（第二世前田利長）の時より今の瀑のある所及其下の池の邊其頃は蓮池といへる所に雅筵を張り給へる等の事ありしと聞く、金竜公に至りて山を築き水を通し新に館を設け等して略完美したり、後温敬公心を留めて園亭を修築せられ、明治の四年恭敏公（第十四世前田慶寧）居を東京に遷し給へるより官有の地となり門墻を壞ち人の遊歩を許すに至れり、さて此山の下に流るゝ水は辰己用水とて金澤の東南上辰己村より犀川の水を導きて小立野に上げ園内を通して金澤城内に注ぐなり、寛永九年藩主微妙公（第三世前田利常）城中水に乏しきを憂へ小松の人板屋兵四郎に命じて斯くは土功を興さしめ給へるなり、城中賴る所の水は只此一流のみなれば昔の人の愚さよ後患を恐れて罪なき兵四郎を殺したり、長き話に時を移せる事かな、いざ彼方へ案内せむ、

山崎山を下り市街の一部を見下し得べき所に三株の松亭々として並び立つ、末森松といふ、これ温敬公が藩祖の偉功を欽慕し給へる餘り能登國羽咋郡末森城趾より移し植ゑ給へるなり、蓋し天

正十二年九月九日佐々成政兵一万有余を以て不意に末森城を襲ふ守將奥村永福死守して降らず、藩祖其急なるを聞き數騎とともに先づ走り藩士之を追ひて隨ひ成政の軍を破りて城を救ひ給へる事史に明なり、辰己用水の園内を迂曲するものを曲水といふ、山崎山の麓曲水のあたり閑雅最も愛すべし、流を繞らして小島あり綠松數株露滴るばかりにて中に巽樣の石あり石の華表には三社の額を上ぐ、この島を鶴領島といひ昔連理松雙幹竹ありしと聞けど今は枯れてなし、鶴領島の邊曲水の岸、この幽境を去るに忍びざれども、何時までも斯くてあるべきに非ざればいざ彼方へ、こは云ふまでも無く石川縣勸業博物館にして天下の珍器貴寶に至るまで一として備へられざるは無し、境内に結搆なる日本造の二層樓あり元は巽新殿と稱し今は成巽閣と號す、入りては欄間の彫刻や戸障子金具やの精巧に驚き、庭に下りては苔の衣に潤へる木石の好雅に感せざるべからず、詳しくはこの巽新殿記を讀み給へ、溫敬公之を自筆し給ひ今閣内に掲ぐ、

巽新殿之記

今茲文久三年癸亥、爲萱堂營新殿于本城東南辰己方位、與城相連、此稱巽殿、蓋有由也、往昔金竜大府君占蒐裘于此地、而營宮殿樓閣焉、稱竹澤殿、殿前外門長屋稱之辰己長屋、今其殿閣既廢、而外門與長屋猶存焉、今皆取用此於殿、萱堂嘗在於膺司家日、其宮殿稱辰己殿、與今所營暗合、是一奇事也、憚畏其同文字同稱以巽代辰己、而同其訓、城中入一水、其源經辰己村而灌此園中、謂之辰己用水也、夫水之爲德乎、古人有謂、其源嚴而流末無窮、即子子孫孫永續之兆也、其爲用乎、活流運動混混不舍晝夜、宜哉智者樂之也、其混混無窮、合子孫萬世無窮之意也、又且案巽卦、在時令則陽春發生、又風月花園草木茂秀之兆、於人倫則長女秀士眷愛、或贏出逢鸞、貴人相近之兆、不亦佳乎、且凡百什器、爲印記用巽字、此辰己字、簡而雅訓也、嗚呼此樓閣之壯觀、近則弄兼六園中風月花木之集淸、遠則占山海烟雲去來之悠渺、一眸千里不盡之眺望、是萱堂養志之裘、而國家



蒐萬世無窮之勝也云爾、

文久發亥仲秋　　梅皐齊泰

成巽閣前の流の岸には菖蒲萩など多く植ゑたれば花咲く頃には殊に美事なり、此流に架せる小さき大皷橋を渡る前に三筋の途合する中心点に高さ五間ばかり幹三條に分れたる吉野櫻あり大和吉野より移せりといふ、橋を渡れば天を蓋ふ老樹の松あり、地上に數條の根を露はし高七丈余大人も通り拔け行く事を得べし、根上松（ねあがりまつ）といふ、これ溫敬公手栽の松にして初め土を盛りて其所に植ゑ成長の後を待ちて土を除き盤根を露はせるなり、更に一歩を進むれば累石疊々上に巨大の銅像を安置す、これ明治十年西南の役に勇ましき死を遂げたる第七師管將卒の忠魂を慰め長く其功績を紀せむが爲めに明治十三年官民協同して建てたるものにして、累石はこれを金澤城内鼠田園に取り中央には有栖川宮熾仁親王殿下の筆なる明治紀念之標の六大隷字を刻む、上に安置せるは日本武尊の軍旅の御姿にして基石の高二丈四尺像の高一丈八尺三寸、忠勇なりし戰死者を慰むるに勇武の君の御像を建てたるは實にふさはしく加ふるに天然の奇石巨量の銅何不足なけれども、唯累堆の巧彫塑の技何人の賞嘆にも價せざるは千古の憾と謂つべし、明治紀念之標の柵内に石川縣戰死士盡忠碑あり、碑石圓形にして周圍六間一尺余、これ西南の役に戰沒したる石川縣士の爲めに崇忠なるものが市内尾山神社の一角に建立せるを紀念標建立の際其側に移せるなり、碑文は溫敬公の撰にして書も亦公のなり、讀みもて行かむ、

石川縣戰死士盡忠碑

人誰無一死、死而得其所、死亦榮矣、明治十年二月鹿兒島賊軍起、王師征討、以平定之、其戰始於二月廿二日肥後川尻川上、而終於九月廿四日薩州城山、經月八閱月、大小百余戰、艱苦亦可想矣、石川縣下士從王師者、無慮數千人、奮戰于肥薩隅日豐之間、其致身者、三百九十余名、是皆知有國而不知有身者、其忠節嘉尚也、有志之士憫其死節、相共謀建蠡忠碑於尾山神社內、以祭之、使余記之姓名、則詳于碑陰、

明治十一年九月　　正三位前田齊泰撰并書

毎歳一回官民合同して招魂祭を此標前に行ふ、祭典の間參詣する者群集してあたら清境を汚し去るこそ悲しけれ、げに諸君は此標前に立ちて往事を追懷せば感慨胸に溢れ來て思はず双腕の慄くを覺ゆらむ、人事死より悲しきは無きに、朝に劒を執つて河聲を亂し、夕にそを枕に野末の露と消ね行く武士の身こそ、たとしへなく哀れならずや、

標の西流れに架せる石橋に暫し足を留めて流れの上下を見よ、兩岸の櫻樹の並ぶ樣如何に正しからずや、時至れば得ならぬ香を送る万朶の花の色、花を寫せる水のさゝやき、まつた花の蔭に繪筆とる若き畫師の姿など、心なきわれ等にも美しとぞ思はる、橋を渡りて池の方に進めば數十株の松樹蔭凉しく茂り合ふ、最も近き所に乙葉松といふがあり、其高二丈許枝繁りて地を覆ふ、根本より岐れて四幹となり其形錨に似たれば又の名を錨松といふ、此松は温敬公の侍女乙葉といふ者其愛樹を公に献ぜしものよと乙葉の名はこれより來れり、乙葉松の蔭に小さき地藏堂あり、中にまします地藏尊の一は遠き昔前田家江戸本郷邸の邊より堀出し同家に道祖神として祭りありしを温敬公こゝに遷されたるものなり、像背に大同二年の銘を刻めり像の樣木乃伊に似たるも道理なり、他の一体は貞琳院の方（金竜公の生母）江戸骨原（こつがはら）より遷し奉れるものにて初めは二体別々に祀れるを今は合して此一龕に納めたり、龕の格子に小さき石など積みたるは殊勝とやいふべき、地藏堂の西の方松の林より數歩を隔てゝひと本の櫻樹あり塩竈櫻といふ、見給へ此老たる姿を幹も枝も等しく被ひ包めるこの苔は如何に美事ならずや、高さは五間にも餘るべし根の周囲二丈半分れて五幹となり各々其太さを同ふす、万朶の花咲ける樣は嶺を出でたる夏の雲の層々相重りて湧くが如きにさも似たり、

足をめぐらして東に向へば曲水の折れて流るゝ邊其所に太さ五尺許高さ丈余の樟樹ありき、金龍公の栽ゑられしものと聞きしが數年前風の爲めに折られて今は其形見だになく、一本の常盤木と一個の石とが空しく其所を守るのみ、其下流に丈余の石二個を並べ横へたるを雪見橋といふ、この下流に雪見燈籠を樹つ、この二つを麓に置きて一丘あり鮮なる色したる芝草一面に生ひ茂れる中に大小の躑躅樹よき程に植ゑられ七個の奇石其間を綴る、この石自ら形を異にするを以て七福神石と云ふまた宋燕思閣の七賢石に擬せるならむとも云ふ、頂に一松あり翠蓋を開きて木や石を覆へる樣恰も傘に似たりとて傘松といふ無風流なる名を得たり、丘の名は奇石に因みて七福神山とも稱へ躑躅樹繁れるより躑躅丘とも號す、流に沿ひて下れば其所に石の橋あり十一個の華崗石を龜甲形に刻み一連の雁空の彼方を渡り行く樣にかたどりて架せるなり名を雁行橋（かりがねはし）といふ、橋の袂に葉櫻あり旭櫻といふ根の囲り幹の高ささきの塩竈櫻に比べて各々其二倍以上あるべしと覺ゆ此樹根より七大幹に分れ苔蒸せる幹の所々には老いたる樹に屢々見る如き貴き草生じ其齡幾千歳なるかを詳にせず、花は他の櫻樹より後れて咲きさきに花に狂へる者も再び此花に醉はむとて花

下に群がるは例年の事なり滿山これ花といふ吉野山を其まゝ縮めたらむが如き此老樹が盛なる花を下行く水に寫す樣得も言はれず、此樹の幹は七つに分れ盧竈櫻のは五つに分れ吉野櫻のは三つに分るされば併せ稱して七五三櫻といふ、また此三株は園中最も優れたるものにして此外の名樹幾百株なるを知らす、虎の尾熊谷緋櫻淺黃櫻など其種も數多し、旭櫻の蔭は眺望絕佳にして共同椅子の備もあれば暫し憩ひて自然の大景に眼を樂まさむ、

見よ遠く白山より分岐して蜒々幾千里將に海に入らむとするかの連峯を、東に聳ゆるは育王山なり金澤を去ると約五里高さ三千四百尺盛夏猶雪を見る、輕裝以て攀ぢ上らむか双眸の中に入り來るは加越兩州の大平原其点々として黑きは森か村か迂曲して白きは河の流か茫々たる野の盡くるあたり日本海は日に映じて異樣に輝きはては一線を畫して水と天と相接す、山の半腹岩石突出するもの二百尺絕壁千仞之を傳ふは馬背を行くが如く歩する毎に岩角かけ戛々の聲も唯一瞬其影さへも見得べからず、岩嘴に踞して窺へば下に大澤あり色深碧龍蟄むかと疑はる中央に一大石あり、下より岩嘴を仰ぎ見れば其狀鳶の睨下するにさも似たり名けて鳶ヶ峯といふ、山中雜樹繁生すれとも其丈高からず悉く頂上に向ひて伏す蓋し風の烈しきが爲めなるかまた多く藥草を產す山名を醫王山に作るはこれによる、昔者山中に寺院多く僧徒强暴にして國司に抗す天正の頃佐久間盛政盡く之を燒き捨てたりと聞く、人智開けて元氣益々銷沈す此時に方り雲外三千尺の仙境に遊びよく其氣を養はゝ其快や如何に、南窓燈下讀書の子何等益する所なくして終らずんば幸なり、若し夫れ登山の期に至りては五月を以て最も可となす、育王山の前にして之に次ぐものは戸室山なり

青赤二種の華崗石を產す其質御影石に等し文祿元年金澤城修築の際石材を彼處に需め今の小立野石引町をへて之を運搬せりといふ、戸室山より出で今吾等の眼前に横はるはこれ卯辰山なり、天正五年上杉謙信此處に陣したる時其形の茶磨に似たるより茶臼山と呼ひ又蟠屈する狀を見て臥竜山と名けたり俗に向山といふは金澤城門と相對するを以てなり、山頭に社あり菅原道眞を祭り大己貴神少彦名命を合祀す社名を卯辰神社といふ、繪馬堂に掲けたる「忠孝廉節」の大扁額は宋林煒の書にして温敬公の納め給ひしものなり、社の側に養生所、舍密局、撫育所、產物所を建てまた演劇場、馬場、大弓場、藥湯所等を設けて一時は繁華を極めしとありしも今は跡方もなくなりぬ、卯辰神社の側にあるは招魂社にして明治元年北越の役に戰死せし金澤藩士卒及び同七年佐賀の役に戰歿せし藩士を合祀す、眼を左方に轉すれば直立千丈青空に聳ゆる老松あらむ大幹五條に分れたるを以て五本松といふ臥竜山の一偉觀たり、其南崖にある長谷山觀音院境内には三重の塔ありて臥竜山に一段の景を添へたりしが過きし明治の廿年俄に火を發して盡く灰燼となりあたら好景を失ひぬ、其處より上に新しき樣なる堂は忠魂堂とて淨土宗徒が日清戰役忠死者の靈を慰めむとて建てたるものなり、臥竜山の以北を春日山といふ之を公園にせむとの企あり、臥竜山の奥河北郡小金村字傳燈寺には穴居の跡十數ヶ所あり何れの代のものなるか詳ならねど其道を學ぶ人は一日を費して此處を訪はゞ得る所少なからざるべし金澤を去ると僅に二里ばかり、更に眼を北に轉せよ鏡の如き湖はこれ錢屋五兵衛の名と共に世に知られたる河北潟なり、當時江戸の火災より延て會津の材木問題となりぬ加賀藩吏は自已の責をこの偉傑に被らせむと欲し百方彼が過失あらむ

ことを求む、不幸、河北瀉埋立工事より死魚は市に鬻がれぬ好吏此機に乘じて彼が一家を獄に投じ狡猾にも自家の安全を保ち得五兵衛が壯圖は破れたり、湖上の蘆湖畔の松長へに彼が恨を傳ふ、來れ日も漸く傾きぬ、殘れる部分を急ぎ案内せむ、

曲水の水流れ注ぎてこゝに大なる池をなす周圍凡二百間名けて霞ヶ池といふ池中の孤島は蓬來島または龜甲山といふ共に其形の似たるに由る、池畔にありて池上に蓋ひ出でたる松は唐崎松と呼び其對岸にして水中に突出したる小亭は内橋亭といひ元蓮池馬場の馬見所にありしを公園となりてより今の所に移せしなり亭の造りは小堀遠州の好なりといふ、曲水の流池に注ぐ所に小さき水門ありて水は分れて金澤城内に行く、其側に琴柱に似たるは徽軫燈籠なり、燈籠の傍より池に沿ひて行けば松の樹蔭に虎嘯石あり其形よくも虎に似たらずや其周りに笹を植ゑたる等殊に面白し更に松の林を過りて右手に行け其處に噴水あり噴水の前に高之亭と刻みたる木標あり、慶長十年微妙公の室天德夫人（德川秀忠の第二女）入輿の時陪臣皆此地に住み亭を建てゝ江戸町亭または蓮池亭と稱せり寶曆九年盡く燒け失せたれば金竜公其跡に亭を造りて高之亭といへり明治に入りて之を毀ち此標を殘せるなり、噴水の傍より再び霧ヶ池へ向はむ其處に溪流あり渡すに石橋を以てす石材は長さ一丈八尺余幅四尺厚さ一尺三寸戸室石にして橋の名を高門橋または黃門橋と呼ぶ、橋の東袂にある怪しき石は其形の似たるより獅子岩といふ石橋に獅子の取り合せ成る程と合点行くべし、さて之より螺螺山に登らむ山は内橋亭の背後にありて楓の老樹鬱蒼たり羊腸の路を上り行けば此山の名のいはれも自ら知らるべし、頂には傘亭及び三重の石塔あり温敬公の生母榮操院の方能登珠洲郡眞言宗吼木山法住寺の靈木吼木櫻の一と枝を以て佛像を刻ましめ外に法華經一部を添へて塔中に納め給ひしが今其經文は博物館に藏し像は何處へか移されたり、山より米永亭といふ酒樓の前に下れば翁塚ありあか〳〵と日はつれなくも秋の風といふ翁の句を刻む此塚は往年卯辰山に在りしものにて此句は翁が加賀の俳人北枝と相携へて卯辰山に遊べる折吟せしものなり、塚の南廣き場所ありて梅を植ゆ花時杖を花下に留むるも亦興ありなむ、さて後に戻りて再び黃門橋を渡り左に折れて蓮池に行かむ、池の東崖に瀧あり松蔭瀧といふ韆韆の響を發して直下し岩に碎けて飛び散る樣は如何に恐ろしからずや、一度散りたるものは再び集りて此池をなし蓮を咲かせ鯉魚を游がしむる樣は如何に喜ばしからずや、池畔小茶亭あり夕顏亭といふ瓢形の透壁竹木の曲椽みな趣あらずや亭は小堀遠州の好に成れりと聞きてはげにと點頭かる、亭の椽さきに坪野石もて造れる臼形の手水鉢あり名を李白手水鉢と呼ぶは表面の中央に池を堀り其岸に李白が醉ひて眼れる樣を浮き彫にせるを以てなり而してこは後藤程乘の作なり、亭の傍池に近き所に竹根石あり竹の根化して石となれるもの中に水を容る、池中の島にありて瀧と相對する塔は海石塔といひて豐臣秀吉が朝鮮征伐の折携へ歸りて藩祖高德公に贈れるものなり、夕顏亭より島に渡る石橋を日暮橋といふ、池の東崖は盡く楓樹にして初夏の候其影を池に投じ綠葉水に接せむとして僅かに間を存するなど甚だ面白きながめなり、

日は暮れなむとして鳥は塒に歸り吾等また清き園の眺めを盡したり、いざ歸らむ已が宿に、燈下古の歌など讀みてこの半日に得たる清さを心つゞくるは、いとよからずや、（完）

# 文苑

## 散文

### 落日

木曾紫光

想ひ起す世は三千年の古よ、清きガンジスの流も淀む(1)クシナゲラ城のほとり、晝なほ暗き菩提樹の蔭に、常世の國に沈み行く臨終の際の一縷の光。

峯は高きか淵は深きか、否とよ、時しかゞなへば無始の始盡未來の末を盡しつ、縹渺の涯なき無碍の智門開きては、千古不滅の聖法にしのぶ尊き人の俤こそ、高く深きものなりけれ。

(2)加羅蘭の一雫人の身に宿りて生れ出でたる人の身は、喜怒哀樂の逆卷く浪に漂ひつゝ、荒ぶか邪智驕慢の沖つ風。

生死本來の眞相は善き人の尊き言の葉に聞きつれど、花咲く春も月の秋も、逝きて還へらぬ世のためし、面のあたり己が心に悶ねつゝ、夜半の月影白き時しも、よゝと泣く人の子等が忍び音ぞたゞ本心の叫なりける、

花を求めなば心のむきゝになしてんよ、珍を欲りしなば龍宮の珠玉をも獲つべし、詩歌管絃の調は梧桐を漏れて、霓裳羽衣の曲は薫風を起す、花に霞むなる(3)カピラバスツ城の夜、たのがじし心盡しの粉脂雲鬢は、秋波斜にして人の心を融く、あはれこの玉敷の宮居こそ、實にとことはの春なりけれ。

榮華にすさみては淫し、榮燿に耽りては荒さむ、酒池に舟をやり、肉林に花を折る人の子、爭か樂んで亂れざるものあらん、

遮冥、鳳鳥は卵殼にありて疾く天上に鳴き、檀葉嫩にして夙く芳るとよ、火宅の門を開きて自ら焔に號ぶ救濟の聲は、心なき榮華榮燿の夢路になど轟かん、夢てふことの絶えてなくば、少老病死の絶ねてしなくば、尊き人の大音はつひに諦聽べきすべもなかりしを。

月西山にひくゝして天地も眠る夜なかば、玉樓の春を後に見て、(4)健陟に鞭つ(5)罌粟の鞍上の情緒たれか知るべき、朝風に山路を辿る駒の嘶靜にして、(6)車匿が袖は濡れそぼちつゝ、咽ぶ音は淙々の響に流しつれど、哀れ太子も人の子ならずや。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

崎嶇たる岩頭に立てる痩頬垢面の人、肉落ち骨隆ちて、墨染の破れにし袖は嵐に翻へる、眸を放ちて遠く故郷を望めば、秋すでに闌にして日脚ひくし、

玉葉の御身は野狐の棲むべき茨に臨して、瘦れ玉ひし其姿、綠の髪の艶けかりしも、綾羅の衣紋の正しかりしも、思へばいづれありし去歳の其面輪。

木の實に饑を慰め、溪水に流を掬び、一生を九死の城に辛うじて、屢々倒れ玉ふ艱難は知るや知らずや心ひくき浮世の人。

岩端を下りて河邊に出で、「た指かゞなへば早や六歳となりぬ、苦艱具さに嘗めしかども常住平

靜の寂境は未だし」、河水に身の汚を去りて乳糜の賜に氣力を復し、金剛の志山の如く、菩提樹下に結跏趺坐し玉ひにし其折ふし西の山端に近き夕日よ、あはれ今のそれとは變らざりけん。

心頭の煩惱を滅却して　沈思熟慮、只管に人本來の眞相を究め玉ひし報は、天光の熹微東巒を照らすあした、雲霧北海に走りて廓然たる哉、清光掬すべき眞如の明。

岩頭を走る滴瀝は落ちて千尋の瀧となる、滿を張りたる强弩は驕て黑鐵の門をも射なん、垂天の雲を叩く丹田の心に究めし悟こそ、天空海濶、何の雲翳か心眼を遮らん。

食ひては寢ね、覺めては食ひ、有に欲し、無に悲しみ、得に喜び、失に泣く、醉生夢死の人の身は實にや葉末の露の碎くる玉に暫時を宿す電光の〳〵の命ならずや。

「大悲聖化を隱して驚きて火宅の門に入り」、闇路を辿る人の世に誠こめたる一雫の涙こそ、夢より蘇へるべき警の聲ならずや。

肉の命は八十路を越さずとも、無窮に傳はるべき心命は、たゞその金口より轟きしを。

ほの〴〵と曙くる過去萬年の人の夢路、

あはれそはたれの賜物なるらん。

日は落ちぬ、菩提樹の森、

身は東西に馳驅して救世に氣息逼れども、眞理の爲に一身を惜まんや、竹の園生をいで〻自ら萬衆に交らひつ、聲は警告の鐘と響き、涙は蒼生の露と霑ふ、宇宙を負ふて起ちし一軀は、火孔臨臨として陷るべきを救はんが爲に、たゞ道に死するべう、哀れ齡は八十路、時木更着の十五日。

天は搔き曇りて　聲かなしく、生物涙を呑んで咽びし時、眞如の一軀は來りてまさに去らんとす＝慈父は今逝き玉はん、悲母は今去り玉はん＝肉の身を委ぬべき床はあれど、清き尊き人なくば人の心を床のいづれに横ふべき。

一片、二片、花散り失する遮羅雙樹の蔭、今し名乘るか生者必滅の理、しづ心なく響き渡る祇園精舍の鐘の音は、げに諸行無常を告ぐるなりけり、

號哭もいかにすべき、涕泣將た何とせん、生死は天の命、去來は世の定業、

眞如の化身はもろ人の泣聲を後にして、紫匂ふ雲間はるか、見るはるゞと逝き玉ひぬ、

日は落ちぬ、菩提樹の森、

あはれ

日は落ちぬ、クシナゲラ城の邊。

註

(1) クシナゲラ城＝佛陀入滅の地に在る城。(2) 加羅蘭の一滴＝人根、(3) カピラバスツ城＝釋迦牟尼世尊生誕の地、太子として四時の豪華を競ひし所、(4) 健陟＝太子が王城を逃げんとして乘りし愛馬、(5) 瞿曇＝佛陀の姓、(6) 車匿＝佛陀が太子たりし時最も愛せし馬丁、

# 河北潟れ畔

山崎麓

## 其一

彼の『ローレル』樹の高く聳ゑて『レモン』の花の匂ふてふ伊太利の野は知らねども、此金澤の郊外また思ひの外に趣味多かり。雜草茂りて蟋蟀の音絶ゑぬ土塀のほとり、琥珀の玉を綴りたらんが如き棗實、或は紅玉を練りたらんが如き林檎の、青葉隱れにほの見ゑたる、誠に忘れ難き景色にあらずや。

一日友と朝早く、かゝる郊外の趣ある樣を見つゝ、不圖卯辰山に登りぬ。處々に散在せる墓碑の間に、女郎花の黃、野萩の紅、相錯雜せるを見て過ぎ、松の落葉、樫の落葉ある草に座して遠く眺めやりぬ。黃浪漲れる稻田、其れを畫して靑き菜畑、さては濃き綠の森林、白條を敷ける淺野川など、自然の畫卷は今我が眼底に落ちたり、美しきは蒼茫たる淡靄に蔽はれし北陸の野なるかな。少時、恰幼子が美しき玩具を數多其前に列べられしが如く、我は茫然として此壯大なる自然の美に打たれき。而して最我が眼を離れ得さりしは、東北の方、白銀の鏡を磨き出したらんが如き河北潟の優しき景色なりき。

誠に、誠に、『スコットランド』に在りと云ふ明媚なる湖の面影を忍ひて止まぬ我は、老杉の影を映するかの箱根なる蘆の湖の、幽鬱なる水面を一抹の暮色蔽ひ行くを眺めて、無限の慰籍を得しもの、今や此波靜かにして空濶なる河北潟を知り得たる、せめて一度は遊ばむと志しき。

## 其二

十月五日、風無く雲無き曉。友と我が校の短艇を紅蓼枯れむとする泥河の岸より出しつ。日頃懷ひし我が河北潟の美しき眺めは是より我が前に開かれんとするなり。

河を東へ行く。南岸は芦花ほの白う、其上に少しく現はるゝ雜木の間を、加賀の層巒遙に濃淡の藍色を畫して橫はれり。

北岸には黃砂の丘長く續いて、綠深き處には平和なる農家あり、南瓜畑の間を蒼烟登りて、榛樹の下蔭に幼兒釣糸を垂れ居りぬ。橋を過ぐ、色褪せし古帽子被れる四十男　橋上より釣糸を長く垂れ居り、其を眺め入る荷車曳ける男、菜籠を肩にせる男なと　此あたりの村落は忙しからぬと覺ゆ。

河の幅漸く廣く、芦の花漸く遠くなりて、渺漫たる河北潟こそ現はれたれ。前方は一碧漂渺として水と地と相抱く處、桔梗色淡き山高く聳ゑ　波平なる上を、遙に去る輕舟、近く來る漁艇は、春草濃かなる牧場を逍遙する小牛か、空澄みし夕殘曛を慕ひて飛ぶ水鳥か　秋風蕭颯たるの外聲なき此境は、悠々自適、野心無くして一世を送る漁夫の住處ならんかとぞ覺ゑし。

東南の天を望めば、崔嵬たる山勢西より東に走りて、孤村の土藏瓦屋根など煙に蔽はれつゝ山麓にほの見ゆるいと懷し。

潟の水中には多く竹竿を立てたり。小魚を捕ふる爲めの網を張るなりとぞ。

我が短艇の進むに隨ひ海愈廣し。蘆花の間より漁村と覺しく。屋根多く見ゑ、帆檣林立して立てり、岸に近づけば漁舟枯れ藻の間に橫りて、赤き下帶せる赭黑なる漁童等、棒を持ち太き材木を

浮べて戯れ合ふ。

茂れる青藻の中に小蟹ひそみ、小石落葉など沈める岸邊に短艇を着け上陸す。

澁柿の塵、山をなして畑中の雜草の上に高きを氣味惡げに踏みつゝ村の路に出で　細々たる白砂に跡を付け行く、軒に高き唐苣の實は既に黑く風に戰いで、魚干す匂ひし、解し得ぬ方言もて語りつゝ相集り、雜魚と白魚と撰り分くる村婦等に午日暖に照しでや、紅く染められし蔦の葉の纏へる樫樹の葉蔭は石を積める板茸きの屋根に落ちぬ。

菓子屋に入りて晝食をなす。

其、三

食後皆座敷に横臥せる間に、我と中野牢脫とは茄子畑の中を過ぎて裏の砂山に登る。翠毬青蓋の形して立てる松の木立を拔けて白砂を漸次登り行けば、野生の眠り草茂る處に出づ。黃なる衣に茶褐色の摸樣あるを着たる低き豆屬の花、紫匂ふ野菊など白き貝に交りて此砂山の秋をぞ飾れる。風の砂を吹き飛ばすを避くるとにや、粗なる竹垣丘の高き處に結ゐあり。軟砂平なる處に長く印されたる小き足跡數多あり。眠り草のほとりより、道無き處を傳ふて丘を登り丘を下りやがて彼方に消ゐ行けり。此足跡を慕ひ行けば、浪靜に海草もつれたる巖の上に、幼き戀を語らふ二人のあらずやなど思ふ。

遠く南を眺むれば、倶利加羅山聳ゐて青藍色淡く、山勢は遙に河北潟の畔迄襲ひて、漠々たる野の微かなる處、一塊の綠一點の黑相集りて形つくる村落の見ゐぬ。

西南を顧れば老杉古松高く立ちて　金澤城の石垣、物見櫓、煉瓦なる兵營の建築物、さては瓦屋根など日光に反射して、深き水底の青藻に隱るゝ白珠玉の群れしに似たり。

北を眺むれば日本海、龍膽の花辨もて染めしが如く　深藍色に現はれ、白帆のさながら空に漂ふ花の香に醉ひし蝴蝶の如く飛ぶ彼方、能登の山は淡く波と雲とを畫せり。

我と友と二人丘の凹處に臥して何となく默しぬ。四顧寂寞として惟微風の合歡木に私語くあるのみにて、我が周圍は黃砂赭岩の遠く高低をなして續くの外見るものも無し。ちぎれちぎれに行く雲は直に地と接し、我等二人の外に生ける者も聲をなす者もなし、誠に月明き夜、椰子の葉蔭に駱駝の背に倚りて眠る、大砂漠の淋しき旅はかゝる處にあらずや。又、晝も猶聲なき此丘は太古より日本海の風を帶びつゝ舊態を變せざるにあらずや。星消ゆる曉、雨昏き夕、此丘の草の私語は千古より續き來て、神の言を述べつゝあるにあらずや。など思ふ。

其　四

其處を出で元の松林へ來る。下を見れば河北潟、我が丘の裾をひたし、漾々たる銀波樹間に見ゆ。丘を下らんとする前、白き貝に野の花を採りて植ゑ、小高き眠り草の蔭に殘し置きつ。又來ん折の紀念にもとてなり。

遂に丘を下り終りぬ。

再び短艇を出して歸途に就く。顧れば能州の山漸く遠くなり、我等か休みし漁村も蕭々たる蘆花叢裡に隱れ、百舌鳥一羽何處にか秋を呪ふ如く叫んで夕暮の色西の空に現はれぬ。

河北潟は漸次縮まり行きて今は見わずなり、煙林へ曳き行く稻を積みし車も幽に、金石の方に當り日既に落ち、紛々たる金縷亂れて紅雲を射、天燒けて爛銅を流したらんが如し。加賀の亂山は暮雲に蔽はれ半は眠りぬ。

あゝさらば河北潟！又逢ひなん　《完》

## 暴風雨の箱根（紀行の一節）

武藤七郎

三月三十日　空曇りて今にも雨の降りいでむ有樣なるに氣をもみつゝ湯本まで電車の便をかる。湯本にてはかの有名なる早雲寺に宗祇及び北條五代の墓を吊ふ。前者は風雅一世をなびけたる隱士、後者は亂麻の世に關八州を手にせる豪傑、半町とへだてぬ同じ苔の下に永久の枕を並べ居る奇ならずや。鶯歌ひ花笑て墓邊春ながら何となうそのかみの忍ばれてわが歷史の幾ページをうづめたる英士こゝに眠れるかとれもへばあぢきなし。こゝを去り里人に聞きて玉だれの瀧といふを見る、俗氣なくして花さへ咲き居りぬ。

櫻花かをりそめたる木の間よりかゝるも嬉し玉たれのたき

夏ならば涼しさやいかになどと獨り心にうなづきつゝ發電所を過ぎ道なき所をはひのぼり漸くとある道へとは出でぬ。氣づかひし空は遂に雨を落し來たりて風さへ強く面をうちぬ。行くてを見れば白雲迷ふ箱根の山々、蜒々と連りて波濤の如く、行路の困難たもひやられていと心細し。天の無情を恨んでにらみつくれば、なぐさめむとてやかなたの谷に鶯の歌ふもなつかし。「しを木ながるゝ」と昔の人の歌ひけむ、早川の流に添ひつゝさかのぼる。しばし歩して古の東海道にいづれば老杉古松空を掩ひて折々たつる下露の面をうつもそぞろに古の面影あり、今昔の感にうたれては行くての山々峯々を仰ぎ、いかに山越の困難なるかを思ひ、かゝる所をわれたゞ獨りふみやぶるかと思へば實に快男兒の本領、雨も可、風も可、さまたぐるものあらば却て愉快なりと、勇氣凛々古英雄を氣どりつゝ益々歩を進む。途上たま〳〵大磯の者にあひ、こゝに始めて話相手を得て、そろ〳〵つかれ來たれる足をはこぶ。

畑と云ふ所にてわらじを求め更に本道を右折して道を蘆の湯にとる、道路漸くつまさき上りとなりて左は千尋の谷、右は峨々たる嶮山、岩かど突起して歩みにくく加ふるに天候甚だ不穩にして遂に暴風雨とはなりぬ。蝙蝠傘は風烈しくして廣ぐる能はず。止を得ず雨を外套にしのぎて傘をば杖となしぬ。山路の困難は漸々暮を開き始めたり。さはれ雨は涼しくも熱せる面をうち、風は肌を通じて流るゝ汗を追ひ却て心地よくなりぬ。はげたる二子山に雲雀の歌の聞わしなど又なくうれし。山又山の間に相摸灘の少し見わしなど晴れたる日ならば猶いかにと怨めし。蘆の湯につきし時は篠をつかねし大雨沛然とふり來たりて遂に彼はこゝに力屈して止りぬ。以ていかにその困難なりしかを知らむ。余は今日の中是非とも三島まで至らむ計畫なれば一旦心に決せしことを中途にて障礙に逢ひしとて止むるは殘念至極、さきの勇氣にも耻づることゝして、こゝに再び全く獨りぼつちとなり、更にけはしき山路をたどり行きぬ。半は雲につゝまれたる駒ヶ岳右に高く二子山は左に聳えて丈にあまれる蘆荻を渡る烈風、身をさくが如く、つぶてに似たる大雨、面を打ち

ほど〳〵堪へがたかりき。この暴風雨の中に曾我兄弟、虎女及び多田滿仲の墓を吊ふ、塞の河原とはこのあたりをいふなり、孝子烈女英雄の跡、問へども答ふるものは雨の音のみ。風の聲のみ、古墳苔とざして蘆荻茂りに茂り、今昔の感、恐怖の思、そゞろに身をふるはしぬ。六道の地藏尊を行く先さわり勿れかしと祈りつゝ益々猛り狂ふ暴風雨の中を突進す。まだ消え殘る白雪に渴をいやし勇を鼓して或は上り或は下れば霧あたりを包みて漠々たり。その心細さいはむ方なし。箱根神社の鳥居にいでしも霧いと深くして社の前にあるか後にあるかを知らず、漸く里人に聞きて參拜す。社は蘆の湖畔、駒ヶ岳の麓に在り。老杉鬱々として人聲全く無く、霧は社前をこめて物すごく、雪なほ傍にありて皎々たり。朱の宮居、苔むせる玉垣、あゝ誰かこゝに至りて神威の壯嚴なるを仰かざるものあらむ。宜なる哉、古より英雄豪傑の士、崇信淺からずして坂上田村麿、源頼義、頼朝、北條時政の如き名士、多く表矢を獻じたるに。われもこの神さびたる森に鶯の清き聲を聞きて貴き、みいづの程や歌ふらむとたもひ、

箱根やま霧ふき迷ふ神杉のこするしつかにうくひすの鳴く

離宮を右に拜し元箱根をあとに蘆の湖畔をたどる、風いよ〳〵烈しくして水面あるゝこと海の如し。

駒か岳たろすあらしは霧こめてなみふきあるゝ蘆のみつうみ

暴風雨の爲めいづこの家も戸ざして人ありとも見ねぬ、箱根の町を過ぎ再びかの東海道を行く。行くこと里餘、烈風いよ〳〵烈しく、强雨いよ〳〵强く、濃霧更に濃霧を增し、この山中見ゆるものとてはたゞわが身一つのみ。心細しとも心細し、

きりの海となりはてにけり箱根山松ふく風は波と聞えて

雪ふみわけて下るに寒氣いと甚だしく霑へる外套は爲めに氷りて白くなり、又ごわ〳〵として、歩む時は後より人の追ひくるかと心地なし。風の烈しさは實にたとへんにものなく礫の如き霙は面を打てども傘は廣げられず、これ程困難せしことは未だ嘗てあらざりき。さすが强情のわれも、あまりの烈風に足をさらはれ、今は全く力つきて遂に一歩も進むを得ず。漸くあたりの草に縋りつきて、あまりの腹だゝしさに狂歌ひとつ、どなり出しぬ。

ふらばふれ吹かばふかなむ雨も風も箱根の神よいざ相手せん

玉くしげ箱根の神よ、いざ相手せん。ふれよ、ふけよ、とばかりに奮然蹴起すれば烈風いよ〳〵魔力を逞うし、さらでも深き霧をして更に深く更に濃く、たゞ見る空々漠々。風にさからひて無二無三に走せ下れば息つまりて堪ふべからず。然れどもかゝる艱難辛苦をなめてたゞ獨り、天下の嶮と歌はれたる箱根の山路を蹈破するかと思へは却て何となう愉快の心胸にみちて勇氣日頃に百倍し數萬の敵兵に向て彈丸雨飛の中を物ともせず、突貫するかの如き心地にて凱歌をとなへつゝ走せ下る。辛うじて壹里ばかり走せ下れば嬉しや、かすかに聞ゆる鷄鳴の聲、たもはずほっと一息つきて、

庭鳥のこゑも聞えてしつかなりきりの奥なる山中の里

このあたりよりは雨も風も靜かになりて下るに從ひ寒さも薄らぎ、外套の氷りもいつしか消え失

せつ。やゝ人家ある山中、笹原などいふ所を過ぐ、吹管を作るとて篠竹を切りて束ねたるもの軒ばにつみあげたるを見る。一歩一歩と身は平地に近づきて麥生の青き菜の花の黄なる、桃の花の紅なる。漸く左右にその姿を見せて春の暖き胸にいだかれたる心地、げに再生のたもひなりき。つかれし足をひきずりて三島驛につきしは午後五時過ぎなりき。官幣大社三島明神に參拜す。櫻花正に滿開の好時節にして、早からず遲からず。思へばこれも神のめぐみにやと嬉し。相摸屋といふに宿る。夜雷鳴あり。雨いと烈し。小説など借りてよみゆくまゝに晝のつかれいできていつしか夢路をたどりぬ。あゝ苦しかりつる箱根山中、大暴風雨との戰勝も無事わが手中に陷りしかとたもへば愉快限りなし。」

## 初旅

中野並助

國府津を過ぐさすがに未だ密柑は出ないのであらう線路に添ふて夏草が蔽ひ被さつてる邊りに五六人の小供が各自に小さな赤い提灯をぶら下げてガチャガチャでも捕まへるんだろう切りに提灯を草の中へ突込んでは出したり出してはたりしてゐる自分も隨分やつた物だと思ひ乍ら過ぎ行く。

山北で汽鑵を取り換へでもするのか五分許り停車して居た。

富士の裾野を通過した時分は夜も八時過ぎであつたが相憎に薄黑い今にもバラバラ落ちて來さうな雲が一面にこゝらを閉ぢ込めて只ちらちら二三の家の灯が闇からぴかり光つて見ゐる一面にもぢやもぢやしてる夏草に色々な虫が騷々しく鳴き立てゝる外何哩と書いてある白い木標が寸頭だけ草の上に出してそれで此年の秋も暮れて行くんだらう。

隧道を出るとさらさらと小琴を調べる樣な谷川のせゝらぎけたゝましい音のする鐵橋是も漸らくで小山驛に着いた實際を云ふと僕は此度が初旅で然も遠い寒い北陸へ行くのである恐らく此の一年は此の邊はたろか自分の故山すら眺める事は出來まい或る月の好い晩に自分の影を斜めに長く田圃の中に投じながらやがて別れて行く慈しい光景に見とれてをつたとき鎮守の森の一寸左に異樣に光る北斗星を見出して今に自分があの下に東の空を慕ひながら暮らすのであらうなぞと考へ付いたとき妙に胸の鼓動が急がしくなつた事もあつたが。何も躰さへ丈夫なら家では少しも心配しやしないからね、是は國を出る時の母の言葉であつた。ねえ兄さんた友達が四人も一所に行けば餘程いゝじやありませんか。是は妹の自分を勵ます言葉であつた。嗚呼僕は決して何んな境遇にならうとも此の言葉を忘れる事は出來ないだらう自分は堪へ得られないで納屋の側から柿の木の下を通つて畦道へ出て思ふ樣泣いたのだつた。

此夕六時新橋を發して今此處迄來たのだが祖母は今病躰でもあるし此の節はめつきり衰弱した樣だから又逢ふ事が出來得るや否や隨分六ヶ敷しい話で是が死に別れになるだらうと自分ながら決心して來たのだだから今更に愚痴を云ひ出して涙ぐむまい。

線路より低い開け放してある藁屋に糸をつむいでる女の側に向ふむきに眠てる子供今までだゞを云つてたんだらう庭れ眞中に赤い提灯が竹にぶら下けたまゝ立てられてある、思ふに名譽や富や

畢竟何になるものだ人間は名譽や富を以てにあらずして一つの快樂を得る事を知らないのであらうか新橋を出るときのあの雜踏も皆な歸する處は名譽や富で人が泣くとか死ぬとか何んとかかとか云ふ事を大方は之に歸するんだらう然しこんな考がむらむらと起つて來た刹那自分は今何うであるかを思ひ出して煩悶に堪へられなくなつた。

富士紡績の側を過ぎたるとき非常に電燈の光が見えて其の忙しそうな塩梅たらない、工女が歌ふ歌だらう八釜しい機械の音と混じて窓から微かに聞きえられる彼の可憐な歌の中に無量な暗涙が含まれて居るかと思ふと實に聞くに堪へない樣な氣がする、ならう事なら自分は北陸に行くのだから其の位置を轉してやりたい又言づてでもあるならは其の親達に云つてやりたいがなど下らぬ空想にふけつた僕は此の會社に伯母が居るので幾年振りで逢もしなかつたが荷物の都合や何かで遂に見合せにして自分は今此處を過ぎて行くんだが夫につけて從弟が赤い帽子を持て居たが夫が氣に入らないから此度來るときは兄さんの樣な帽子を買つて來てくれと云つたのを未だに忘れはしないが今夜は無音で行くのだ幸に壯健であつて呉れ。

自分は夫から何うかして寢やうとしたので沼津で一寸目が醒めた許り夫からと云ふものは殆ど知らなかつた靜岡で目が醒めたとき左樣幾時であつたらう大方の人は窓に倚り掛つたり或は椅子にもたれて敢果ない慰勞を貪つてゐた只大船から乘た水兵の一行のみが騒いでる外何にも目にうつるものはない辨當賣の寂しさうな聲も哀れに自分は何となく時計を見守つた餘り蒸温いので窓から顔を出して眺めたが星一つ見えないで只何處で鳴くともなく虫の聲が耳に入るのみ、大井川を渡つた鐵橋の騒々しい音と其の間にちらちら見ゐる白い水とが其昔隨分大名の上りだとか下りだとか云つて大騒ぎした名殘かと思ふと何だかなさけなくなる樣だ。

名古屋へ着たときは夜も三時過ぎだつた、水兵の一行は此處にて下車した、さつきから水兵の側にさも迷惑さうに座はつてた婆さんが晴々したと云はん許りに大きくなつたのも隨分をかしかつた僕は名古屋へ今着いたのだなと思ひながらどんな處かも知らないで過ぎて行くのだ岐阜へ着いた頃漸々夜が明け放れてぞろぞろ五六人白い衣を着た行者とでも云ひさうな人が乘り込むだが妙な香がぷんぷん鼻をつくのでやり切れなかつた。

大垣を過ぎた時沛然として飛驒の方の山から雨が降つて來た、黑い雲が七分通り黄ばんだ稻田をさつとゆるがして雨を遠慮なく車窓にたゝきつけた今滋車は木曾川を渡るのである堤に添うゑ植ゑられた松林其の間を悠々流れてる木曾川白鷺一羽遠く向ふの山の朝やけしてる赤い紫がゝつてる雲の方に飛で行く。

關ヶ原に差し掛かゝつたのは五時頃だつたらうか小さな山が摺鉢でも伏せた樣に處々に立てる其の間の凹い處は松の林になつてゝ、戰爭には極くもつて來いと云ふ地形今は處々に百姓家が見えて昔の面影は何處に殘つて居るんだらう彼の松林には葵の紋の天幕がずつと引き廻されて槍や馬標や吹流しの旗等が幾流れも高く中天に飜かへつて控へてた樣はさすがに海道一の弓取であつたらう向ふの小山には又石田の連中が島左近等とやがて近江の露と消ゐるとも知らないで一生懸命軍議をこらしてたんだらう、今日の日和に花嫁が丹精の布晒すのであらうか幾條となく松林を縫

ふて白布が晒されてあつた。

小さな小學校の生垣が破れた當りに小供がわいわい騒いでるすると鈴がちりんちりんと鳴たので子供は殘らず中へ這入つてしまつた瀘車は此の小さな停車場に止らないで墓地に稲田の中を突貫して一直線に走つた後で考へて見ると俊基朝臣の關東下りで好く知つてる腥ヶ井であつたのだ一帶の松林前方に長く廣がつてる中に社の甍が見ゐて琵琶湖は追々近づいて來た。

米原にて北陸線に乘り換へた梨畑續けるあたり洋傘さして行く二人の女其の海老茶色の洋傘がやがて小さき道を右に折れて見ゐなくなつた桑の木の二三丈位なのが一面に畑になつてる間から琵琶湖の水が一寸一寸と見ゐ始めた、

湖に近い小さな村土藏家が多くつて家根の上に又折々石の載さつてる家も見ゐた船でも繫ぐ爲であろう無雜作に積んだ石が突出して居て小船が一艘其の鼻の方に結びつけられてた、湖上波立たず一艘の白帆もなく只遠く山城や丹波の方の山を眺め乍ら長濱に着いた下車する人二人三人是が長濱縮緬の產地かと怪まるゝ位小さき川を渡る兩側の木さゝぎの實の長くたれたのが風に枝を接してるのに葛の葉がこんもり其の上に蔽ひ被さつてそれで近江の幾秋は淋しいのであらうよ。

近江と若狹との界には山脈が重疊してるのだが瀘車が好く山の麓を小さな清らかな川に添ひ乍ら繰つて行くのでそんなにあきもしなかつた是からが何んとかのトンネルだと云ふ話しをしてる間に小さな停車場に着いた便所の側に天竺ぼたんが美しく咲いて三四人の驛夫がばたばた眞白に乾いて今にもほこり立ちそうなプラットホームを急しさうに向ふへ行た後は只何の聲もなく僕の向ふに乘てた爺さんが一寸寢返りした許り斯う云ふ風で幾分か過ぎた頃みしみしやりながら洋燈を入れに來たので自分は思はず上を見た。

敦賀で水を呑んでから瀘車は少し後歸りをして又山の間山の間と繰つて行く急に高く立てる山の頂上に五六本ひよろひよろと立てる松の間から太陽が射込むで來るので熱くつてたまらない夫かと云つて窓をしめる勇氣はないのであつた五位鷺二つ山近く飛で行く小さき川に網を打つてる人其の川は何んと云ふて其の鮎は何うであるかやつぱり自分の國のそれの樣に肥えて甘いであらうか大きな笠に赤い帶しめた娘が苅り込んだ稲の束を左手に握んで其をぐるりと廻し乍ら右手で結いたそれから瀘車の方を斯う向きながらぽんと向ふへ投げだして顏を拭つた其のふつくりした頰櫻色の顏。

杉津と云ふ處銀を撒いた樣な砂藍を流した樣な海白く岸近く碎ける波三三五五散布してる漁村かくて瀘車は隧道にはいつた小さき荷物列車に材木が多く積んであつて停車場の前の涯に赤い小さい花が咲いてたやがて此近邊の山が紅葉しても此處等の人は只無意味に觀過し去るのであらう。

福井に着く前ぞろぞろ稲田の間をやつて來る女の子の海老茶の袴を同じ樣にはいて然し流行位妙な力を以てるものは少なからう誰一人かうと云ふ人もないんだが到る處にあれほどはやるかと思ふと只感心するより外はない是處で辨當を買つて昨夜以來の腹を癒した二疋の小さな鮎にはんぺんの二切隨分僕には甘く感した。

もう金澤も直だと思ふた時分北陸の山を右方に望みながら松の林を通つて行く此處は一帶に砂原

で所々に芒の叢が立てる秋風がひゆうひゆうと自分等の袖を吹く時に只一人夕暮に此の邊をさ迷ふたなら何んなに北陸の秋は淋しい涙の多い秋であるかしれまい犀川を渡んとき杉の木立茂れる中に金澤城を望んだやがて幾分時の後自分は彼處の人となるんだらう。

# 漢文

## 至誠堂記

村上函峰

至誠者何。誠之至者。無一毫不實也。周易曰。旡妄元亨利貞。傳云。旡妄至誠也。夫至誠天之道也。天之化育萬物。生々不窮。各正其性命。故人能合至誠。則與天地合其德也。日月盈虛。寒暑往來。天之至誠也。河嶽流峙。草木榮枯。地之至誠也。父子之親。君臣之義。以至博愛及衆。皆人之至誠也。嗚呼至誠之義大矣哉。明治戊戌之冬。小松親王。巡視北地。至金澤。辱臨本校。校長北條君請親王。書至誠二字。揭之講堂。使珍休記之。恭惟。我邦自古文武一途。政體簡易。雖氣運有泰否。時勢有盛衰。人心風俗。淳樸誠慤。近時人尙功利。儉素化爲奢侈。其於至誠之道。或得無所少乎。抑學校倫理之所由立。敎化之所由出。不可不振勵進德也。蓋進德之學。莫大於誠身焉。誠身之功積而不已。則所謂與天地合其德者。未必不可庶幾也。不然則敎學皆乖其方。傲慢接物。不能以誠身也。譎詐應事。不能以誠身也。胸襟不豁。氣象不和。不能以誠身也。如斯則所涉雖廣。所歷雖博。汗漫耳。紛錯耳。何有益於進德之學乎。是校長之所以揭斯語也。凡學生之上斯堂者。能審此義。以爲進德之資。自死生壽夭。禍福窮達之大。及一行一止。一衣一食之細。莫不率由之。果能有得焉。則天下之事。安往而不可爲。獨進德之學云乎哉。明治壬寅八月。敎授村上珍休謹記。

## 有若論

微子學人

龍門氏之傳七十子。不滿千人意。不啻一二也。若有子之事。其尤者也。曰。孔子既沒。弟子思慕。有若狀似孔子。弟子相與共立爲師。師之如夫子時也。他日弟子進問。有若默然無以應。弟子起曰。有子避之。此非子之座也。意是齊東野人之語。而史遷採之何也。夫孔子之卒也。顏淵子路先沒。閔子仲弓不知其存沒。恐亦既沒矣。而能傳其道者。唯有子曾子而已。子貢子張游夏之徒。雖猶存。蓋皆不及二子之賢矣。何以言之。一部論語記聖門之言行。不過有曾游夏數子。其他則問答應酬之際。時見其名字耳。且二子多以子稱。乃當時爲諸賢所信服。可以見己。豈以其狀貌尊之哉。或謂有子之似夫子。孟子亦言之。曰。他日子夏子張子游以有若似聖人。欲所以事孔子事之。余以爲不然。所謂似者其德量也。豈謂貌哉。何以徵之。檀弓有之。有子問於曾子曰。問喪於夫子乎。曰。聞之矣。喪欲速貧。死欲速朽。有子曰。是非君子之言。曾子曰。參也聞諸夫子。有子又曰。是非君子之言。曾子曰。參也與子游聞之。有子曰。然。然則夫子有爲言之也。曾子以斯言告於子游。子游曰。甚哉有子之言似夫子也。死之欲速朽。爲桓司馬言之也。喪之欲速貧。爲敬叔言之也。其言之似者。其德量之似也。其不然乎。子夏子張子游既見其德量之似夫子。又知其學之不若。故欲師事之也。唯以其狀貌似孔子師之。又從而撤座。是兒戲耳。七十子之賢而豈有此事乎。龍門氏不思之。而妄筆

諸史。後世學者。不熟讀論孟戴記。而惟史是信。遂至輕視有子。使賢者懷寃於地下。可不謂之一犬吠虛萬犬傳實乎。噫。

# 新體詩

## 月下低調

靜池庵

『犀川の月に對して嘯けば
白山風いとゞ身にしむ』

### ◎わかれ

郷を出づれば故人なし
語らふ友の言の葉に

今宵一夜の名殘ぞと
いたくも吾は感じつゝ

松吹く風の絶ね間〳〵
萩の下葉に露みちて

鳴くや鈴虫くつわむし
こほろぎの音も聞ゆなり

かくも優しき吾が友と
秋の眺を餘所にして

かくも靜けきふる郷の
明日は都へ上るかも

### ◎泣くか櫻よ

泣くか櫻よ、なぜ泣くか
なが妹のジユリアンが
唇、花にまさりしと

なぜかと聞けば今し方
通りし時の美はしき

泣くな櫻よ、さな泣きそ
まさる色香あらぬなり
珊瑚の珠や瑠璃の色

わが妹のジユリアンに
咲ける櫻や薔薇の花
（〈リツク）

### ◎水車

わが村はづれ川岸に
水のまに〳〵朝な夕な

與作が建てし車あり
輕く音して巡るなり

與作は去年の秋の暮
されど車は朝な夕な

歸らぬ旅に出で立ちぬ
輕く音して巡るなり

### ◎未亡人

討死したる益荒雄を
妻の思ひや如何ならむ
されども妻は泣きもせず

人はくち〳〵亡き人の
善き猛者なりき逞しく
されども妻は泣きもせず

やがて少女はそと立ちて
静に眠る益荒雄の
されども妻は泣きもせず

八十路あまりの乳母一人
忘れ形身の幼な兒を
　折しも妻は涙をば
「あふ愛らしの吾子やな
　擔きもて家に運びけり
見る袖だにも露ぬきを
身動きもせでゐたりけり

ありし古を偲びけり
美き人なりき愛多く
身動きもせでゐたりけり

枕邊近く進み寄り
顔の覆ひ衣とり去りぬ
身動きもせでゐたりけり

やをら此方へ近よりて
母の膝へぞ渡しける
　雨ふるがごとそゝぎつゝ
われは汝がため生けるぞよ」
（テニソン）

◎野　分

野分の朝をさな子は
『母様大事が出來ましたたつた三つになりました』

◎鈴ヶ森

嵐は松に咽せかへり
篠を亂して降るや雨
千古の恨何時かは晴れん
此處は天下の鈴ヶ森

鷗は波に漂ひて
野邊の雲雀の雲に入り
瀘車の窓より打ち見れば
六十六部の塔の影

周章しうも駈け戻り
幸次郎さんの裏の柿

怒濤は岸にうなりつゝ
絹を劈くはたゝ神
陰火明滅鬼愁々
三百年のた仕置場

霞の底の上総山
品川灣の靜けさよ
昔の森は跡もなく
旅する人ぞ慰ふめる

## 櫨紅葉

松幹の蔦葉秋を告げて婆娑たる雁影北すること連りなり。多情の遊子此時一語天然に談らで止まんや。我等同人月下に相會しこゝに四五の吟詠を縱にす。怨むらくば霜に後れし木の葉の色染めいでん折なくて散るべきを。

## 乳母が家　秋風

乳母が住家は森こゐて
山の尾近くゆるやかに
流るゝ小川に沿ひ行けば
垣根に萩の伏すところ。

野に落つ月の影うすく
みそらのやゝに白らむ時
家をめぐれる櫨もみぢ
明くる眺めのめでたさよ。

まひる靜けきいさゝ川
耳をすまして戸によれば
心しあるか桐の葉の
一ひら落ちて流れ行く。

千草の野邊に立つ時し
ちぎれ〳〵の雲間には
夕のそらの色なして
いづこぞ鐘の音も清く。

乳母が娘は重やかに
草籠にひて歸りきぬ
森のかげなる畦路を
今宵も唄をうたひつゝ。

## 希望　龍門

旅の山路に行きくれて
路の邊くらく風寒み
いづこをあてに辿らなむ

さはれ招くよ花すゝき
ゆくてはこれとふみ行けば
希望の光星ひとつ

## 吊正岡子規歌　紫光

時壬寅の秋の頃
柿紅の夕空に
暮雲西して流れ行く、

其夕榮の影うけて
凄くもたてる塔の上
一聲天に響あり、

紅(あけ)染めいでし野を山を
誰か月下の霜に問ふ
泣き明かしたる子規、

夏の綠は色褪せて
雁來紅の秋最中
悲風に寄する叫かな、

嗚呼嗚呼天に應へたる
詩神の命血と呼びて
濺ぎし去歲は十餘年、

今將た眠る森の陰
すだく蟋蟀音は絕ねて
「寂(さび)」永刼に傳はらむ、

根岸の里に秋老いぬ
　僑居あしたは名をかへん　血に泣く主のあらざれば。

## 夕ぐれ岸に立ちて

栗木風草

風さむき犀川のほとり
秋たけて遊子佇む
消ゆ行くは御空の綾か
　淋しきやこの夕ぐれ。
故郷の雲あかく
涙は湧きぬ
忍ぶは人の上か
　静なりやこの夕ぐれ
花やせし野くさ
石多き岸にみたれて
蛇籠に白き流
永劫の夢を語らふ。

葡萄に染めし夕は消ゆて
星二つ南へながれぬ
父の御魂かあはれ母の御魂か。
やさし姉君のゆまひ
うれし弟のよろこび
雲遠き都二百里
　静なりや淋しきや
　この夕ぐれ。
逍遙の袖さむく
落葉しげき櫨の木かげに
故郷の夕を聞けば
流に遠き草笛のひびき。

## 和歌

其月

折にふれたる

堪へかねし百度の殘暑今いづこ庭の梧桐に木枯の吹く
朝毎に庭掃く少女昨日今日掃きぞ煩ふ落葉しげきに
はら〳〵と散り來る木の葉しばし見てとみに小猫の庭にとびとぶ
肌寒み書齊の小窓ゐして見れば倉が嶽には雲ぞ積れる
風寒く降るや時雨に戸を立てゝ晝も淋しき町のつじ〳〵
夕されば人の往來も絶ゆ果てゝ時雨に咽ぶ豆腐屋の聲
小止みぬる時雨のひまをかつ見れば空冴ゆ渡り星のかゞやく
埋火に埋もれてさへ寒き夜を哀れ誰が子か温飩賣るなり

夕靄　潮東

夕靄に鹿磯のあたりたそがれて入日の名殘紅の海づら
浦やどに濤の音たかき旅枕結びつさめつ故郷のゆめ
うぶすなの神樂聞えて星一つ光かすけく明け殘る見ゆ
佇めば我もろ共に奥つ城の夕日をうけてながく影ひく

野菊　外圃

峰堂の甍の落葉露にぬれて鞍馬山杉朝の霧うごく

野營する籌は消ねて霜の朝いなゝき寒し片われの月　百光
牛追うて歸る蕎麥畠薄月夜村の古寺暮の鐘なる
薄野に狐なくなる夕月夜妹はかへらず此夜さびしも

櫛一枝（吊妹）

「歌ひませと」妹が送りし樂の譜を妹を吊ふ琴に奏でし
夜は半ば妹が初七日經を誦せば香の煙の花にたゆたふ

ひと葉　秋風

月清き夜半を小琴の音もすみぬいざ笛とりて野をあゞがれむ
山寺にわび居のこよひ燒きすてむ今は悲しき故郷の日記
その昔罪人斬りし森かげに今朝霜白く雉子鳴くなる
足すゝぐ宿のたらひの眞清水に小松葉うきて灯かげうつらふ
道問ふとたゝく裏戸にこたへなくたゞ姫百合の風にうなづく
浴して家に送らむ文もかきつ夕さびしく船歌を聞く
宵やみを物思ひつゝ庭に立てば木犀の香のいとゞ身にしむ
草笛を吹きならしつゝ馬子の行く夕日てりそふ能登の山路

殘星數点雁横塞　長笛一聲人倚樓（趙嘏）　時習寮東壁會

わびしさの繪師が小庭のかけ鉢にやせ〳〵咲ける白菊の花　風草
たそがるゝ山ふところの家七戸さ霧の中にたゞうすれ行く
會堂の十時の鐘は鳴り止みぬ城下の秋に一人たゞずむ　半脱
霜置きし背戸の菊畑菊の香の冷たく匂ふ有明の月　外圃
馬車過ぎし麓の驛の川やせて夕日淋しう鵙鳴きしきる
消燈の鐘に更け行く秋の夜を郵便かなし友世にあらず　弦月
夕風に早くも秋の色見ねて草葉かくれに蟋蟀の鳴く　松波
川べりの棗の蔭に佇みて紫暮るゝ能登の山見る　ふもと

## 俳句

竹椽に山茶花散るや餌擂鉢　紫影
料理屋の露地窮屈に菊畑
著綿のたきまどはせる白菊や　紫影
悼子規子二句
人戀し婆娑と月夜の葉雞頭
好物の柿もくはずにゆく君よ
破れ芭蕉　秋風

竹の秋風もしづかに三日の月
紅葉して日に日に雲の美はしう
萩寺の夕さびしき木魚かな
我庵は水のさゝらぎ遠砧

初霜　外圃

穂芒やくづれ落たる橋の跡
雁なくや夜汐さす江の星あかり
辻堂の切髪ふくや秋の風
菊の香や天長節の朝心
病む我に母が手紙や秋の暮
霧うごく杉の梢や峯の堂
椽側に猫の拔毛や秋の風
霧はれて月出る杉の雫かな

○　K　N　生

平作が笠に重兵衛蜻蛉哉

# 雜報

## 新任教官

久しく本校にありて育英の職を奉せられし杉森、堀二先生は廣島高等師範へ轉じ、明石先生は福岡中學修　館に赴任せられしが、後任として新に本校教官の任に就かれしは、左記の三先生なり。

水蘆幾次郎先生（佐賀縣）
○明治廿二年、東京明治學院卒業。
○同廿三年石川縣金澤北陸女學校奉職。
○同廿六年同金澤私立金澤女學校長。
○同廿七年明治學院奉職。
○同卅五年七月本校講師囑托。

藤井國弘先生（東京府）
○明治卅五年東京帝國大學機械工學科卒業。
○同年八月、本校講師囑托。

上原菊之助先生（岐阜）
○明治廿七年第一高等學校卒業。
○卅年東京文科大學史學科卒業。
○大學院（德川氏ノ財政）
○卅二年東京國學院講師。
○卅二年九月埼玉第一中學校奉職。
○卅五年五月東京陸軍幼年學校教授。
○卅五年八月本校教授。

其外教授山田郁二先生は高橋と改姓せられ、講師田部隆次先生は教授に任せられたり。

袖裾相觸るゝ亦是れ多少の緣とか、尋常一樣交友の間尙夫れ情誼の溢るゝ者あり。況んや師弟間に存する情操豈深甚なる者莫かる可けんや。

近代師道の衰ひたるや久し。誠に是れ品性陶冶上に於ける一大欠點にして、有志の者の常に憂ふる所なり、我等今爰に新舊教官を送迎して新感懷に横溢す希くは驥尾に附して其間の消息に力めんか。謹んで舊師の健在を祈り新教官諸師の幸榮を庶幾ふ。

## 卒業式

七月一日本校創立以來第十四回（大學豫科第八回）卒業證書授與式を擧行せらる。文武諸官署、諸學校及び有志星列の裡、式は嚴かに始まり肅かに終れりき。

卒業生諸子本校は本日諸子の爲に此式典をあげ以て諸子が正に本校所定の課程を修了し、我卒業生に要する所の資格を具備することを證明す。是實に諸子の榮譽にして余輩が大に祝せんと欲する所なり。然れども諸子は此の榮譽を擔へると同時に一の大なる責任を負へる者なることを忘るべからず。抑我國開國以來五十年、上下競ふて歐米の文化を輸入し學問技藝政治法律より海陸軍の事、商工業の事に至るまで大に面目を改新し、富强の点に於ては一見世界先進國に耻ぢざるの觀なきに非るか如しと雖も、内に顧みて深く其實情を考察する時は、尙我の彼に及ばざる事遠く、殊に人生最も重んずべき道義の一点に於ては、現今實に言ふに忍びざる者あるなり。自今奮て先進國の富强に後れざらんことを勉め、又社會の道義を上進せしめん事は我國民一般の責務にして而も之が率先者たるべきものは一に之を高等教育を受けたる人士に待たざる可らず。是れ國家が高等教育の機關を設けて人材を陶冶する所以なり。諸子之より進みて帝國大學に入らば、能く本日受け得たる所の資格を愛重し、夙夜國家恩養の厚きに思を致し、刻苦勵精各々專門學科を研鑽し、獨立自敬以て益々其人格を高め、國家所望の機に副はんことを期すべし。是れ諸子が本日の榮譽を全うし、且つ國家の厚恩に對して其責任を盡す所以なり。諸子旃を勉めよ。

明治卅五年七月一日

第四高等學校長　吉村寅太郎

本日本校生等の爲に朝野貴賓の賁臨を請ひ茲に嚴整なる式典を擧げ以て其課程を卒へしことを證明せらる、生等の光榮又大なりと云ふべし。顧みれば生等螢窗雪案已に三年、本校教養の深厚なる實に感謝に堪へず。然れども前途遼遠にして尙螢雪の苦を積まざる可らず、而して今校長閣下の凱切なる訓戒を蒙る生等爲なりと雖も豈感銘せざらんや。自今、益々夙夜黽勉、學德を磨勵し、本校教養の厚きに報ひ、本日の榮を全うせんことを期す。謹で蕪言を陳じ以て答ふ。

明治卅五年七月一日

第四高等學校第十四回卒業生總代　竹村勘悳

（參考）

今回卒業生の原籍地は左の如し但し其の人員の數順に因る。

| 府縣 | 員數 | 府縣 | 員數 |
|---|---|---|---|
| 石川 | 二〇、 | 新潟 | 一九、 |
| 富山 | 一二、 | 岐阜 | 九、 |
| 京都 | 八、 | 福井 | 六、 |
| 東京 | 五、 | 奈良 | 四、 |
| 三重 | 四、 | 島根 | 四、 |
| 廣島 | 四、 | 栃木 | 三、 |
| 愛知 | 三、 | 靜岡 | 三、 |

長野　三、　鳥取　三、
北海道　二、　神奈川　二、
千葉　二、　岡山　二、
大坂、兵庫、埼玉、茨城、山梨、滋賀、
山形、秋田、高知、大分の一府九縣各一、

## 第十四回卒業生氏名

### 第一部法科（英法）

京都政治　伊藤基樹（岐阜平）
東京政治　米澤清治（富山平）
東京政治　櫻井小一（東京平）
東京法律　宮北篤治（石川平）
東京法律　松山堅太郎（新潟士）
京都法律　家城尙由（富山士）
東京法律　高井竹二郎（富山平）
東京政治　森岡京二郎（奈良平）
東京法律　太田常石（富山平）
東京法律　山崎駿二（石川士）
東京法律　秋月致（靜岡士）
京都法律　桐山誠一（岐阜平）
同　村野美雄（福井士）
東京法律　鵜飼益治（京都平）
同　大木彝雄（富山平）
京都法律　室木彌二郎（石川平）
東京法律　古田德夫（栃木士）
同　坂口重一（三重士）
同　大橋貞勝（島根士）

### 第一部文科

東京史學　高橋周而（新潟士）
同　國史　今井正親（新潟平）
京都政治　山本節二郎（岡山平）
東京哲學　若守義孝（埼玉平）
同　哲學　志知善友（岐阜平）
同　言語學　畠山圓諦（石川平）
同　哲學　轉法輪戒淨（神奈川平）
東京政治　藤森忠一郎（岡山平）
東京法律　福田美知（石川士）
東京政治　本多忠之（福井平）
京都法律　小島誠造（京都士）
東京政治　土肥丁介（富山平）
東京政治　伊佐壽（北海道士）
京都法律　原田重光（京都平）
京都法律　大森吉秋（奈良平）
東京政治　日野則成（石川平）
東京政治　千代庄三郎（鳥取平）

### 第一部法科（獨法）

東京法律　安達欽靖（富山士）
同　野口淳吉（富山士）
同　山岸哲夫（奈良士）
同　笠井仁八（新潟平）
同　武部欽一（石川士）
京都法律　清水清（愛知平）
東京法律　大村欣一（石川平）
同　英文　金子健二（新潟平）
同　英文　開發喜二郎（石川平）
同　史學　石塚正一（千葉平）
同　史學　松木覺成（新潟平）
同　哲學　巢山了然（富山平）
東京法律　中村梅三（廣島平）
同　英文　山崎直三（東京士）
東京法律　小林清二郎（栃木平）
同　史學　高柴金二郎（岐阜士）
東京政治　奥田寛太郎（廣島平）
同　史學　藤内充（大分平）
同　史學　山口浩義（島根士）
同　史學　小川洵藏（石川士）
同　哲學　島本愛之助（京都平）
同　哲學　關隆誠（新潟平）
同　哲學　松扉得悟（石川平）

第二部工科

東京機械　竹村勘忍（石川士）
同　同　松繩信太（新潟平）
京都電氣　岡村金藏（三重平）
東京造船　河合定二（福井士）
東京土木　山田博愛（新潟士）
京都機械　山田泰作（石川平）
東京建築　國枝博（岐阜士）
東京採鑛　近藤宏太郎（新潟平）
同　機械　勝守貞二郎（東京平）
京都電氣　石崎庚作（石川平）
東京電氣　關野長（新潟平）
京都土木　角田榮三（大坂士）
東京造船　陰山金四郎（新潟士）
同　機械　前田良夫（福井士）
東京應化　星野二郎（靜岡士）
京都機械　景山齊（島根平）
東京採鑛　小野連三（山梨平）
京都採鑛　飯沼九十郎（岐阜平）
東京機械　田丸信俊（石川士）
京都土木　福田稔（京都士）
東京土木　瀧山恒松（北海道平）
東京造船　國本順作（石川平）
京都土木　中村宇太郎（岐阜平）
東京機械　丸山茂治（新潟平）
東京土木　塚本省三（東京士）
同　同　奥山龜藏（山梨平）
京都同　植村富五郎（京都平）
同　土木　臼井邦吉（愛知士）
東京舶用　三橋篤敬（石川士）

第二部理科

東京物理　南保仁三郎（石川平）
同　動植　石田收藏（秋田士）
京都數學　山本多家松（石川士）
京都數學　角尾猛二郎（奈良平）
東京化學　森谷精一（兵庫士）

第二部農科

東京農學　原澄二（鳥取平）
同　林學　藤田義爲（富山平）
同　同　安藤一二（神奈川平）
同　同　藍澤誠一（新潟平）
同　同　山崎嘉夫（福井士）
同　農學　安木章敏（鳥取平）
同　林學　松下莊作（靜岡平）
同　同　掛飛作太郎（石川士）

第三部醫科

京都　上野道故（新潟平）
東京　松澤善二（新潟平）
京都　上野忠愛（京都士）
同　得能孝平（富山平）
東京　清水喜鐵（新潟平）
京都　鮮良孝吉（新潟士）
東京　長谷川淳明（富山士）
同　今井金三郎（岐阜平）
同　高松靜（東京士）
同　降旗積（長野平）
同　青木龍雄（岐阜平）
京都　久德隆篤（滋賀士）
東京　竹尾敦造（廣島平）
同　外垣秀重（長野平）
京都　小林隆次（長野平）
同　服部貞二（愛知平）
東京　原田憲治（島根平）
同　伊藤賢三（神奈川士）
同　吉田昌治（千葉平）
同　竹內琢麿（福井士）
京都　森元良雄（廣島平）
同　河口幸左衛門（三重平）

東京　塙繁樹（茨城士）
京都　風野信介（栃木士）
東京　西山實淳（高知士）
京都　磯精一（京都士）
同　山本正勝（新潟平）

総計百二十八名

## 卒業の諸氏を送る

歳華早々白駒の隙を過くるより速かなり、學年は茲に全く終を告け先輩の諸兄は今や其課程を卒ゑて金城を辭せらる、今諸氏と分袂する固より喜ぶべくして決して悲むべきにあらざるなり、諸氏は先に英俊の才を抱いて望を青雲の高きに囑し、黽勉奮勵能く其志望を達し北辰校下に光明燦たるの桂冠を戴いて更に帝國大學の教筵に溫奥の教義を研鑽せられんとす、東臺の秋色、嵐山の春光、相共に諸氏の來るを迎ふるなるべく、諸氏の胸中亦密かに此等の春光秋色に讓らざるの成算あるなるべし、生等は諸氏の境遇を回想して羨慕の情禁ずる能はざるものあり、生等後進固より最高學府の眞境を窺ひ知るに難しと雖も、恐らくは教義深遠學理幽奥又高校の比にあらざるべし、之の難關を踏破し得て光榮ある歴史を一身に荷はんとするの諸氏、其前途や好望なりと言ふべし、然れども精を致し力を盡すの餘時に或は二豎の襲來するなきを保せんや、希くは諸氏家國の爲め自重せられよ、

## 新入の諸氏を迎ふ

三伏の酷熱漸く夢と消へて、然も未た全く送り去らざるに當り雨既に冷かにして雲霧切りに湧騒し、山野共に金風颯々の聲を傳ふ、是秋に當りて二百の俊髦新に白光爛たる北辰校下に來り集る、吾人の喜悦何物かよく之に若んや、想ふに卿等はその鄕國を辭するの際宏遠の志望を抱いて「出鄕關」を歌ひしなるべし、實に卿等の前途や有望固より這般の意氣なかるべけんや、然れとも金城の地由來淫靡壞倫又北陲の僻地に似ず、爲めに遊士をして轉た望鄕の情懷を禁ずる能はざらしむるものあり、而して此の裡の襟懷なきものに至ては、動もすれは滔々たる此地の時流に動かされ、世潮の濁浪に淆亂せられて成功の彼岸を望みつゝあわれ悲風一陣空しく無楫の漂舶たるに至るもの少しとせず、固より新來の俊髦皆精氣堅强此等は眞に杞人の憂たるに過ぎざるべしと雖も、前車の覆る又以て後者の戒となすべきなり、卿等は卽ち青春意氣極めて高壯なるの時代たり、窓前書見倦むの時、北海の怒濤に心腸を洗ひ、西山の峻嶽に胸襟を壯にし、專ら品性の陶冶に思を致し、勇往直進一に希望の光明を辿りて奮勵せよ、唯北陸の地陰雨濛々極めて健康を冐し易し、請ふ幸に自愛せよ、聊か以て卿等を迎ふるの辭となす、

○曩に三高遠征の擧あり、戰に赴くの勇士咸謹愼自重、天晴れ古武士の態度を失はざりき、悼いかな、時不利して豎子をして猶覇を西陲に稱せしめんとは、嗚呼勝敗は天なりといふといへども豈又人事に由らざるなしとせんや、當日の勝敗の如きは予輩今に至て猶且憤慨に堪へざるものあり、寄語す辰章校の健兒、兄等は撰手諸氏が我校の名譽と我校特有の氣魄とを双肩に荷ふて戰ひしを知るか、而して兄等は此等撰手諸士を見る實に冷々淡々、其の出征を送るなく、其勢に酬ゆるを知らず、撰手諸士の胸中果して奈何の感かある、然れとも撰手諸士、請ふ嘆ずるを止めよ、兄等の手腕沈勇は余輩既に之を知る、當日の事固より兄等の力及ばざるにあらず、技劣なるにあらず、必竟此れ平素我校一般運動に冷淡なるの致す處なり、蓋し其敗れし所以の

道を察し、之に應ずるの策を廻らさば他日會稽の雪耻、固より難きにあらざるなり、敗ると雖亦遂に勝つ所以の道たるを得ば一時の敗衂聊か以て忍ぶに足らんか、

○現時學生の氣風日を追ふて墮落し去り、濁流の長堤を決するが如く、滔々浸漸勢當るべからざるものあり、嗚呼此の如くにして休まずんば遂に邦家の前途を如何せんや、柔弱纖羸風雨にも堪へ難き青瓢簞果して國家の重任に背くなきを得んや、一高の健兒は夙に此に見るあり、都下幾万青衿の儀表たらんとして、天下に率先して運動の要を說き、此が發達を圖り其成果大に見るべきものありたり、我校の志士も既に大に悟る處ありて、曩日の遠征となる、實に沈睡せる北國青年界のため嘉すべきの壯擧たり、今や我邦高等學校は其數八、各一方に屹立して互に覇を稱し皆其特長を發輝す、此時此際相通して相共に其特色を鬪はし雌雄を決するは決して無益の業にあらざるなり、就中運動は其最捷路たり、余輩は望む、事情の許す限り學校も之に便宜を與へ、學生も自ら進み、八校相通して和親研鑽斷長繼短以て古往オリンピアの偉觀を致さんことを、

○運動の重せざるべからざるは既定の論に屬す、誰か言ふ之を排斥すべしと、運動の要を知らざるの痴漢は畢竟世に益なきの徒のみ、走つて味噌汁に顏を洗つて來れ、我れ初めて敎を垂るるに吝ならざるべし、

○我校春秋二期に於て運動會の擧あり、而して此擧年々歲々衰運に向ふ悲むべきかな、此の春秋二期の運動會は正に之れ健兒が日常學窓に呻吟して內に磅礴せるの英氣を外に發展せしむべきの時たり、故に學校も勉めて此擧を盛にし、敎師も學生も俱に努力すべきなり、寄附も募るし、喜捨も受くべし、募りて、受けて、其用途を誤らずんば其盛隆期して待つべきなり、區々の議論固より意とするに足らず、凡て之れ茅蜩の喧々たると一般のみ、

○盲者をして色を裁せしめ、聾者をして音を斷せしむ、誰か其愚を嗤はざるものあらんや、而して我校春秋二期の運動會裏委員の選任に於て常に此の狂態を見る、運動の振はざる豈宜ならずとせんや、慨又嘆、

○我校近時の狀況は既往と大に其面目を異にし善美の域に進みたりと稱す、而も未た全く墮落の分子を排除する能はざるは甚た遺憾とする處たり、先輩の士屬斬魔の健筆を振ふて此を警醒すと雖も、學生相互の制裁力甚た微弱にして、巷間辰章帽を戴いて着袴せざるの醜漢あり、禮讓を解せずして敎堂に不遜の非禮を行ふものあり、誠に痛嘆の至なり、余輩は常に此輩に向て鉄拳を御見舞申さんと企つるや久しかりしも微力奏効の致し難きを嘆しき、今や吾と感を同うするの士續々起つて北辰紙上健筆を驅り、學生の本領を論じ、校風論を奏して筆誅を彼輩に加へつゝあり、あゝ天下正義の聲漸く熾となれり、宿志成遂すべき正に此時にあり、汝腐敗漢今にして改悛せずんば竟には天誅の辱を免れざるべし、悛省せよ、痴漢、

○前號紙上の筆誅に猛省せざりし腐敗漢は、果然本月十三日霹靂一聲斷頭臺下の露と消ゆ、吾人は之の墮落生を出せしを深く悲むと共に、寧ろ之の一腐敗分子を掃除し得たりしを喜ぶ、

○北辰校下六百健兒の中堅となり、主動者となるべきは卽ち是れ時習寮にあらずやと喝破せし時習寮の諸氏、兄等は自から此語を吐いて而も自から此語のために苦めるにあらざるか、借問す兄等は自治の精神あるか、否兄等は所謂自治

なるものゝ本領を知るか、自治の本領は蓋し兄等が容易に思ひ到らざる深遠無窮にして而も至高至美なるものなり、卽ち自治とは主義本領によりて自ら重んじ其分を守り、其身を愼み事を敬し窮するも濫せず、所謂大人君子の道を踏むにありて、徒らに倨傲尊大自ら高しとなすの謂にあらざるなり、兄等若し六百健兒の中堅たらんと欲せば速に時習寮をして自治制度の本體を形造り諸般の壓抑關涉を脫し而して後天下に皷號せよ、是に於てか兄等の言始めて聞くに價せん、猛省せよ寮生諸氏、

○第二公認下宿の起るや其聲甚た大にして吾人は爲めに聾せんとせり、而して其斃るゝや氣息甚た微にして强弩の極矢に異らざりき、余は其何のために斃れたるかを聞かむと欲するものにあらざれども、由來起るに甚た盛なるものは其亡ぶるや亦速なり、寧ろ微に起りて隆に榮ゆるの優れるに如かず、

○時習寮の一隅時に往々俗歌の聲を聞く、其調や野卑賤劣、恐らくは四高健兒の口吻にあらざるべし、若し外來の客たらば何ぞ一擊を呈するに躊躇せる、不幸寮生たらば此輩必竟墮落の源泉をなすもの、宜しく大に制裁を加へて可なり、昔は孔明馬稷を斬りし例さへあり、何ぞ此輩を屠るの難きことかあらんや、

○國に憂國の士あつて憤慨絕叫國民の惰眠を覺醒せんと努むる間は國容易に亡びず、憂國の士跡を絕ち、國民惰眠を貪るに至つては國終に亡ぶ、我校に於ける亦然り、余は竊かに我校の前途を憂ひて慷慨激越校風發揚の難きを嘆するの志士甚た多からざるを悲む、（蕪木生）

## 東京帝國大學通信

現に東京帝國大學法科大學に在學する本校卒業生宮北篤治氏より本校の一友人に寄せたる書中參考とすべき所少なからざるを以て今其大要を左に揭げむ

商風瀑氣流るゝの候諸兄愈御勵精奉大賀候偖昨日漸く赤門をくぐりし身が校内の樣子知らすといふも片腹痛き次第ながら少々見聞のまゝを御報知申上候小生の見る所必ずしも万人の認むる所にあらざるべく又正鵠を失せる觀察も可有之候間左樣御了承の上御一覽の榮を賜らば幸甚の至に御座候

一、授業時間は法律科は二十二時間政治科は二十四五時間に御座候

一、聞く所によれば政治科の方の外人グリフキン氏の經濟の講義は極めて解し易き由、本年はテリー氏歸省の爲め英法講義は松波教授代理してコンモン、ロウを擔任せらる、獨法レンホルム氏のパンデクランの講義も極平易なる由、佛法ブリデル氏の講義は書物なしにてプリントを配布し左程六ケしからず候

一、羅馬法の講座は戸水博士渡清の爲め未だ開かれず、比較法制史も教授到着せざるため開講の運に至らず、されど之は近々始まるべくと存候

一、佛法としてはブリデル氏の講義の外松岡講師のカピタンの民法有之其講義は可なり面白く候、ブリデル氏は甚だ親切に候

一、講義の進行は穗積八束教授の憲法最も速に候

一、目下の所佛法第一回生は四十余名有之候

一、教授の指定したる參考書は獨乙書最も多數を占め佛語書之に次ぎ經濟學を除きては英語書のもの一冊も無之候、されば若し寸暇も有らば獨乙語の練習御勸め申候、されど英法には無論コンモン、ロー有之候へば英語のターレントも

必要と存候、兎に角法律科を修めんとする人は獨佛二語最も必要と存候
餘は時々御報知申べく候早々頓首

## 文科大學通信

左に掲ぐるは文科大學に國文學を修せらるゝ渡邊良法氏よりの私信の數節なり事重に二年級に關すれど或は會員諸君の參考の料にもとこゝに採錄しぬ

（前略）大學の方は本十月に入りてやゝ眞面目に相成り新學年はちと興味を相添へ申候

一思想をたどりたる日本文學史（二時間）　芳賀先生
一國文學（二時間）　藤岡先生

これは多く書物を讀ませんとて現今伊勢を讀み終へ此次はやまと物語其次は珍本全集中の或物をよまんと申居られ候

一言語學（二時間）　上田先生
一國語學史（二時間）　保科先生
一文章法（二時間）　岡田先生
一上古史（一時間）　萩野先生
一文選（二時間）　長尾先生
一白樂天之詩（一時間）　森槐南先生
一不在（二時間）　三上先生
一日本儒學史（二時間）　星野先生
一漢文（一時間）　盧谷先生

右の他外國語六七時間有之候芳賀先生の時間は中々大繁昌に御座候右の二時間は生等の爲に候へ共尚一年にれいて一時間日本文獻字といふやうないはゞ國學史的のものをやられ居候又三年の爲に日本詩歌學一時間講せられ申候藤岡先生は今二時間三年の爲に文學史を講じ居られ候昨年に引續き榮花大鏡よりにて今日にて大鏡を終り申候關根先生は一年のために源氏の葵より講義致され候又三年のために



は日本演劇史を講せられ候之は芳賀先生よりの御注文とかにて先生も御得意の方面なる故あの口調ありて此講義あり頗る面白く滿場に御座候又小泉氏は『英文學にあらはれたる花』といふ講義に御座候由獨乙はF先生の著なる"Aus der deütschen Litteratür"といふものに候（下略）

（前略）此頃は三上先生の論文に取かゝり居候それは

一歷史の材料として見たる土佐日記
一歷史の材料として見たる枕草子
一臺記にあらはれたる著者の人物性行
一野宮子爵家の文集につき定靜定祥等のホームライフ
一春臺の經濟錄の梗概
一道春の史眼特に羅山文集につきて

の六題にて其一を撰ぶべきものに候（下略）

## 國語會記事

其聲の徒に大にして其實のこれに伴はざるは厭ふべし、我國語會が多く人に知られずして而かも眞面目なる研究の態度を執りて倦まざるはいさゝか以て誇るに足る可きか、

會は毎週水曜日午後二時より一時間動植物教室に於て催し藤井乙男先生講義の勞をとらる、さきに德川文學の精髓とも稱すべき淨瑠璃の作者列傳を講せられしに今やそも終りを告げたれば、去る十一月十二日よりは歌舞伎狂言に關して講せらるゝ事となりぬ、

我國語會は來る者の多きを願はざれども來る者はこれを拒まざるなり、篤學の士、雜談に費す所の一時を割きてこの眞面目なる文學の研究に從事せよ、

## ◎テニス部報告

○紅白勝負。九皐高く澄んで秋漸く深く炎熱の烈は既に去りて嚴冬の酷未だ來らず、滿山の紅葉錦を飾り、正に是れ健兒の腕を振ふべき時、吾がテニス部の熱心家脾肉の嘆に堪へず、茲に十月二十五日を卜し醫專、石川第一中、石川工

業の撰手諸子を加へて紅白勝負を行へり。當日は幸に晴天を得しと雖も風少しく強く加ふるに秋季運動會を前に控へし爲め、且つは會する人の少なきを憂へ且つはゲームも如何かと氣遣ひ居りしに、焉ぞ知らむ時至れはさすか校中尤も隆盛なると目せらるゝテニスの事にて來り集るもの庭に滿ち未曾有の好勝負を表はしき。いざ其愉快なる然かも活氣滿々たる健兒のゲームを錄して以て他日の印象とせむ。

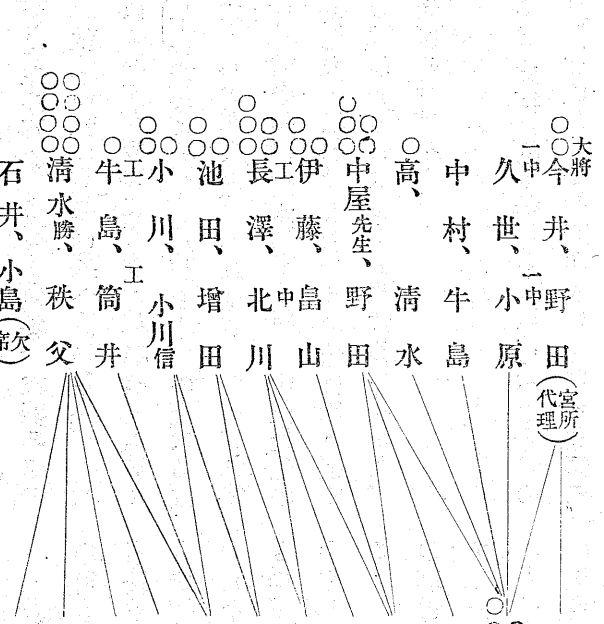
午後二時半、テニスの大將今井喜代志君の審判の下に勝負は開始せられたり。先頭第一現はれし白軍の加藤、千代の組は千代に加藤(勝たう)と力みしも紅軍の清水勝、秩父の組にチッフーと打勝たれ、續いて出陣せし笠原の鐵砲ボール、逢坂のダイレクト、西のバックも其甲斐なく、見る〳〵四組拔かれて白軍暫し顏色なかりき。幸ひ松橋、齊藤の大男組奮然立つて之を喝采中に斃し漸く三組を拔きて白軍稍々景氣附けり。然るに工業の大チャン長澤の組紅軍にありて彼の當日の大立物たる本間、藤井兩先生の組を善くも打破りて又東軍の勢加はりし所に醫專の大チャン其名も高き高、僅かに一ヶ年にてチャンとなりし東郷の組出でし事とて忽ち白軍の大勢を挽回せしと思ふや紅軍の中屋先生、野田の組破竹の勢を以て二組連破し、東軍の勢當るべくも見ねざりき。是に於てか白軍の副將伊香、衣斐必死となりて奮戰せしかば其腕前すさまじく本校のチャンピョンと聞ゆる高、清水。中村、牛島の組、一中の大チャン久世、小原の組をも斃して紅軍の大將にと迫りぬ。伊香はサーブは強く衣斐はカットに得意、其勢猛虎も當るべくもあらざりき。されど名にし負ふ今井、己に大勝利を得し野田との戰なれば、頑固の抵抗を試みしも終に敗れ、いよ〳〵大將と大將と相見ゆるに至れり。腕はりん〳〵、拍手は鳴り〳〵、滿坐手に汗を握りて今ぞと見張る中、球はぽん〳〵と打返され或はカスリボール、或は飛來る彈丸かと疑はるゝ強ボール出で觀者をして轉た嘆稱措く能はざらしむ。斯くて双方共一ゲーム勝ちて三番目のゲームもボース迄進み、今や間髪を



容れざる一打ちの下にあはや紅白勝負も決せられむとす。然る處白軍の大將河原如何なる故にかフオルトアゲンをやり、月桂冠は終に紅軍に歸しにけり。時に午后五時。

其勝負表左の如し。

(○印は勝ちしゲーム數)



り。規定に從ひ四組を拔きし伊香、衣斐の組、清水勝、秩父の組に賞品は與へられたり。

當日何れもサーブの番にて多くは負けしものゝ如し。是れ或は偶然ならんがサーブの拙なるは一原因たりしや明なり。さればこそサーブに得意なる伊香君の組、清水勝君の組、中屋先生の組等成功したるなれ。又打返すの球は餘り強く出さんと試みしものは多く失敗せしに似たり。豈注意せざるべけんや。

仄に聞く、此術に妙を得たる選手の多き今日の如きは未だ其比を見ざる所なりと。以て如何に吾校のテニスが盛大となり、如何に進歩せしかを察するに足る。宜なる哉。近時テニス一組にては到底〱諸子の望を滿すこと能はざるに至れり。嗚呼吾黨の士、之れが救濟の策如何?。

（忘評は偏に御容赦あれ……委員清水）

## 禍なる哉

○自ら高うするはよし、されど、凡庸にして自ら高う持せんとするに至りては、共に談るべからず。

○月を見て悲しみ、蟲の音を聽きて泣くはよし、されど、徒なる悲哀、血なき涙は何かせむ。

○強き意志の力をもて燃ゆるばかりの情を抑ゆるは、必ずしも冷かなりと言ふべからず。故園の春色を懷ひてあたら時を移すは、吾等に取りては何の要かあらむ。

○人一度は必ず懷疑の境に陷ると、幾多の經驗の後遂に此境に迷ふは、實にさもあるべし。未だ經驗に富まざる吾が徒にして、自ら懷疑を口にするに至りては、其痴や笑ふべし。

○懷疑といひ厭世といふ、强ち聞き惡くきには非ざれども、淺薄なる懷疑者、實なき厭世家はげに禍なる哉。

## 愚、癡、盲、啞、

○人間は風車にあらず。如何に烈しき風吹き來ても。廻るまいと思ふ時は廻らぬなり。

○人間は雪達摩にあらず。如何に烈しき熱射來ても、解けまいと思ふ時は解けぬなり。

○廻るまいと思ふものを、無理に廻さうとするのは、愚者の仕業。

○解けまいと思ふものを、無理に解かさうとするのは、癡者の仕業。

○世に愚者と癡者と多し。

○丸くないのは人間なり。坂で落しても轉がること無し。

○舌のあるのは人間なり。壁へ向はしてもだまること無し

○頭の形をのみさすりて、人間は丸るいときめるは盲者の考。

○たゞ口が動くばかりと思ふて、人間には聲が無いときめるは啞者の考。

○世に盲者と啞者と多し。

# 寮報

## 寮報（一）

### 時習寮送別大茶話會記

秋風一陣蟲の音しげき宵々そゞろ身にしむ月を眺めては遠き故鄉をしのびしも夢。白峯颪のさむき日もねず。花さく夕窓の邊にいそしみ勉し學び男の交も、いや深みゆく綠の頃となりては、血に啼く時鳥のそれならねど、諸共にかなしき別に逢ふが常なるこそ詮なけれ、况して父とも仰ぎし前校長北條先生の別に臨みては、誰れか堪えざる思あらざらん

かくて名殘りの會は去る五月十一日無聲堂に於てひらかれぬ、今日をこそと赤心こめたる寮生

はそれ〳〵會場餘興等の準備にいそがはしかりしが時習寮前亭々たる杉の梢に夕日うするゝ頃、準備全たく終へてこゝに開會の運びに達しぬ、無聲堂裡紅紫の幕をひき廻され柱は綠の葉にて掩はれ正面には「清興」と記したる額をかゝげ、嚠喨たる奏樂は己に幕の後に起る折しも電燈は一齊に輝き廻りに飾りし藤の花をもれて紫匂ふ光は滿堂を照しぬ、紅!!紫!!白!!綠!!相照らし相映じて美しさ限なし會場掛の心やりも思はるべし、時は移りて六時近き頃擊拆の聲と共に大津君は寮委員を代表して開會の辭を述べらる要はその時機稍早に失したれども都合上今日に開きたる次第にて吾が最も敬尊する北條先生は今度第四高等學校の重任より轉じて更に一層重大なる職責に鋭意その敏腕を奮はるゝの光榮を得られしは實に吾等國家の爲めに祝はざるべからず顧れば先生が我校に赴任せらるゝや風紀肅新校風は日に揚り大にその面目を改めし者幾干なるを知らず今尙ほ着々としてその歩を進め今や天下に鏘々たるの觀を現出するに至りたるは全く北條校長の確固嚴肅なる訓示に基く。吾等今日先生と一朝その袂を別つと雖豈多年の訓示を忘れて可ならんや又我卒業生諸君は近日洛陽に上られたる上は益々奮勉し以て大に學德を研くと共に他日國家の有爲の人となり社會の上流に立つに及びては愈々國家の爲めに盡されん事を乞ふまた終に臨み先生及卒業生諸君が健康を祈ると拍手喝采の裡に壇を下り次て山岸君は卒業生総代として一場の挨拶を試みられ次て寮生清水君は懸河の雄辨を以て昔年四高の風紀頽亂は北條先生によりて一洗せられ今日に於ては漸く天下の重視するところとなりたる所以を述べられ次て大津君は今日北條先生に別るゝの悲みと共に大に國家のために祝賀すべきを說かるゝに續きて西田先生は諄々として熱心に吾等のために訓誨せられ下壇せらるゝや北條先生は徐ろに席を起ち嚴肅なる態度を以て語氣沈勇徐々として我ためにかくの如き盛大なる送別會を催されたるを深く謝する旨を述べられ次で諄々たる訓諭は語々肺肝より出でゝ吾等に强き印象を與へ四坐傾聽聞然として人なきが如し己にして終るや拍手は急霰の如く人は萬感胸に迫る內、佐野先生は起つて例の詭警の言を以て寮生將來の注意を說かれ次で元寮生たりし醫專生徒某君は縱橫に諷刺的演舌を試みらる、かくの如く演壇の變遷送迎に急はしき間に時迫り、これより餘興に取かゝらんと告げければ一座色めき渡りて、喝采拍手の聲は、さながら耳をつん裂くばかりなり、折しも嚠々たる奏樂は、遠ちこちの笑ひに和して滿堂雜然たる間、茶菓は分たれぬ、主客膝を交て互に笑語にふけるうちに、忽然として高らかなる詩吟は幕の彼方に起り威風凛々たる一壯士は己に劍を按じて舞臺の中央に立てり、飜然として驚くが如く、悄然として思に堪ねざるが如く、三尺の秋水白虹をあざむけば、己にして天を仰いて皓々たる月を觀るに似たり、これを加藤君の劍舞となす、次に大なる人形出るやと見れば忽ち破れて洋服姿となり忽にして車夫と化し忽ちにして商人となるその變幻出沒實に觀者をして覺わず歎賞の聲を發せしむるものこれを松橋君が七化の藝となす、やがて壇の中央に端坐するものありこれぞその道の堪能と聞わたる園田君の琵琶歌なり、曲は「ヲカチン」の歌にして或は高く或は低く、その嚠朗たる妙音は銀盤上に玉を轉ずるが如し、次には山岸君が勇壯なる「威海衛」を歌はれ餘音は長く一坐の聯想を弄ぶうち、紫匂ふ幕のかげより響きし琴笛の合奏は嚠喨として梁上の塵をうごか

し、人はみなその美妙の曲に醉ひ、天使は來つて蒼穹に舞ふが如き思あらしめき、それもやがて拍手の音に消ゑ行き樂屋が中の笑聲につゝきて練り出でたる幾十の力士、毛布にて作りたる化粧廻は金銀の切紋にて飾られ、紫もるゝ電燈の光に映じて時ならぬ異彩を放ちたり、やがて土俵入りを終へ擊柝の音面白う樂屋に入りければ次に大なる蓄音機は卓上に運ばれぬ、これぞ龜山君が新機軸の考案にかゝりしものにて、氏は徐ろにこの蓄音機を得たる所以を滔々として述べられぬ、初め氏が悠然たる一夢の間、乾坤已に百年を閲し星移り地變り、堂々として空に聳ゑし本校は今や高閣華樓軒をつらね車馬熱鬧織るが如き裡にありて日々百万の學生はその門に集り、日本文化の中心はこゝに定められ、その教授その教室事々物々一として眼を驚かざるはなし、氏は今更に今古の感にうたれたる折しも物理室の隅に發見せしはこれぞ氏が見覺えありし蓄音機にして以て百年の昔を傳ふべき好紀念物なり以て文化の發達を徴すべきものなれば、幸に乞ふて今日の茶話會に携へ來りしなりと人は氏が舌頭の技に弄ばるゝうち、やがて器械は備ひて、歌ひ出づる英詩一曲、續ては詩吟「タイ盡し」等にして各願を解かしむべきものなりき、時恰も十時過ぐる頃なりしかば、こゝに本日の呼物たる月世界に移りぬ、待ちにまちたることとて拍手の聲かまびすしきうち電燈は忽ちにして滅し四顧暗々人は底なき闇に葬られたゞ知る朦朧たる白幕の無限の空間にかゝり、身は渾沌の世にかへりて漠々たる星雲を望むが如きを、雛然たりし一座は肅として眼は悉く幕の中央に集まれり、悠然として顯れたる黒奴二人、或は倒立し或は飛躍し、忽にして消え忽にして表はる次に映じたるは大食坊なり瞬時にして飯を食ひ草履を食ひ遂に衣服をも食ひ終りたる末便々たる腹を抱ゑてその場に倒るゝや、片方よりは檢疫醫來りてその腹部を解剖し再び草履衣服を引出すてふ滑稽を演じ、次は雲つく大男と豆の如き男との相撲にて股下をぬけては必死と立働くさま仲々笑の種なりかし、續いて飛び出でたるは種々の形したる鬼の刀提げて走り行くにて漸く遠くなり漸く近く踵反して躍り廻るさま實に百鬼夜行とや云はむ、かくて餘興はこれに止め電燈再び輝けば人は夢よりさめたる心地して互に顏見合せては、自から笑を禁ずる能はざる者あり時已に十時半に近けれはとて、一同立つて校歌次て寮歌を合唱し後ち北條先生万歳卒業生諸君万歳を三唱しこゝに目出度く閉會することとなりぬ

互に別離の情にかきくれて戸外に出づれは北斗欄干斜に松黒き城の端にかゝり死せるが如き天籟の端なくも葉櫻の上をわたりて木の間に見ゆる月糸の如し（外圃）

## 寮　報（二）

### 新入寮生宣誓式

九月廿日午後一時新入寮生宣誓式は至誠堂に於て施行せらる職員室長及新入寮生席定まるや先つ寮務委員園田三郎君時習寮簽規を朗讀す次に新入寮生総代として高畠清君宣誓文を朗讀せり後吉村校長幷に高橋舍監の訓諭ありて自治の愈愈重ずべくして各自責任の少からざるを思はざるはなし佐野寮務主任は寮務に關し精密なる統計表を作りて簡明に報告せらる

時習寮現在人員級別

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一部一年 | 二四 | 二年 | 五 |
| 三年 | 一 | 計 | 二九 |
| 二部一年 | 二四 | 二年 | 四 |
| 三年 | 一 | 計 | 二九 |

三部一年　一一　二年　二
三年　一　計　一四
合計　七十二人

時習寮生出身中學校別

早稲田　五　開成中學　五
東京第一　四　郁文中學　三
高師附屬中學　三　大成中學　三
福井中學　三　山梨中學　二
錦城中學　二　京都第一　二
莊內中學　二　宇都宮中學　二
磐城中學　二　會津中學　二
愛知第一　二　栃木中學　二
麻布中學　一　浦和中學　一
新發田中學　一　水戸中學　一
小濱中學　一　飯田中學　一
明治義會　一　札幌中學　一
大坂第一　一　斐太中學　一
佐倉中學　一　盛岡中學　一
安積中學　一　東京第四　一
北野中學　一　和歌山中學　一
石川第一　一　京華中學　一
埼玉中學　一　富山中學　一
神田中學　一　三重第四　一
神戸中學　一　鳥取中學　一
山梨第一　一　長岡中學　一
天王寺中學　一

時習寮生道府縣別

東京　一二　福井　七　福島　六
茨城　四　京都　三　栃木　三
山梨　三　北海道　三　愛知　二
埼玉　二　新潟　二　山形　二
富山　二　群馬　二　和歌山　二
岩手　二　石川　二　鳥取　二
大坂　二　滋賀　二　神奈川　一



長野　一　岐阜　一　佐賀　一
三重　一　兵庫　一　千葉　一
合計　七二

前學年時習寮人員表

月末在務人員　月末現在員

卅四年九月　六八　六四
十　月　七〇　七〇
十一月　七二　七二
十二月　七三　七三
卅五年一月　七〇　七〇
二　月　七三　六三
三　月　六六　六三
四　月　六七　六四
五　月　七一　六三
六　月　七一　六三
計　七〇一　六六五

六月末に六十三名の內卒業生七名受驗落第三名欠席落第一名及第五十九名

時習寮退寮統計表

卅四年九月入寮〔舊寮生〕一三
〔新入生〕五五
十　月退寮〔病　氣〕五
〔家　計〕一
十一月退寮〔病　氣〕三
卅五年一月退寮〔修　業〕五
三　月退寮〔病　氣〕一三
四　月退寮〔病　氣〕一
退寮せし總人員　二八

右報告終りて式を閉づ

## 時習寮本學年第一回小茶話會

舊を送りて別るゝの情忍びすと雖ども新を迎ひて語るの情快の快なるものに非らずや我時習寮每學年の始めに於て離合の感を起す亦止むを得ざるなり我寮小なりと雖ども校風の基礎をなす

べき者獨り我時習寮に求むべきに至りては寮の勢力亦大なる哉今や其原動力たる新寮生を迎ひて時習寮の前途を語り將來の覺語を談する快の快なるものにして豈獨り我寮の喜びのみならんや

九月廿日新寮生入寮宣誓式終りて學年第一回小茶話會は無聲堂に開かれぬ寮生大津康君開會の辭を述べ西田前舍監、佐野寮務主任は醇々乎として親しく寮生を訓戒せられ宮川舍監は沈重なる態度を以て而かも滑稽的に諷刺的に寮生を諭され特に德育涵養に就きて縷々陳述せられしは寮生の最も敬服する所にして五里霧中前途の光明を得たる心地せり寮生二三氏の演說終りて茶菓となり談笑無限和氣堂に滿つ時既に廻りて日脚短し此に於て寮歌を合唱し來賓寮生一同食堂に會食す次に音讀室に至れは餘興百出何れも趣味津々として盡くる所を知らず午後十時閉會す

## 時習寮大茶話會記事

世を擧げて溷濁、虛僞相陷れ、華美相競ひ、滔々として人道義を顧みざるの時、秀麗たる白峯の北、清冽たる河北の南に凜として立ち、廉耻禮讓を標榜し、親ら校風の發揚者を以て任ずる吾時習寮生七十の健兒、聊か平素勉學の勞を綏め、並に新入生相互の親睦を計り、而して、其悠々和樂の間に益不拔の大精神を發揮せしめむ目的を以て、茲に明治三十五年十月十六日、本學年第一回大茶話會を無聲堂に開く。

金澤城頭偃蹇せる老松の梢を今離れし弦月に、寮園の稚菊、白、黃、紅、益艶なる午後六時、集合の鐘に誘はれて無聲堂に入る。

紫色、紅色、互に美を爭ふ四稜四條の幔幕を以て四壁を廻らされたる會場は、正面に今宵の趣旨たる「淸游」の扁額を懸け、淸綠の杉葉を以て飾られたる四柱には、「廉耻禮讓我本領」「校風發揚我本分」「第四高校時習寮」「秋季大茶話會」の四句墨黑々と記されたり。寮生が誠意を表はせる、爛熳たる瓶中の花、寮生が須臾も念頭より離すべからざる梁間の萬國旗は、その理想の光美はしき電燈に映徹し、燦然、眩する計り。唯思ふ、會場係諸子の如何に心を苦しめられしかを。

集り會する者、來賓として校長を始め、職員、舊寮生、各級總代、各公認下宿總代及通學生等無慮百五十名、さしもに廣き堂も、爲めに狹隘を感じき。

やがて、亮々たる音樂は場の一隅、幔幕の中より響き來る。於茲　委員總代として菊地君起つて簡潔に開會の辭を述べ、同君の先唱にて來會者一同起立して、「君か代」を三唱す。唱聲は嚠喨たる奏樂に和して、滿場和氣靄靄、唱、終るや、高橋舍監は壇に立ちて、眞摯の態度、明晰の辯舌を以て吾人を訓戒さる。要は左の如し、

凡べて此の世は對稱を持つ、故に人未だ社會に出でざる間は已に如がざる者は友とするを欲せざれ共一旦世に出で、事を處するに至らば皆已れに劣れる人々の中に交るべし、是れ他なし卽對稱によりて已れを人に勝れて見せしめむが爲めなり、斯くの如く諸般の事物は皆その引立物をとり對稱によりて其長を表はす、依て余今宵の茶話會の引立物となりて諸子に一言せむとす、若し余の談話にして諸子に興味少く感ぜしむるに從つて後に出づる餘興は益興味多く諸子に感ずべし、かくてこそ余が引立物たるの本分は盡くすべけれ、故に余は極めて無興味なる談話をなすべし。凡て人の生涯は只一回のみ決して再び繰返すべからず、故にある時代に於て失敗せし故再び其時代に立戻りて行ひ直さむと欲するも到底成し能はざる所なり、而して人の一生涯は短か

しと思へば短かきが如くなれ共實際に於ては長きものあり、今一生涯を五十年と見るも其間に生ずる雜事の如何に多きかを見れば決して五十年短きにあらず、僅々一時間の苦痛憂慮實に永しとは感ぜざるや、故に此生涯を輕々視して無意識に暮さば必す臍を噬むも亦及ばざるに至るべし、失錯せし昨日は決して取り戻す能はず、故に余は此生涯を旅行の路に例へて余が今迄經歷せし事に就て語り聊諸子が此の路を踏み迷はざる柴折とすべし、然し余と雖決して少しも誤らずして立派に旅行し來りし者にあらざれば其詳しきは語るを得ず、然れども彼の孱弱なるスペンセルは能く衛生に就いて論述せり、之れ自身の不健康に依りて感ずる事多き故人に向ふても亦奬勵せしなり、余も是れと同じく余の過失に諸子をして轍を踏ましめざらむ事を勉むるなり偖、此の世路には五つの難關あり、この五關については諸子已に聞きしならむ而して一言の下に其平易を笑ふならむ、然れども「聞いたる事は未だ知れりと云ふべからず」、平易の如く見ゆる此五關を世人は概ね通過する能はず皆その前に倒る實に此等の關は妖魔の力を有す、五關は何ぞ、卽ち

第一、飲食關、この關は百難の依て生じ而して人往々過つ所殊に青年にありては最意を注ぐべきの所たり、

第二、色欲關、これ世路の最難關、之れに就いては贅言するの要なし、唯思ひ見よ、世人のその一身を過つもの〻多くは何に起因するかを、

第三、金錢關、金錢の貴重は唯是にて買ひ得る物に對してのみ眞の、愛情、智識、勇武に向つては金錢亦瓦礫にだも及かざるなり、金錢は決して吾人が絶對的得ざる可からざるものにあらず、

第四、名譽關、名譽も人は必要なり、然れども唯此の物を得むことにのみ熱中して世人の多くは此物より尙重大なる事を往々排棄する事あり、是れ實に忌むべきの事、

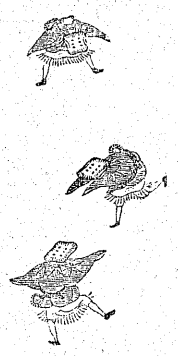
第五、生命關、生を欲し死を厭ふは人の當然の性、然れども是れ時に依つてのみ、大丈夫事に臨むや身を顧みず。

以上の五關に抗して因循たる者は到底人世の正路を通過する能はず、彼の南洲は曰ひき、「世に命、金、位を欲せざる者程始末に困る者はなし、然れども此始末に困る者に非ずんば克く用ゐるに足らず」と、實に人は此五關に其行路を遮へらるゝ間は何事も成し能はざるなり、斯く此五關は恐るべきものなれば吾人は力めて此等の關を容易に經過するの策を講せざるべからず、而してそれに就きては亦非常なる困難と勞力とを要す、卽吾人は誠意誠心益其理想を高潔にし益其勇氣を雄大ならしむべし、その方法種々あるべしと雖先づ最簡易なるは主として先哲の事蹟を考究するにあり、かくてこそ此五關を通過し得るに庶からむ、

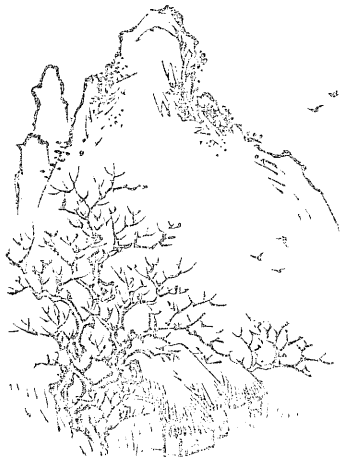
此の如く滔々と談せられたる言言句々は滿場百餘の肺腑を透徹し、處世の秘訣の鍵を與へられき、次いで校長起ちて威嚴と慈愛と交々雜りたる口調を以て、「公德心の欠乏」、「心の病の療法」及二三の雜感を圓滑に、然も、適切に述べられ、終つて、佐野寮務主任、寮を代表して來會者に、盛に臨席せられしを謝し、續いて醫學專門學校生土田君の趣味津津たる「消化について」の談、野田君の山岸、今井兩君よりの祝辭披露、舊寮生総代の式辭、第二公認下宿総代の演說、各級総代の挨拶、皆拍手の裡に終りぬ。茲に於て、

茶菓を饗す。音樂の爽快なる響は送られぬ。光景は靜肅を變じて和樂となしぬ。忽見る、前面の廣間に一個の偉丈夫の現はるゝを。短袴、帶刀、襷いかめしく十字に綾取る、是れ卽ち餘興部員栗本君なり。かくて今、餘興は開かれぬ。妙朗なる詩吟につれて、「高德題詩」を舞ひ、次で「捨子」を舞ふ、前者は壯絶、懦夫をしてよく起たしめ、後者は悲絶、鬼神をして能く泣かしむ。次に伊藤君亦「城山」を舞ふ。一躍一轉神に入り、故英雄の最後の樣彷彿として見るべし。やがて、賑かなる奏樂の起るや、長手短足にして赤頭の三怪物の跳るあり、是れを逆立踊りとす、その狀、實に珍妙々、奇妙々、滿場抱腹絶倒せざるものなく、喝采暫し止まざりき、蓋し、是れ當夜の最滑稽なるもの。此の興終るや、謠曲の妙音は起りぬ、誰ならんと見やれば、寮の小使某小倉服着せし儘にて端然群集の前に座し、「實方」の一段を謠ふ頗る堪能なり。夫れ日常は吾人の爲めに勞を惜まず汲々たる彼が、今宵亦此團欒の中に交りて吾人の爲めに興を添ふ、其勞や謝すべし、其情や欽すべし。次は「今樣大岡裁判」、商人体の人と農夫体の人との爭鬪を、奇智ある警官が之を判決するといふ筋、輕卒なる商人と朴訥なる農夫とはよく其性に適し、鰌髯の警官は最好評を博しぬ。次を薩摩琵琶「臺灣入」の素吟とす、吟者は誰そ、新來の妙手加藤君なり、勇猛なる、悲愴なる光景は君が朗々たる一揚一抑によりてよく描出され、滿堂感に打たれて少時身の那邊にあるやを知らざりき。次ぎの芝笛は淸曉。菰踊りは輕妙。詩吟は感服。此の終りの二者の間に、已に斯道の巧妙を以て任ぜられたる園田君は「武藏野」を一段吟ぜられぬ、獨特の美妙なる音調は、高く低く、悉く俗を離れ、爲めに梁上の塵も舞ひ、階下の砂も跳りやすらむ。やがて地獄巡りは到りぬ、其道具の意を凝せる、其人數の多き、然も吾人の豫想せし程左程に興味多からざりしは何ぞや、之れ既に吾人の耳目は津津たる餘興を恣にしてその感を鈍ならしめしに依れるならむ。然れども吾人は今「あまりに興あらむ事は必あえなきものなり」を思ひ浮べぬ。此等の錯然演出せられし餘興の絶え間〳〵には、常に音樂部の諸子ありて吾人をして毫も厭怠の意を生ぜしめざりしは深く謝する所なり。かくて餘興は猶止まず、茶番生地藏に及びぬ、演者は皆餘興部の敏腕家、意氣相投合し、其技實に一大コメディーとして敢て遜色なかりき、一擧手一投足悉く觀者の頤を解き、拍手喝采鳴りを止めず堂も亦搖がむ計りなりき。

然れども時は人を俟たず、時辰器時に十一時を指示す。依つて溢れむ計りの歡樂を一先づ包むべく、菊地君は再び起つて閉會の辭を述べらる。而して來會者一同、聲を擧げて、同君の音頭により、寮歌を歌ひ、更に大呼して、天皇陛下萬歲、第四高等學校萬歲、時習寮萬歲を唱へて堂を出づれば、四邊薄紫に覆はれて、たゞ白き月のほのかにすめるを見る、恰も微茫たる春の夜のそれの如く。



# 附錄



# 附録

## 一泊行軍演習記事

韶風十里、花將に散らなんとして、行樂の子女反て氷絮の飛ぶに惱む、青帝の惡謔此に至りたるか、はた東皇の稜威衰へて然るか、耕人往くとして時の順ならざるを嘆せざるなく、巷客來るとして上天の無情を咨嗟せざるなし。既にして花散りぬ、筆頭柰のびぬ、月今や半ばならむとして偶ゝ中央氣象臺報あり、曰く、九州西部の海上に現れし低氣壓通過し去れり天候是れより漸く快晴ならむと。想へば雪霰塲裡に蟄籠の陋を學びしこと、そも幾月ぞ、而して楊柳怨むべし、春光會らむと欲して猶不時の疎風冷雨の厄に遭ふことや。しかも此報一たび傳はりて愁眉頓に開け磊々たる雄心搖きて止まず、辰章校健兒の意氣方さに衝天の概あり、年少武夫若し起すべくんば寔に此時にあらむか。果然一泊行軍演習は四月十四日を以て城南幾里の山河に於て行はるゝことゝなれり。

隊伍の部署は、例年の如く期に先つこと三日、即ち十一日午後一時を以て悉く確定せられ、大隊の編制左記の如く成りぬ。

統監部　統監代理　今井省三

部員　中野嘉作　西田幾多郎

書記　赤尾直松　山田喜久良

大隊本部　大隊長　磯田正謙

副官　森岡京次郎　旗手　河原繁

書設　宮北篤治　橘超妙

設營部員　杉森此馬　竹田留次郎　宮地彦八郎　加藤操

會計部員　田中鉄吉　楠正可

鐵道輸送掛　長屋順耳　佐野安麿　赤尾直松

衛生部員　市村塘　津川恒　沖野彌一郎　吉村新六　山科龜義

第一中隊　中隊長　日下庄太郎

小隊長　第一　伊藤基樹　第二　竹村勘悉　第三　久德隆篤

特務曹長　森谷精一　曹長　石塚正二

給養掛　原田重光

視察員　ユンケル　中俣匡　宮川熊三郎　本間好茂

第二中隊　中隊長　福見常太郎

小隊長　第一　逢坂元吉郎　第二　森祐吉　第三　高村政太郎

特務曹長　熊田直忠　曹長　龜川兼吉

給養掛

視察員　河合義文　三竹欽五郎　西英盛　八波則吉

第三中隊　中隊長　宮川爲三

小隊長　第一　藤内充　第二　角尾猛治郎　第三　伊佐壽

特務曹長　日比野俊雄　曹長　千秋寛

給養掛　園田三郎

視察員　ド、ハビランド　林並木　藤井乙男　森内政昌　田部隆次

第四中隊　中隊長　吉崎佐次郎

小隊長　第一　山田博愛　第二　岡村金藏　第三　上野忠愛

特務曹長　野田勢次郎　曹長　笠原忠太夫

給養掛　及能謙一

視察員　エ、ウオルフハルト　中目覺　堀維孝　村田金太郎

十四日　拂曉半千の健兒結束して起てり。仰げば蒼穹旬日の陰雲あとなく晴れて、浩蕩たる春光戎衣の袖に滿つ、年少征兒の意氣、豈凜乎として而して天に冲せざるを得んや。時正に八時三十分、曦曉たる鐵笛尾山城崖に響きて校旗肅々進軍を始めぬ。嗚呼、偉なる哉健兒の豪懷や、壯なる哉武夫れ出途や、文武二途を兼ね備ふるもの、夫れ爾にして始めて是れあるか。

金澤驛より滊車に搭じて小松驛に下車す、時已に晌午に近からんとす、由つて直ちに晝食を終へ、憩ふこと凡そ半時、忽ち演習開始の令は傳はり、一般想定は大隊長より達せられたり。今其想定の要を摘記すれは、

四月十四日演習想定

一、北海道を南進せし北軍は小松を占領す、而して尙其前進を續行せんとし、一支隊を南淺井、三谷を經て津波倉方面に派遣す、

一、南軍は大聖寺附近に於て其軍を收め、再び前進を始め、動橋附近より一支隊（假設）を箱宮、粟津を經て津波倉方向に派遣せり、

の如し。尋て又大隊命令を下さる、

大隊命令（四月十八日午後零時卅分於小松町南端）

一、敵は動橋方向にあり、我軍は之れに向て前進せんとす、

當大隊は左側援護の目的を以て南淺井、三谷を經て津波倉方向に前進せんとす、

二、第一中隊は前衛に任す、

三、第二、第三、第四（假設旗）中隊を本隊と

す、

四、衛生隊及び風紀衛兵は本隊の後尾に、大行李は本隊の後尾より千米突に在る如く行進すべし、

五、予は本隊先頭にありて行進す、

大隊長　磯田正謙

注　意

一、敵は帽に日覆を附す、

一、赤旗一本は一中隊を、紅白旗一本は一小隊を表す、

一、槊杖の取扱に深く留意すべし、

是より先き、吉崎中隊長の率ゆる假設敵は既に發して南淺井方面に赴きぬ。やがて午下一點鐘、わが北軍亦此に警戒行軍の隊形に移りて斥候を放つこと愈〻頻りなり。蓋し此地方水田萬頃幾條の溝渠東西に通じて、しかも幾多の村閭森林遐邇其間に點在し、斥候の搜索稍〻困難なるもの、如く、幾度か衣を褰げて沼澤を涉るの已むを得ざるに會へり。南淺井村を過ぐる頃より土民往々報を齎して曰く、敵の一隊は山代橋を渡りて右折せり、敵の斥候三谷附近に出沒すと。形勢漸く逼りて搜索の難更に一段の難きを加ふ、さはれ勇士戎軒を事として既に已に命を鋒刃に懸くるもの、何條這般の勞苦を厭ふべき、何條這般の情報に驚くべき。或は樹間を縫ひ、或は田疇に隱れ、或は屋背に沿ひ、或は麥隴に蹲踞し、馳驅奔走一に遺漏なからんをつとむる健兒の忠誠、端なく思ひは往日外征の艱辛が苦艱を偲ばしめ、多感の我をして轉た可憐の情に咽ばしめぬ。吁、一個眇たる列伍の身も、出で〻敵情偵察の大任に當れば、三軍の命運悉くかゝりてそが双肩に在り。誰か汝を一兵卒と誣ゆるものぞ、此時汝の譽れは將軍れそれと軒輊し難きあり。既にして一時五十分、我尖兵三谷を搜索して村内敵の潛伏するものなきを明にし、進んで村の南端に出でんとするや、忽ち見る、敵兵約一小隊木塲湖畔に沿へる一帶の邱上に展開して豫め我れの到るを待つもの、如し。是に於てか砲聲一發、太平孤村の夢破れて腥風忽ち天を蔽ひぬ。敵兵輙ちわが散兵に向て應戰するよと見る間に、早くも彼は我が猛烈なる火力に辟易してか、卻走すること約六百米突、更に左右に双峙せる林埠に據りて激しく我が尖兵を瞰射せんとす。乃ち日下第一中隊長は直に其前衛を散開せしめ、奮然飛丸を冒して一蹶敵壘に肉迫せんと欲せしも、敵は既に勢格形禁の地利を扼して其力亦侮るべからず、加ふるに前面水田の彼我を遮るものあり、若し夫れ強ひて我兵を進めんか、少くとも忠勇なる健兒の過半を失はざるべからざるを如何にせん。奇正の變、絶世の勇ありと雖も、此一大要害を獲取するは決して尋常一般の事に非らざる也。今少しく其地勢を語らんか、左方に洋漾たる木塲潟を控へ湖岸に沿ひて幾多の丘岡斷續重疊し、蔚蒼たる松林其上に駢列して展望更に開けず、又田疇を其間に挾む、遠く右方を望めば、峨々たる白岳中天に聳へて、岩巒たる峯巒之れより南北に連走し、餘麓延ひて是等の丘岡となれるものにして、實に守るに易く攻むるに難き要害の地形といふべし。されば敵は此形勝の地利を恃んで横ざまに我を狙擊すること益々激しく、殷々たる礮聲山河を震撼し、硝煙漠々として天日爲に闇し。敵勢夫れ此の如くに熾なり。而かも善く兵を用ふるものは譬へは常山の率然の如しとかや、今や將軍神計胸中に沸きて妙策立ろに成れり、輙ち磯田大隊長は自ら本隊を率いて迂回潛行遙に敵の左側に出で、短兵突擊、一擧にして之を鏖殺せんとせり。然れども機を察するに敏なる敵將はまた急遽陣

を撤して木塲村の方向に遁れ、我軍遂に敵陣を陷るゝを得たりしも、敵を屠りて空しく鋒刃の間に倒れし幽魂を慰するに由なかりしは均しく北軍勇士の遺憾とする所なりき。

溟濛たる妖煙漸く散せんとしてしかも亦戰塵捲く。さきに木塲方面に走れる敵は何れに遁れしや其所在を明にせず。我軍は高埠將に盡きんとする所に到りて全軍を整へ、大隊長は此時更に第二中隊に命じて前衛たらしめ、大に津波倉方面の敵を探らんとす。而して尖兵田畑の間を過ぐること約二三十米突、俄然敵は敗殘の餘卒を糾合してまた木塲村の北端に露はれ、林間に戰線を布きて我が進軍を阻遏せんとせり。我が尖兵の過ぐる所、田疇坦夷にして毫も陰蔽すべき地物なかりしかば、敵兵好機乘ずべしとして、發砲すること頗る劇しく、我兵死傷するもの尠しとなさず。本隊は直に埠上に展開して激烈なる一齊射擊を施し、天地轟々山河再び動かんとす。かくて我軍應戰尤甚だ力むと雖も敵勢亦決して侮り易からず。極めて頑强の抵抗を試む依て別に一隊を割きて間道を經、繞つて敵の背後を衝かしめ、前後鼓噪して夾擊せんことを謀る。然るに敵兵未だ幾許ならずして敗走し、我軍直に木塲村を占領す。

我軍既に數合の戰鬪を爲して、士卒漸く疲氣喪神の色あり。時に報あり、敵兵主力を集めて津波倉北方の高地に據ると。想ふに彼は此に殊力を盡して最後の死生を一戰に試みるなるべし、如何に全軍疲憊すと雖も、敵と聞いてはなどか振はざらん。殊に其主力を集むと聞くに於てをや。やがて一發戛然、飛丸頭上を掠めて去るや、全軍悉く展開して四方より掩擊す、敵兵僅かに二個中隊の寡兵を以て我に當り、しかも其猛勢與し易からざるものあり、然りと雖も彼は既に所謂死地に在る者、我を以て彼を壓する、蓋し礮礪を以て卵に投ずるが如しと謂ふべきか。此時戰正に酣にして山陵林麓兵ならざるなく、硝煙深く凝りて天日を覆ひ、地軸悉く摧けて四方暗澹たり。縱横奮鬪屍を蹈み流血を涉り、左右等しく嗷嘯叱咤して敵軍へと肉薄すれば、敵は次第に兩翼を斷たれ辛うして津波倉に接する一丘に據り旗色漸やく動かんとす。時は來りぬ。將軍則ち踊躍して蹶起し、自ら牡馬に跨り雄劍を揮ひ、右翼の一隊を麾きて突貫と一喝すれば、健兒いかでかためらふべき。劍鋩閃き喊聲起り叭聲低く又高く曉々と響きて、馳突奔迅する有樣は、まさに是れ疾風の秋葉を掃ふが如く、積水の谿を決するが如く、壯といはむか、はた快とたゞへんか、げに北辰健兒日頃の豪懷さこそと思ひやられて勇ましともいさまし。

偶々休戰の命は傳へられ、清風一吹兩軍劍を收めて莞爾と笑めば粉叟菜花に戲るゝもうれしく、松籟簌々として凱歌を奏するも幽し。時正に午後四時なりき。

やがて津波倉を過きて行くこと數町、磯田大隊長は各幹部を集めて嚴かに演習に就きての講評を下せり、其略に曰く、

演習全般に關する想定及び大隊命令は曩きに中隊長より說明ありたるものと信ず、而して本日の演習は假設敵の演習にして、何等特種のものにあらざるが故に、別に述ぶべき所なし。唯一二自己の考ふる所を話さんか、最初に敵と逢會せし地形は、敵にとりては十分の地利にして敵の兵數も相當にありたるもの〻如し、此時第二中隊は迂回したりしも敵早く退却し去れり、次で第二中隊を以て前衛に任じたるが、此時また敵に會合せり、第二の陣地にありては大隊長は敵情を誤り、輕信して

尖兵小隊を前進せしめ、中途にして劇烈なる敵の射擊を被れり、乃ち更に他の中隊をして狹路を經て敵の右側に出でしめ、尖兵は暫く小隊長の指揮に任せたり、是れ其當を得たるものにはあらざる也。第三回の地形は諸子の既に見たる通り、第一、二中隊專ら敵に當れり、故に予は第三、四中隊を以て突貫したり、其狹隘にありし敵兵は少數なりしを以て、十分に占領し得たりと信ず。

演習中に出されたる報告は可なりき。

と。かくて少憩の後、軍裝を整へ、步武堂々隊伍肅々、豫定の如く粟津に着し、宿舍に入りしは夕陽猶麗しく輝きて、風輕く戎衣を撫づる暮なりき。

孤村一夜、軍星まさに流れ、佩劒の響、銃の影、名にし負ふ鑛泉粟津の村落は戛々鏘々の地とはなりぬ。其の昔快健兒木曾義仲をして、千古の恨、虞兮虞兮を歌はしめて、傲骨、湖畔の露となりにし所、何の因ぞ地其の名を同くする。さはれ彼れ敗殘の其の地は、今戰勝の兒を横ふ此の地の春と較すべきにあらず。勞脚、洗ひ去りて樓に倚れば、星斗正に欄干。劒を解きて鑛泉に一浴を試み、晩餐を呼んで飢腸を醫し去れば、健兒の來往は參差、又牽牛、時ならぬ黑影は、平和春の夜の街頭に溢れぬ。

翌くれば四月十五日、鷄鳴曉を報ずれば匹馬風に嘶くてふ夫れならで、銃を枕の一夜の夢は、銀聲透る喇叭の響に呼び覺され、衾を蹴て起てば殘星軒頭に淡し。將軍の令は霜の如く、躍る寶刀氷の如し。午前六時、步武堂々粟津を出づれば花ぐもりの空、滿天さながらに薄紗をかけたるに似、聊か當日の快晴を疑はしむる者の如し。第二中隊、先頭として菜花の畔を行く蜒々たる長蛇、彼の村落を縫ひ、此の松林を迂り、沿道村家の春、梅花零殘の芽屋、靄々たる和樂の境を經て三湖臺の嶮を過ぐ。臺は所謂三湖岸に立てり、聽くならく某の年某の頃、結髮紈袴の金澤藩か風聲一夜、隣藩越前を邀ひ擊たんとせし夢の跡と。松丘一帶甚だ高からずと雖も亦是れ屈竟の嶮なり。一路の大道、參差亭々の松林を走り、湖光時に松樹の隙より洩る。

八時半、小松町に入る。町は彼の大聖寺と相并びて加賀の國西部の要樞たる者、街を縱貫して東に進む蛇の如き街勢、甚だ大ならずと雖も、中々に盡きやらで、時を費す三十分餘、危橋を渡過して町端なる菅公社内に銃を結ぶ。時正に九時十分、空にはびこりし雲脚何處にか消ゑ去りて征衣汗を滴らすの晩春初夏の快晴となりぬ。勇士落々の意氣、風雲今將に動かんとして、乾坤今靜なり。軍氣昂り、殺氣滿々。

社を出で〻行く少許にして、大隊長は部下の將士を集め當日演習想定を令せり。

四月十五日演習想定。

一、小松附近ニアリシ北軍ハ北陸街道ヲ背進セントシ一支隊(假設)ヲ小松ヨリ美川ニ通ズル道路上ニ派遣ス。而シテ南軍ハ之ヲ追擊セン爲ニ四月十五日朝、動橋附近ヲ出發セリ。

是に於て宮川中隊假設隊として出發するや、福見中隊の第二小隊は尖兵に、第一第三小隊は前衛本隊に命ぜられ直に敵の跡を追ふ時正に十時なりき。日下中隊、吉崎中隊及び福見中隊の一小隊を以て本隊となし徐々として警戒行軍を行ふ大隊長之を指揮す。十一時晝食を取り行軍を續け廣漢たる加賀平野を眼眸にしつゝ、江の島、下の江等の諸村を過ぐるに敵の隻影を認めず。思ひらく我軍の武威堂々四面を壓す、賊膽碎け去りて掉尾の決戰を試むるの勇氣なきなり

と。然りと雖も陣頭に立ちて敵と鋒鏑の間に相見る、兵家の尚ぶ所は敵を侮らざるにあり。敵彼れ今、其の軍氣昂らざるを見て背進を試む、而して彼れ又何んぞ我が追擊に意を用ふるなきを得んや。立江村は凱歌を以て我軍を迎ふる者の如く、福江村頭の森は軍神万旒を翻して勇を鼓するに似たり、而して未だ敵影の發見を傳ふる者あらず、將軍胸算既に成るあるも、敵の其の劒を反し銃を揃え來りて我に當るにあらずんば焉んぞ妙計鬼策施すに地あらん。斯くして進み、斯くして追擊す。逸走十里遂に竪子をして三十六計の上策を悔らしむるか、我軍私に敵の餘りに弱きを笑ひつゝ落つる日影を村路の樹蔭に避けつゝ行く時、飛電一閃、福島村に入りつゝある本隊を驚かせり。曰く尖兵の第一斥候、敵を村端道の側面、約七百米突の松林中に發見せりと。

既にして一發の砲聲轟けり、本街道より左、遙に桑畑、麥畑を隔てゝ一帶の松林臥龍の如く横はる、敵は之に據りて我を要せんとする者の如し。彼れに地形の利ありて我に據るべきの地の利なし。敵を咫尺の間に發見する元是れ尖兵斥候の罪なりと雖も、我軍此の地勢の不利を見て豈に勇を摧く者ならんや。福見中隊長先づ前衛を以て之に應じ敵を牽制するや。大隊長は吉崎中隊に命じて正面攻擊に當らしめ、急電直下、福見中隊の若干及日下中隊を率て街道を驀進し短兵敵の背後を衝かんと計る。

吉崎中隊長は第二小隊をして左方に轉じ、自ら第一第三小隊を指揮して進擊す。戰鬪は既に始まれり。松林中の敵約二個小隊、盛に發砲して我を苦む、吉崎中隊長劒を揮て號令甚激大に力むるに當り、尖兵及前衛又進んで兩軍の距離百米突に足らず。我軍桑畑に散開して攻擊益々激烈



なるに至り、敵軍稍々色めきて砲火又減ずる如し。是に於て吉崎中隊長は叱咤雷鳴の如く突貫を令す。沙を蹴り、桑條を碎き、電擊肉迫すれば、敵遂に守を失ひ東南に背進す。我軍既に松林の一部を占領せしも、廣漠なる松林眼界を遮り、敵の那邊に潜むかを知る能はず。加ふるに敵の殘餘尚ほ雜木林に在りて我が隙を竊みて攻擊の勢を取る一小隊に足らざる少數を以て我が兵に向ふ、勇氣固に愛すべく聊か我が軍勢の優を試みるに足る、即ち包圍攻擊殲盡せんとするや、彼れ遂に堪ゆる能はずして逃遁す。追擊又追擊、彼數々盛り返さんとするの氣あるも大勢又如何ともする能はず、海濱に沿ふて南下す。我軍之を追ふ急なるも、地一帶の白沙、飛沙眼を苦め、天日又燒くが如く海風蓬々として進擊に利ならず、而して敵時々、物に據りて我を苦むるも、我が兵威の班盛なる又如何ともする能はず、逃遁幾回、飛丸の音を後にし沙を飛ばしレールに沿ふて走りぬ我吉崎中隊と前衛及尖兵は此に其の勢を合し敵後に迫り凡そ五十米突、敵の本隊は海濱手取川河口の沙丘に據るを見る。思ひらく最後の大決戰を試み、一戰輸贏を爭はんが如し正に是れ一時十分。

敵の據りて以て防禦せんとする地形たるや、海岸の大沙丘にして海は是れ茫々たる日本海を控え右には手取河口を抱き、前に鉄道線路を瞰下し、地形最も防禦に適す、況んや渠れ今背水の陣を張りて我軍を邀ひ討たんと謀る。我軍最も不利の地に立てり、攻擊を試むべき方面只二のみ左よりせんか沙に脚を埋め運動の自由を制せられん、前面攻擊に從はんか、全軍を露はし徒に渠等の標的となり了らんのみ。窮鼠將に猫を喰まんとす、將軍の妙算果して幾何。

我吉崎中隊の敵を追擊したるもの本隊の來るを

待ちて沙丘に據りて少憩せしが。本隊の一部隊忽ちに急轉村後の高地に展開し、猛烈なる攻擊を始むるや、吉崎中隊及前衛等又相應じ砲聲天に轟き海若怒り、沙伯叫び、敵軍又惡戰最も力め軍氣毫も沮喪するの色なし。於是我本隊の軍旗は翩翻として高地の上に顯はれたり。攻擊愈々猛烈にして而して敵軍の苦戰益盛なり。砲火中天に轟き、銃聲霰の如し。硝煙の裡猶は海風に叫んで翻るは敵の牙旗にして叫喚暗啞、敵軍の將、劒を揮つて號令する聲、砲聲に亂るゝ雖も縱横叱咤、背水の虎將軍、全身の精力を此に注ぎ、猛然として將士を指揮す、固に古將軍の面影を存するものあり。我軍亦益精力を加ひ來り、中隊長の面は火の如く、劒は指揮の號令に海風に喚くが如く、滿身の血流、眼に亂れ、屍積んで楯となし激戰正に闌にして、我大隊長の虎哮先づ響きて一隊の貔貅は挺身直下、鐵道線路の堤防に據り迫り來れり。而して一隊又一隊我軍鶴翼の陣形を以て必死の勇を鼓し、屍を踏みて前進する一刹那。突貫の令は下れり、皎々たる銃劒は忽然として走り、鯨波地を動かし、喚聲天に振ひ、敵の據りて以て堅とする丘陵に肉迫せり。危機は來れり。勝敗の決は迫まれり。而して喨々たる喇叭の音は亂軍の裡に響き渡りぬ。劒戟は日に閃き、軍旗は海風に鳴り、喚聲の餘韻は遠く海を掠めて轟き去れり。

硝煙散じ金鼓止む。軍士血滴の劒に杖き將軍の肥馬颯爽として鬣を揮ふて嘶く。正に一時四十分なりき。

手取川を渡りて美川停車場に至る、大隊長は場の中央に立ちて當日演習の講評を試み、暫時休憩の後、金澤行きの列車は我等を載せて出發せり。

## 明治三十四年度第四高等學校北辰會收入支出決算報告

△印ハ減ナリ

| 收入ノ部 | 原豫算額 | 流用增減 | 豫算現額 | 決算額 | 原豫算額ニ比シ決算額ノ差 |
|---|---|---|---|---|---|
| 第一欵　經常收入 | | | | | |
| 第一項　特別會員寄付 | 一、一二八一五 | | 一、一二八一五 | 一、一四六五二〇 | △二四七〇五 |
| 第二項　通常會員會費 | 二三〇〇〇〇 | | 二三〇〇〇〇 | 二三〇〇〇〇 | 〇 |
| 第三項　資金利子 | 八五三五〇〇 | | 八五三五〇〇 | 八六六〇〇〇 | △一二五〇〇 |
| 第四項　春季運動會乘艇申込料 | 三五七一五 | | 三五七一五 | 四七八〇〇 | △一二〇八五 |
| 第二欵　元校友會以前ニ於ケル北辰會殘金繰入 | 一二六〇〇 | | 一二六〇〇 | 一二七二〇 | △〇二二〇 |
| 收入合計 | 〇 | | 〇 | 七二五七七 | △七二五七七 |
| 支出ノ部 | 一、一二八一五 | | 一、一二八一五 | 一、二九〇九七 | △九七二八二 |
| 第一欵　經常支出 | | | | | |
| 第一項　講話部費 | 九一〇五三五 | | 九一〇五三五 | 八五二六〇六 | 五七九二九 |
| 第二項　演說討論部費 | 二五〇〇 | | 二五〇〇 | 一〇九〇 | 一四一〇 |
| 第三項　語學部費 | 三五〇〇 | | 三五〇〇 | 二一五〇 | 一三五〇 |
| 第四項　雜誌部費 | 一二〇〇〇 | | 一二〇〇〇 | 七一九〇 | 四八一〇 |
| 第五項　弓術部費 | 二七五八三五 | | 二七五八三五 | 二五三八三三 | 二三〇〇二 |
| 第六項　劒道部費 | 一八〇〇〇 | | 一八〇〇〇 | 一七九二〇 | 〇〇八〇 |
| 第七項　柔道部費 | 三三一〇〇 | | 三三一〇〇 | 三二六一五 | 〇四八五 |
| | 三〇〇〇〇 | | 三〇〇〇〇 | 二八九七九 | 一〇二一 |

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第八項　ベースボール部費 | 三八五〇〇 | | 三八五〇〇 | | 三六九七五 | | 一五一五 |
| 第九項　ロンデニース部費 | 六三三〇〇 | | 六三三〇〇 | | 六二九九〇 | | 〇三一〇 |
| 第十項　フートボール部費 | 一一六〇〇 | | 一一六〇〇 | | 一〇二八〇 | | 一三一〇 |
| 第十一項　遠足部費 | 二五五〇〇 | | 二五五〇〇 | | 二三〇三五 | | 二四六五 |
| 第十二項　漕艇部費 | 八八七〇〇 | | 八八七〇〇 | | 八三九七六 | | 四七二四 |
| 第十三項　春季運動會費 | 一〇〇〇〇〇 | 九一七五 | 一〇九一七五 | | 一〇九一七五 | 〇 | |
| 第十四項　秋季運動會費 | 二〇〇〇〇〇 △ | | 一九〇八二五 | | 一七七七八 | | 一三〇四七 |
| 第十五項　會務費 | 八〇〇〇 | | 八〇〇〇 | 四六二〇 | 四六二〇 | | 三三八〇 |
| 第二款　臨時支出 | 四〇七五〇 | | 四〇七五〇 | | 三四〇〇〇 | | 六七五〇 |
| 第一項　ベースボール部費 | 二九七五〇 | | 二九七五〇 | | 二三〇〇〇 | | 六七五〇 |
| 第二項　ロンデニース部費 | 一一〇〇〇 | | 一一〇〇〇 | | 一一〇〇〇 | | 〇 |
| 第三款　豫備費 | 一〇五三〇 | | 一〇五三〇 | 八八〇〇 | 八八〇〇 | | 一〇一七三〇 |
| 第四款　端艇新造基金 | 六〇〇〇〇 | | 六〇〇〇〇 | | 〇 | | 六〇〇〇〇 |
| 支出合計 | 一、一二二八一五 | | 一、一二二八一五 | | 八九五四〇六 | | 二六四〇九 |

# 投書心得

一投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし

一長文と雖も全文を寄贈せされは掲載せぎ

一雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ぎ編輯委員まで御報道あるべし

一學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論し或は德義に背くものは一切掲載致さゞるべし

明治三十五年十二月六日印刷
明治三十五年十二月九日發行

編輯兼發行者　吉村政行　石川縣金澤市早道町五十六番地
印刷者　生沼倍男　同縣同市穴水町二番丁廿九番地
印刷所　明治印刷株式會社　同縣同市高岡町九十番地
發行所　第四高等學校校友會